

茨城県教育財団文化財調査報告第199集

# 梶内向山遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車国道常磐自動車道  
つくばジャンクション(仮称)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 15 年 3 月

国土交通省常総国道工事事務所  
日 本 道 路 公 団  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第199集

かじ うち むかい やま  
梶内山遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車国道常磐自動車道  
つくばジャンクション(仮称)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 15 年 3 月

国土交通省常総国道工事事務所  
日 本 道 路 公 団  
財団法人 茨城県教育財団



梶内向山遺跡居館跡全景（南西方向から）



梶内向山遺跡調査Ⅰ区遠景（居館跡埋め戻し後）

## 序

茨城県南部のつくば周辺地域には、国の首都圏整備計画による「土浦・筑波業務核都市構想」が計画されております。

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション（仮称）の建設は、県南・県西の交通の円滑化と、交流・連携が強化され、地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的に計画されたものであります。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である梶内向山遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省並びに日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成12年10月から12月、平成13年2月から9月、平成14年1月から2月と4月から5月まで発掘調査を実施いたしました。

本書は、梶内向山遺跡の調査成果を収録したものでありますが、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省並びに日本道路公団からいただいた多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 齋藤佳郎

## 例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局（常総河道工事事務所）並びに日本道路公団東京建設局（水戸工事事務所）の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年度から平成14年度にかけて発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字堀内に所在する堀内向山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成12年10月1日～12月31日、平成13年2月1日～9月30日、平成14年1月1日～2月28日  
平成14年4月1日～5月31日  
整理 平成14年4月1日～平成15年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、平成12年10月1日～12月31日までは鈴木美治調査第二課長の指揮のもと、平成13年2月以降は阿久津久調査第一課長の指揮のもとに行われた。担当は以下のとおりである。  
平石尚和主任調査員 平成12年10月1日～10月31日  
吉野和一郎調査員 平成12年10月1日～12月31日、平成13年2月1日～2月28日  
松浦敏主任調査員 平成12年11月1日～12月31日  
海老澤稔調査第1班長 平成13年2月1日～3月31日  
川津法伸首席調査員 平成13年2月1日～3月31日  
○ 調査第2班長 平成13年4月1日～9月30日、平成14年1月1日～2月28日、4月1日～5月31日  
成島一也主任調査員 平成13年3月1日～3月31日  
川村満博主任調査員 平成13年4月1日～9月30日  
浦和敏郎副主任調査員 平成13年4月1日～9月30日  
鹿島直樹調査員 平成13年4月1日～9月30日、平成14年4月1日～5月31日  
宮田和男主任調査員 平成13年4月1日～7月31日  
島田和宏主任調査員 平成13年8月1日～8月31日、平成14年1月1日～2月28日  
近藤恒重主任調査員 平成13年8月1日～8月31日  
青木仁昌主任調査員 平成14年1月1日～2月28日  
荒時克一郎副主任調査員 平成14年4月1日～5月31日
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、丸吹堅整理第二課長の指揮のもと、川村満博首席調査員が平成14年4月1日から平成15年3月31日まで執筆・編集、島田和宏主任調査員が平成14年4月1日から8月31日まで執筆を担当したが、執筆分担は以下の通りである。  
川村 第1章～第3章第2節、第3節1(1)、2(1)の第38・40～58・61～65・68～76号住居跡、3、4(2)～(4)、5、第4節  
島田 第3章第3節1(2)、2(1)の第22～37・39・59・60・81～90・96～98号住居跡、4(1)
- 5 居館の調査については国立歴史民俗博物館教授阿部義平氏に御指導をいただいた。また、本書の作成にあたり、福島県耶麻郡塩川町教育委員会和田聡氏、河沼郡会津坂下町教育委員会吉田博行氏、常清市民俗資料館中野晴久氏からご助言をいただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、関係各機関並びに関係各位から御指導・御協力を賜った。ここに深く感謝の意を表します。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ区座標を原点とし、 $X = +3,760\text{m}$ 、 $Y = +26,520\text{m}$ の交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

なお、調査の便宜上、北からおおよそ、I～L区をⅠ区、B～F区をⅡ区に区分けした。

- 2 抄録の北緯及び東経の覧には、世界測地系に基づく緯度・経度を( )を付して併記した。  
3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 掘立柱建物跡-SB 構列-SA 土坑-SK 溝・堀-SD ビット-P  
井戸跡-SE 不明遺構-SX  
土層 擾乱-K

- 4 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 焼土・釉・赤彩 ■ 灰・繊維土器断面・根石 ■ 竈部材・黒色処理・粘土・炭化材 ■ 油煙・煤  
● 土器 ▲ 土製品 ■ 石器・石製品 △ 金属器・金属製品 ★ 木製品 □ 骨片

- 5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。  
6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。  
7 遺構・遺物実測図及び遺物観察表等の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。  
(1) 遺構全体図は40分の1、遺構は原則的に60分の1に縮尺して掲載した。種類や大きさにより異なる場合もある。  
(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。  
(3) 「主軸」は、炉・竈を持つ窪穴住居跡については炉・竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例  $N-10^{\circ}-E$ 、 $N-10^{\circ}-W$ )。  
(4) 土器の計測値は、口径、器高、底径とし、単位はcmである。また、現存値は( )で、推定値は[ ]を付して示した。  
(5) 遺物観察表の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。  
(6) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に付した番号は同一とした。

## 抄 録

ふりがな	かじうちむかいやまいせき							
書名	梶内山遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション(仮称)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第199集							
著者名	川村 満博 島田 和 宏							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査 面積	調査原因
梶内山 遺跡	茨城県つくば市 大字梶内字キノ サキ 197番地の11ほか	08220 —464	36度 11分 42秒	140度 9分 10秒	17.0 19.9 m	20001001～ 20001231, 20010201～ 20010930, 20020101～ 20020228, 20020401～ 20020531	38.3 86㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション(仮称)建設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
梶内山遺跡	集落跡	古墳	堅穴住居跡	28軒	土師器(坏, 甗, 高坏, 埴, 鉢,	古墳時代 中・後期, 奈良・平安 時代, 中・ 近世の複合 遺跡である。 二重の 堀で区画され た古墳時代の 後期の居 館跡と, 中・ 近世の掘立 柱建物跡群・ 墓跡が検出され ている。		
			堀	3条	甗, 甗), 須恵器(高坏, 壺, 平			
			方形堅穴遺構	2基	甗, 甗)			
	不明遺構	1基						
	奈良・平安	堅穴住居跡	70軒	土師器(坏, 高台付坏, 甗, 甗),				
掘立柱建物跡			1棟	須恵器(坏, 壺, 甗, 高台付坏,				
中・近世	掘立柱建物跡	井戸跡	2基	甗, 甗), 土製品(球状土鍾)				
		16軒	陶磁器(片1鉢, 甗, 鉢, 折縁					
		欄列跡	1条	深皿, 青磁, 白磁)				
		井戸跡	17基	土師質土器(小皿)				
		土抗	4基					
幕城	近世	土塙	溝	53基	陶磁器(擂鉢, 染付), 土師質土			
			溝	1条	器(小皿), 古銭, 人骨			
その他	時期不明		土坑265基, 溝21条, 不明遺構1基					

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	11
1 古墳時代の遺構と遺物	11
(1) 居館と遺物	11
(2) 居館以外の遺構と遺物	84
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	102
(1) 竪穴住居跡	102
(2) 掘立柱建物跡	208
(3) 井戸跡	209
3 中・近世の遺構と遺物	210
(1) 掘立柱建物跡	210
(2) 欄列跡	233
(3) 井戸跡	234
(4) 土墳墓	244
(5) 溝	280
4 その他の遺構と遺物	288
(1) 土坑	288
(2) 溝	324
(3) ビット群	326
(4) 不明遺構	327
5 遺構外出土遺物・遺構一覧表	329
第4節 まとめ	347
写真図版	



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成10年1月7日、建設省（現国土交通省）関東地方建設局常総国道工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設工事地内における埋蔵文化財の所在の有無と、その取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年6月7日に現地踏査を実施し、同年7月10日から13日と7月19日に試掘を行った結果、同年8月10日、茨城県教育委員会教育長から建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに、事業地内に概内向山遺跡が所在する旨回答した。

平成12年8月21日、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。これを受けて、平成12年8月30日、茨城県教育委員会教育長から建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成12年8月30日、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、事業地内における埋蔵文化財（概内向山遺跡）について協議書が提出された。同年8月31日、茨城県教育委員会教育長から建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団を照会した。

## 第2節 調査経過

概内向山遺跡の発掘調査は、平成12年10月1日から平成14年5月31日までの間に断続的に1年3か月にわたって実施した。以下、調査経過について、表に示す。

	平成12年			平成13年									平成14年			
	10月	11月	12月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	1月	2月	4月	5月	
調査準備	<input type="checkbox"/>											<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>		
表土除去	I・II区							II区				I・II区				
確認調査	I・II区							II区				I・II区				
遺構調査				I区・II区										II区	I区	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

堀内向山遺跡は、茨城県つくば市大字堀内字キノサキ197番地の1ほかに所在し、霞ヶ浦西岸から約10km西、平久沼北岸から約8.5km北に位置している。

当遺跡周辺は、北西部から南東部にかけて鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地が開け、北東部には常総台地の一部である筑波・稲敷台地が広がっている。この台地の標高は20～25m前後で、台地の縁辺部は北西から南東方向に流れる桜川、小野川、東谷田川、西谷田川とその支谷による浸食が進んでいる。

筑波・稲敷台地の地質は、新生代第四紀更新世に形成された層が基盤となっている。地層は下層から龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層が順次堆積している。

当遺跡は小野川左岸の標高17～20mの洪積台地上に位置している。この台地はほぼ平坦であり、1～2mの比高をもって小野川に流れる沖積地に臨んでいる。調査前の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境

堀内向山遺跡〈1〉は小野川上流の、東谷田川下流まで西へ約3.5km、乙戸川上流まで東へ約2km、花室川中流まで東へ約4.5kmの地点に位置している。周辺で確認されている遺跡は、ほとんどがこれら中小河川の流域に点在しており、これまでに調査が行われた遺跡も多い。

ここでは、当遺跡と関連する古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の主な周辺遺跡について、小野川流域を中心に述べることにする。

#### (1) 古墳時代

古墳時代になると鉄製品の普及によって荒地の開拓も進み、谷津に面した台地に集落が形成されて、谷田の経営にも手を加え始めた。また、最初周溝墓が造られていたものが、濃尾平野の勢力が浸透すると前方後方墳があらわれ、次の畿内勢力の浸透とともに県内各地に前方後円墳や円墳などが造られ始める。また、茨城町奥谷遺跡、那珂町森戸遺跡、石下町因生遺跡などには、前期から中期にかけての店舗が登場する。中期中葉には各地点ごとに支配していた首長者が統合され、地域的なまとまりが生まれた。各地の国造たちは国内に巨大な古墳を造営したが、それらはほとんどが主要河川の近くにおいて、低湿地を見渡せる台地上に古地されており、支配層が交通網を掌握していた結果と考えられる。

小野川流域は、当遺跡を中心に見ると、北西に約2km、南東に約7kmの流域に20か所以上の遺跡が散らばっており、それらの内、集落跡では行人田遺跡〈4〉、馬場遺跡〈5〉、下人井遺跡〈6〉が調査されており、行人田遺跡は前期、馬場遺跡と下大井遺跡は中期から後期にかけての集落跡であることが判明している。また、古墳群は、当遺跡から0.5km南西に下横場古墳群〈2〉、0.8km北西に赤塚駒形古墳群〈3〉、3km南に五十塚古墳群〈7〉と下大井古墳群〈8〉の4か所が確認されている。また、下横場古墳群では古墳5基（前方後円墳2、円墳23、割平32）が確認されており、6世紀初頭から7世紀末にわたる時期設定がなされている。当古墳群では、人物埴輪や円筒埴輪が出土しており、No.3・19・34・35墳からは箱式石棺が検出されている。これらの規模は、大半が直径10m程度の円墳である。また、五十塚古墳群からは前方後円墳が確認されている。これらの中で、当遺跡に最も近い位置に所在するのは、赤塚駒形古墳群と下横場古墳群である。赤塚駒形古墳群

は当遺跡と同じく小野川左岸流域に位置し、円墳3基が確認されており、対岸の下横場遺跡とは直線で約0.8kmの距離にある。また、下人井古墳群と五十塚古墳群は互いに直線距離で0.5kmの位置にあり、当遺跡からは若干離れた位置に遺地されている。

東谷田川下流域では、牛久沼へ注ぐ河口から北西へ約6kmの範囲に15遺跡が確認されている。それらの内、当遺跡から3.3km西には羽成古墳群(9)が所在し、前方後円墳1基、円墳6基が確認されている。

乙戸川上流域では、乙戸沼から南東へ約4kmの範囲に9遺跡が確認されている。それらの内、中下横遺跡(10)、西ノ原遺跡(11)、華入山遺跡(12)が調査されており、それぞれ中期を主体とする集落跡である<sup>9)</sup>。古墳群では円墳4基から構成される内記古墳群(13)が所在し、2m幅の円溝をもつ古墳や箱式石棺を有する古墳が確認されている<sup>9)</sup>。また、小野川と乙戸川の中間位置には、ヤツノ上遺跡(14)とヤツノ上古墳群(15)が所在する。

## (2) 奈良・平安時代

『常陸國風土記』<sup>10)</sup>によると、大化の改新以前の常陸国は新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂の六国に分かれ、それぞれの国造によって支配されていた。それが、大化の改新によって常陸国に統合され、それまでの国は評、後に郡に改められた。当初、当地域は筑波郡内であったが、後に分郡して河内郡に編入された。河内郡の郡衙はつくば市金田台が所在地と想定されており、当遺跡はそこから約7km南に位置している。また、当遺跡から約7km北西に所在する熊の山遺跡は、大形の掘立柱建物跡群も検出されている奈良・平安時代の大規模集落跡で、烏名郷の中心的集落と考えられている。

当遺跡を中心に小野川流域を見ると、北西に約1km、南東に約3kmの流域には4遺跡が点在するだけで、古墳時代に比べると遺跡数は激減する。南東2.5kmの下大井遺跡では、「土寺」「土家」と書かれた黒土器や、鉄鉢、三彩陶器が出土し、一般集落と考えられない点が興味深い<sup>9)</sup>。

東谷田川下流域では、牛久沼の河口から北西へ約5kmの範囲に12遺跡が確認され、古墳時代と比べてその様相にはあまり変化は見られない。

乙戸川上流域では、乙戸沼から南東へ約2kmの範囲に2遺跡が点在するだけで、やはり遺跡数は減少する。

## (3) 中・近世

県内では各地の荘園開発が進み、当遺跡を荘域にしている田中荘は、常陸平氏本宗の多気氏が開発して鎌倉幕府成立後に八田(小田)氏、霜月頼勤後は北条得宗家の手に移るが、中世後期には小田氏の影響下にあったと考えられる。江戸幕府の成立後に当遺跡周辺は旗本領となり、山良氏の所領として続く。

小野川河口の古渡津は、14世紀半ば頃には権現堂、阿彌陀堂などの小堂が数多く建てられて在家がかなりの数存在したものと想定され、小野川水系を利用した交易により、霞ヶ浦の主要な港として栄えていたことが窺える。

当遺跡を中心に小野川流域を見ると、北西に約2km、南東に約7kmの流域に12遺跡が所在する。それらの内、稲岡遺跡(16)は中世末期から近世初期にかけての墓域<sup>11)</sup>であり、下大井遺跡も中世末期の墓域<sup>12)</sup>である。また、穂の沢久保遺跡(17)は、近世を中心とした屋敷跡である<sup>13)</sup>。これらの流域では、城館跡は少なく、4.5km北の小野崎館跡(18)まで城館跡は確認されていない。

註

1) 茨城県教育財団「牛久北特定上地区西整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨

茨城県教育財団文化財調査報告」第106集 1996年

2) 同書

3) 茨城県教育財団「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 下大井遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第171集 2001年

4) 河野辰男他「下横場古墳群 実測調査及び第51号墳保存調査報告書」谷田部町(現つくば市)教育委員会 1982年  
〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第166集 2000年

5) 茨城県教育財団「牛久東下根特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 華人山遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第113集 1996年

6) 阿見町史編さん委員会『阿見町史』阿見町教育委員会 1983年

7) 中山信名『新編常陸国誌』嵩書房 1964年復刻

8) 註3)同書

9) 茨城県教育財団「稲岡遺跡 一般国道6号牛久土浦バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第187集 2002年

10) 註3)同書

11) 茨城県教育財団「櫛の沢久保遺跡 - 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第186集 2002年

#### 参考文献

- ・ 大山年次、蜂須紀夫『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1977年
- ・ 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年
- ・ 竹内理三編『角川日本地名大辞典 8茨城県』角川書店 1973年
- ・ 茨城県史編集委員会『茨城県史 原始古代編』茨城県 1985年
- ・ 茨城県史編さん原始古代史部会『茨城県史料 古代編』茨城県 1968年
- ・ 塚作宗編著『常陸の歴史』講談社 1977年
- ・ 所理喜大他『図説 茨城県の歴史』河出書房新社 1995年



第1図 梶内向山遺跡周辺遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代						
		旧 石 器	縄 文 器	弥 生	古 墳	奈 平	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文 器	弥 生	古 墳	奈 平	中 世
①	堀内向山遺跡	○		◎	◎	◎	◎	32	大井遺跡	○			○	○	○	○
2	下横場古墳群				○			33	下横場南の前遺跡	○			○	○		○
3	赤塚駒形古墳群				○			34	下横場山王前	○						○
4	行人田遺跡				○	○	○	35	南中妻門遺跡						○	○
5	馬場遺跡	○			○	○	○	36	榎戸大境遺跡	○					○	○
6	下大井遺跡	○	○		○	○	○	37	中内西ノ妻遺跡				○			○
7	五十塚古墳群				○			38	小野崎宿遺跡						○	○
8	下大井古墳群				○			39	小基南遺跡	○			○	○	○	○
9	羽成古墳群				○			40	小基北遺跡	○			○	○	○	○
10	中下根遺跡	○			○	○		41	桶荷山古墳群	○			○			○
11	西ノ原遺跡	○	○		○			42	六斗遺跡	○			○			○
12	牟人山遺跡	○			○	○		43	駒込遺跡	○			○	○	○	○
13	内記古墳群				○			44	九方坪遺跡							○
14	ヤツノ上遺跡	○			○	○		45	房内貝塚	○			○	○	○	
15	ヤツノ上古墳群				○			46	谷田部長堀南遺跡	○			○	○	○	
16	桶岡遺跡						○	47	谷田部長堀北遺跡				○			
17	樋の沢久保遺跡	○					○	48	谷田部第六天下遺跡	○			○	○	○	
18	小野崎館跡						○	49	羽成谷津台遺跡				○	○		
19	新牧田遺跡				○			50	羽成北久保南遺跡				○	○		
20	桶岡八方塚群						○	51	羽成北久保北				○	○	○	
21	下横場遺跡				○			52	谷田部山崎遺跡	○			○			
22	南中妻新田後遺跡				○	○	○	53	東丸山屋中遺跡	○			○			
23	大久保遺跡				○			54	谷田部長堀貝塚	○					○	
24	細谷原遺跡	○			○			55	東丸山貝塚	○			○			
25	赤塚前口遺跡				○			56	小基貝塚				○			
26	赤塚駒形遺跡				○			57	庄兵衛新田遺跡	○			○	○		
27	赤塚八木遺跡				○			58	高山遺跡	○			○			
28	箱野久保遺跡				○		○	59	後門遺跡	○			○	○		
29	小野崎遺跡	○	○					60	鑿ノ内遺跡				○			
30	市ノ台葉ノ木台遺跡				○			61	内記遺跡	○			○	○		
31	市ノ台屋敷遺跡				○		○	62	中根遺跡				○			

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

観内山遺跡は、小野川左岸の標高17~20mの低位段丘上に位置する。調査区域は、常磐自動車道を挟んで南側と北側に分かれており、便宜的に南側を調査Ⅰ区、北側を調査Ⅱ区とし、当遺跡は古墳時代中期・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡で、調査Ⅰ区から古墳時代後期の居館跡、奈良・平安時代の集落跡、中世前期の掘立柱建物跡群、中世末期から近世初期にかけての墓域、調査Ⅱ区では古墳時代中期・後期と奈良・平安時代の集落跡が確認された。調査区域は総面積38,386㎡で、現況は畑である。

今回の調査によって、古墳時代の住居跡28軒・堀3条・方形堅穴遺構2基・不明遺構1基、奈良・平安時代の住居跡70軒・掘立柱建物跡1棟・井戸跡2基、中・近世の掘立柱建物跡16棟・欄列跡1条・井戸17基・土壇墓53基・上杭4基・溝8条、時期不明の上杭263基・ピット群2か所・不明遺構4基が検出された。

遺物は、縄文土器片（深鉢）、土師器（坏、高台付坏、碗、高坏、埴、鉢、甕、甗、三足鍋、手握土器）、須恵器（坏、高台付坏、盤、蓋、高坏、平瓶、甕、甗）、土師質土器（かわらけ）、陶磁器（常滑片口鉢、常滑甕、古瀬戸卸皿、古瀬戸折縁深皿、古瀬戸縁軸小皿、瀬戸・美濃銅鉢、竜泉窯青磁）、土製品（球状土鍾、支脚、泥面子）、石器・石製品（尖頭器、磨石、敲石、凹石、砥石）、古銭（開元通宝、淳熙元宝、治平元宝、天聖元宝、景祐元宝、至和通宝、嘉祐元宝、元豊通宝、宣和元宝、洪武通宝、永樂通宝、寛永通宝）、人骨等が出土し、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）約130箱に収納された。

### 第2節 基本層序

調査Ⅰ区内（I 2 h7区）と調査Ⅱ区（C 9 c0区）にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第2図）。

#### 調査Ⅰ区

第1層は、黒色の耕作土で、厚さは20~35cmである。

第2層は、暗褐色のソフトローム層で、厚さは5~25cmである。

第3層は、褐色のハードローム層で、第1黒色帯を含むと思われる、厚さは0~18cmである。

第4層は、褐色のハードローム層で、第3層よりもやや色調が明るく、部分的に確認され、厚さは0~22cmである。

第5層は、明褐色のローム層で、上部に始良 Tn 火山灰を含むと考えられ、厚さは18~40cmである。

第6層は、暗褐色のローム層で、赤色スコリア・流沼土を含む。上部には第2黒色帯を含むと考えられ、厚さは14~35cmである。ここまでが立川ローム層と考えられる。

第7層は、鈍い黄褐色のローム層で、粘性、締まりとも強い。立川ローム層の下に武蔵野ローム層は明確には確認することができなかった。この層の中に武蔵野ローム層が含まれている可能性も考えられるが、分層できなかった。おそらく、この層から常総粘土層が始まると考えられ、厚さは12~34cmである。

第8層は、灰白色の粘土層で、常総粘土層であり、厚さは50cm以上である。

住居跡などの遺構は、第2層上面で確認した。

## 調査Ⅱ区

第1・2層は、黒褐色と黒色の耕作土で、厚さはそれぞれ12～22cm、5～18cmである。

第3層は、極暗褐色の層で、新期テフラを含む可能性も考えられ、厚さは5～22cmである。

第4層は、黒褐色の層で、第1層よりもやや色調が明るく、厚さは5～24cmである。

第5層は、暗褐色の漸移層またはソフトローム層で、厚さは0～15cmである。

第6層は、褐色のソフトローム層で、部分的に確認され、厚さは0～10cmである。

第7層は、明褐色のハードローム層で、厚さは3～30cmである。

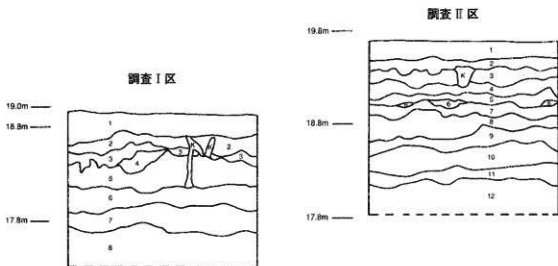
第8層は、明黄褐色のローム層で、始良T n火山灰を含むと考えられ、厚さは4～30cmである。

第9層は、褐色のローム層で、赤色スコリアが確認されることから、ここまでは立川ローム層と考えられ、厚さは0～30cmである。

第10・11層は暗褐色と黄褐色のローム層で、固く締まっている。層位が安定しているため、武蔵野ローム層の可能性も考えられるが、この層から水が湧き出し、十分な観察ができなかった。厚さはそれぞれ0～27cm、5～25cmである。

第12層は、黄褐色の粘土層で、常総粘土層と考えられ、厚さは40cm以上である。

住居跡などの遺構は、第3層の上面で確認した。

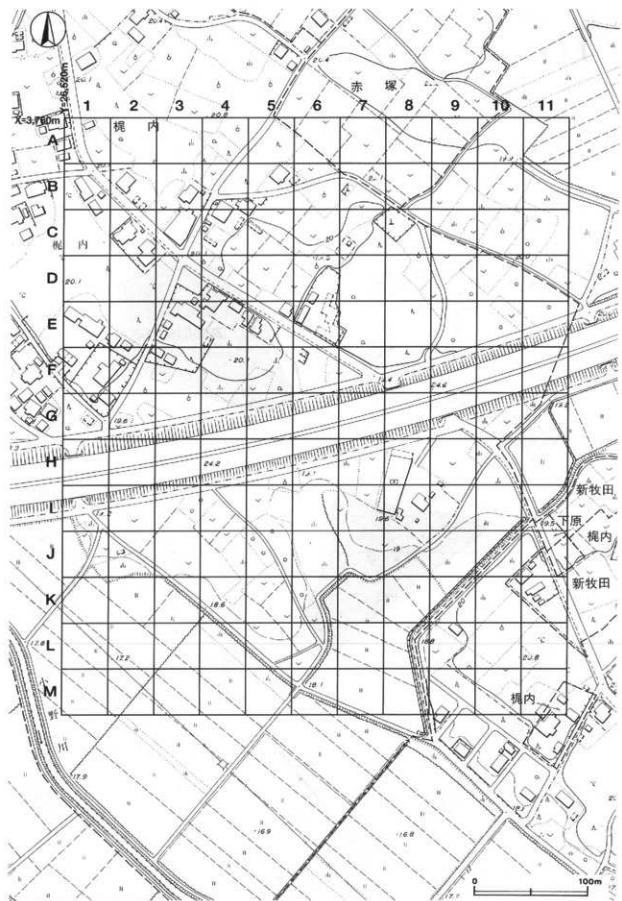


第2図 基本土層図





第3図 梶内向山遺跡調査区設定図



第4図 梶内向山遺跡グリッド設定図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の遺構は竪穴住居跡2軒、堀3条（居館跡）、方形竪穴遺構2基、不明遺構1基が確認された。その中で、第1～17・19～21号住居跡と第6号不明遺構は、第1～3号堀とともに居館を構成する遺構と考えられる。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

なお、第11号住居跡は後述する理由で居館が構築される以前の遺構と考えられるが、古墳時代の遺構で内郭に位置していることから、ここで取り扱った。

##### (1) 居館と遺物

###### ① 居館の構造（第6図）

**位置** 小野川の氾濫原中に張り出した舌状で高状を呈する微高地南東端の調査I区南東部K4a6～L6j7区に位置し、二重の堀と住居跡で構成される。古墳時代後期の遺構は、居館外周辺では第36号住居跡が50mほど北に存在するだけである。北側以外は調査区域外のため明確ではないが、東側には低台地を開削する谷津が入り込み、西及び南側は当時は湿地と推定される小野川の氾濫原で、いずれも現況は水田である。

**形状（構造）** 上幅7～10m、深さ平均約1mの二重の堀によって区画されている。外堀（第1・3号堀）を含めた規模は、長軸方向の長さが約110m、短軸方向の長さが約65mの長方形で、長軸方向はN-40°-Wであり、内堀（第2号堀）の規模は約65m四方の方形である。また、居館内の面積は約5,980㎡、内堀内部の面積は約2,350㎡である。

外堀はそれぞれ内堀の北西辺と南東辺に平行し、北東方向から南西方向に向かって直線的に延びている。第3号堀の北東側には外堀は延びず、地山が東側の湿地に向かって緩やかに傾斜していることがトレンチ調査の結果確認された。居館内の標高は17.8～18.6mで、北部から南東部、及び中央部から北東部と南西部にかけて緩やかに傾斜している。

**内部施設** 外堀と内堀の距離は12～15mであるが、その区域には同時期の遺構は確認されていない。北西側外堀の第3号堀の内側中央部には張り出し部がみられ、また、内堀の北西辺と南東辺の中央部には土橋が構築されている。さらに北東辺にはスロープ状施設が確認されている。内堀で区画された内部では、5世紀後半と6世紀中葉から6世紀末葉の住居跡20軒が確認されており、この時期以外の住居跡は検出されていない。また、掘立柱建物跡や欄列跡、布張り状遺構、土塁などの施設は確認されていないが、第1号堀と2号堀の北東辺の覆土は内堀から流れ込み、第2号堀の北西辺の南西寄りや南東辺の覆土は両側からのロームの流れ込みの堆積状況を示し、内堀内部の北西部と北東部では内堀と住居跡の距離が4m以上あることや外堀と内堀の間に同時期の遺構が確認されていないことなどから、一部に土塁状の盛り土が存在した可能性も考えられる。

###### ② 外堀

###### 第1号堀（第5・6図）

**位置** 調査I区南東端部M5a0～L6f7区に位置する南東部の外堀で、北東側と南西側は調査区域外の水田である。幅は12～14mで、北西側には第2号堀の南東辺と第2号土橋が位置し、その区域には本跡と同時期の遺構は確認されていない。

**重複関係** 第1～3・81号土坑、第11号不明遺構に掘り込まれている。

**規模と形状** 堀は上幅7.0～7.4m、下幅6.4～6.8m、深さ40cmほどで、確認された長さは40mであり、N-52°-Eを指して直線的に延びている。断面形状は箱堀状を呈している。

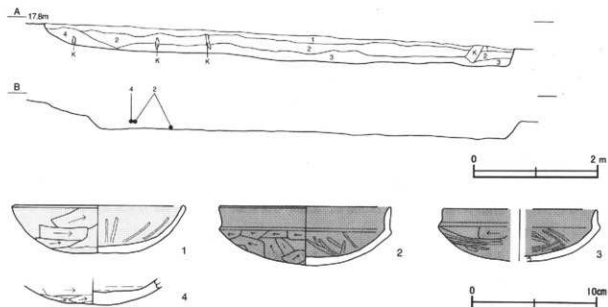
**覆土** 4層に層別され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第4層にはロームブロックが中量含まれ、内側からロームブロックが流れ込んだ状況を示している。

**土層解説**

- |       |                |       |           |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量   |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |

**遺物出土状況** 土師器片939点（坏類320、碗1、高坏5、甕・瓶613）、須恵器片8点（坏類4、蓋1、瓶1、甕1、甕・瓶1）、土製品1点（不明）が出土している。これらの遺物は、覆土上層から底面にかけて全体的に出土している。2・4は出土状況から本跡の廃絶時または廃絶直後のもので、内側側から投棄または流れ込んだものと考えられる。

**所見** 本跡は、舌状に延びた低台地の先端部を切断するように掘られており、居館の南東側を区画する外堀と考えられる。また、覆土の堆積状況から、内側に低い土塁状の盛土が存在した可能性が考えられる。出土土器から本跡は、6世紀後葉までは機能していたと考えられる。



第5図 第1号堀・出土遺物実測図

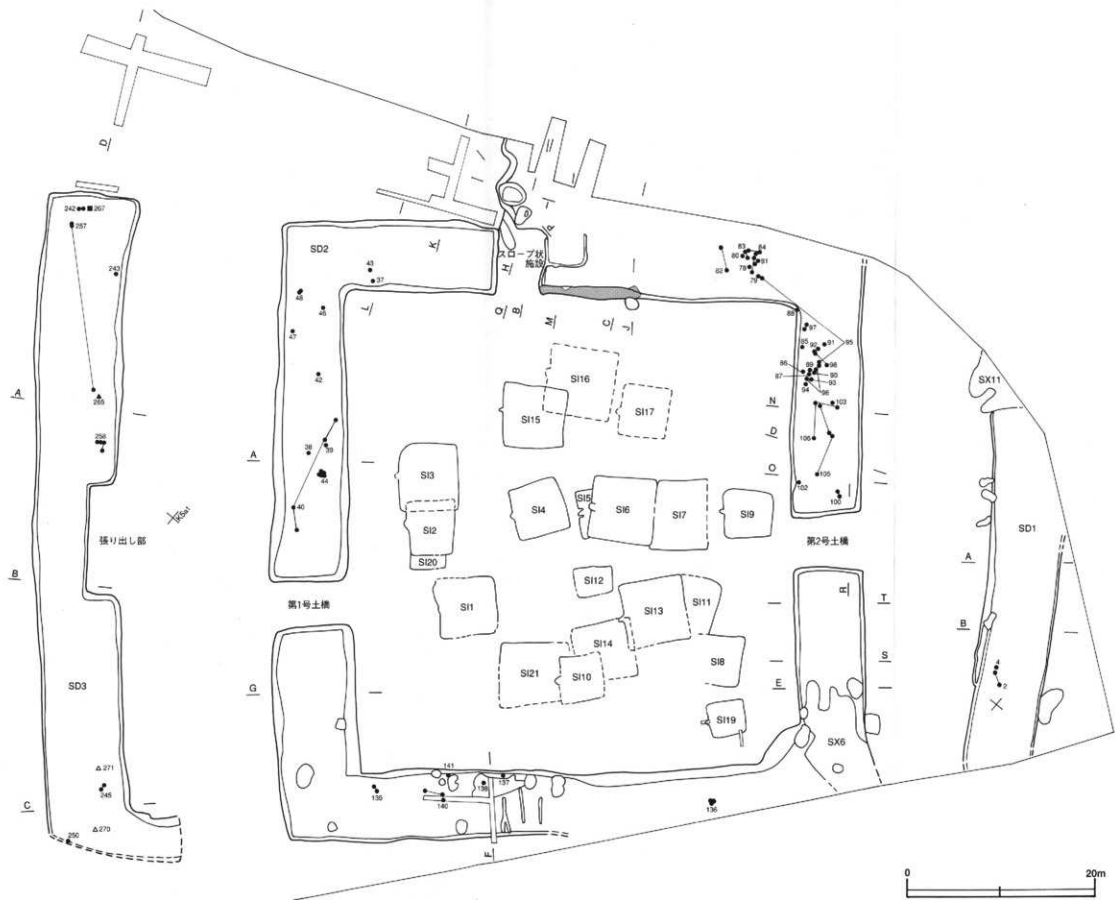
第1号堀出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.4	3.7	—	石英・砂粒	赤褐	普通	内・外面摩耗	覆土中	85% PL36
2	土師器	坏	13.4	4.7	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面摩ナデ、内面摩耗	内側壁・底面	90% PL36
3	土師器	坏	[12.2]	(4.1)	—	細粒赤土	にぶい橙	普通	口縁部内・外面摩ナデ、外面摩耗	覆土中	40% PL36
4	須恵器	瓶	—	(1.2)	—	砂粒	灰 深緑色釉	普通	底部へラ削り	内側壁下期	10%

**第3号堀（第6～11図）**

**位置** 調査I区中央部K 4 a3～J 5 d7区に位置した北西部の外堀で、16m南東側は第2号堀の北西辺となり、その区域には本跡と同時期の遺構は確認されていない。

**重複関係** 第221・351号土坑に掘り込まれている。



第6図 居館全体図

**規模と形状** 上幅8.6～9.6m、下幅7.6～8.6m、長さは70mで直線的に延び、N-50°-Eを指している。内  
 辺側中央部に位置する張り出し部の幅は、上幅5.0～6.0m、下幅4.7～5.0mと狭くなる。深さは、中央部から  
 北東部は70～80cm、南西部は30～80cmで、確認面が南西方向に傾斜するに従い浅くなり、断面形状は箱掘状を  
 呈している。

本跡の北東側に外堀が延びることを想定してトレンチ調査を実施したが、地山は東側の湿地に向かって緩や  
 かに傾斜し、堀はここで立ち上がることが確認された。南西部は攪乱が激しいために立ち上がり明瞭には確  
 認できなかったが、南西部の確認面が、第2号堀南西辺の外辺の延長方向のライン上で西に向かって急傾斜し  
 ていることから、ここで立ち上がるものと推定される。

**張り出し部** 堀の内辺中央部が外方に向かって、幅3m、長さ11.4mの長方形に突出している。張り出し部  
 の内部や周辺からは、橋脚跡などの出入りに伴う施設の痕跡は確認されていない。

**覆土** 4～5層に分層され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。中央部の覆土(B)は、第4層に  
 ロームブロックが中量含まれ、内側からロームブロックがより多く流れ込んだ堆積状況を示している。本跡の  
 北東側に入れたトレンチ(D)は、図中の第1層が黒褐色土、第2層が黒色土の堆積土で、第3層がローム層  
 の地山である。

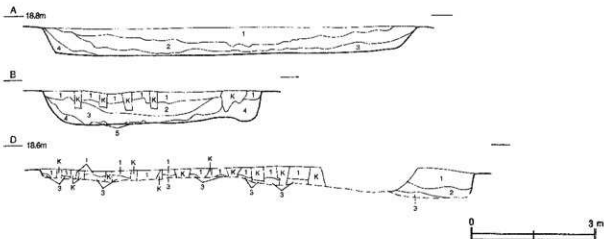
**土層解説A**

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量   | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

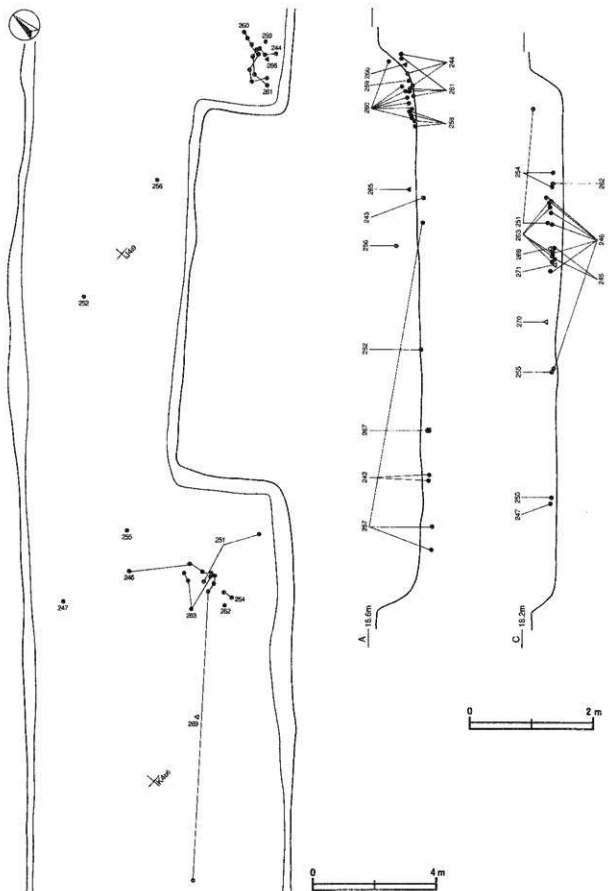
**土層解説B**

- |       |                 |       |           |
|-------|-----------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量         | 4 褐色  | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化物少量     | 5 明褐色 | 粘土ブロック多量  |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |       |           |

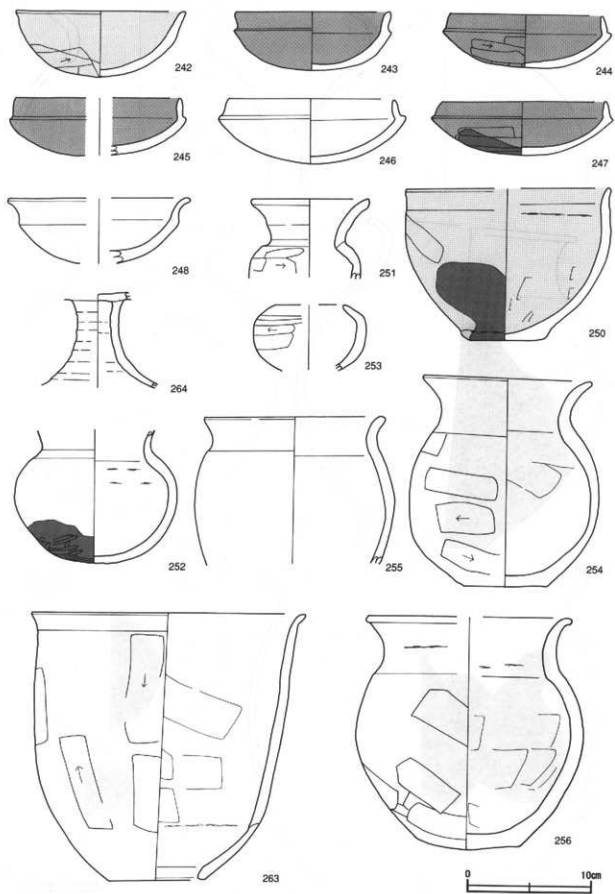
**遺物出土状況** 土師器片3,062点(坏類467, 手捏土器7, 甕・瓶2,567, 不明21), 須恵器片110点(坏類99,  
 蓋9, 短頸甕1, 瓶類1), 土製品10点(球状土錘2, 支脚8), 石器2点(砥石), 鉄滓5点が出土しており、  
 土師器片の中で底部片などから推定される器体数は坏49点、甕37点、瓶8点である。これらの遺物は、張り出  
 し部周辺の覆土下層から底面にかけて多量に出土しており、張り出し部から投棄された出土状況を示している。  
**所見** 本跡は、舌状に張り出す低台地先端部の根元を区切るように掘られており、居館の北西側を区画する外  
 堀である。遺物の出土状況から、張り出し部からの投棄が想定されるが、祭祀的な行いについては不明である。  
 また、覆土の堆積状況から、内側の一部に低い土塁状の盛土が存在した可能性が考えられる。出土土器から本  
 跡は、6世紀後葉までは機能していたと考えられる。



第7図 第3号堀尖測図(1)

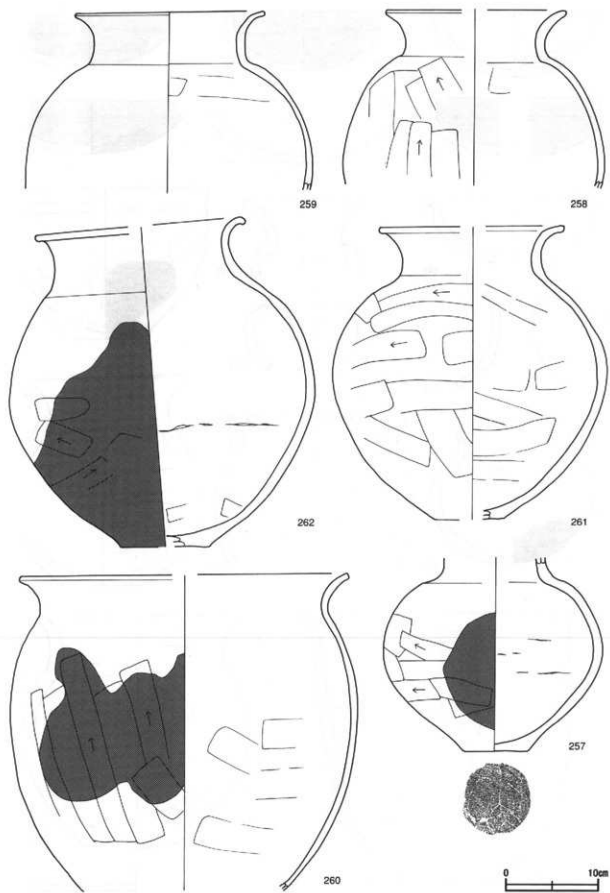


第8图 第3号堰灾测图(2)

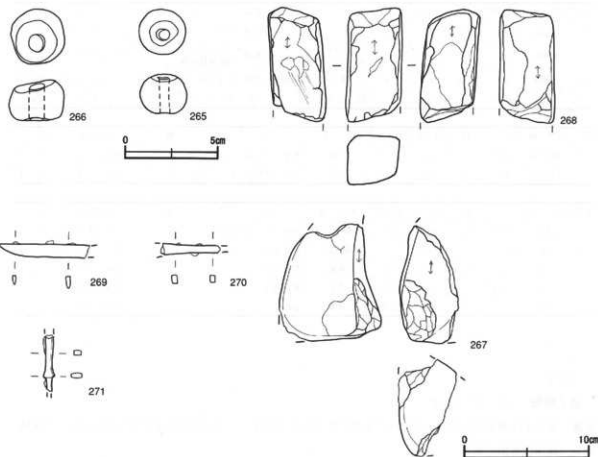


第9図 第3号掘出土遺物実測図(1)





第10图 第3号堀出土遗物实测图(2)



第11図 第3号堀出土遺物実測図(3)

第3号堀出土遺物観察表 (第9~11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
242	土師器	坏	13.7	5.3	—	砂粒	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	北東部床面	80% PL36
243	土師器	坏	12.2	4.8	—	砂粒	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面摩耗	北東部床面	80% PL36
244	土師器	坏	12.3	4.3	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ、底部外面ヘラ削り	中央部中層・下層	80% PL36
245	土師器	坏	[13.2]	4.8	—	雲母・砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ	南西部下層	50%
246	土師器	坏	13.2	5.3	—	長石・パミス	赤橙	普通	内・外面摩耗	南西部中層・下層	75% PL36
247	土師器	坏	13.0	4.4	—	砂粒・パミス	橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ、底部外面ヘラ削り	中央部下層	60%
248	土師器	坏	[14.4]	(5.2)	—	雲母・砂粒	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ	中央部中層	40%
250	土師器	鉢	[16.2]	12.3	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナデ	南西部下層	55% PL37
251	土師器	小形甕	9.0	(6.4)	—	砂粒・スコリア	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部上層・下層	60%
252	土師器	埴	—	(10.5)	—	石英・パミス	明赤褐	普通	胴部・体部内面横ナデ	中央部下層	60%
253	土師器	小形甕	[5.5]	(5.3)	—	砂・パミス	浅黄橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ	中央部覆土中	40%
254	土師器	小形甕	13.2	16.9	[6.6]	雲母・スコリア	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナデ	中央部下層	60% PL36
255	土師器	小形甕	14.6	(11.9)	—	長石・石英・パミス	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ナデ	中央部下層	40%
256	土師器	甕	[16.0]	18.7	8.3	砂粒・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部中層	60% PL36
257	土師器	甕	—	(20.5)	7.0	砂・砂・スコリア	橙	普通	体部内面ヘラナデ、輪横痕	北東部床面	65%
258	土師器	甕	[18.8]	(18.5)	—	長石・石英・パミス	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	40%
259	土師器	甕	19.6	(18.9)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面ヘラナデ	中央部下層	40%
260	土師器	甕	[33.8]	(33.3)	—	長石・石英・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	60% PL37

番号	種類	容積	口径	高さ	底径	出土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
261	土師器	壺	119.5	30.7	17.2	赤・黒・白	黒	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部中層	60% PL37
262	土師器	壺	21.0	34.5	9.3	長石・石英・スクリヤ	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、作部 内面輪積み痕	中央部下層	70% 露付 PL37
263	土師器	瓶	21.6	31.7	7.8	赤・黒・白	明赤焼	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部中層	50% PL37
264	土師器	高杯	—	(7.6)	—	赤・黒・白	黒灰	良好	口縁部内・外面口クロナデ	南東部最上層	35%

番号	器種	長さ	径	口径	底径	材質	特徴	出土位置	備考
265	球状土師	2.1	2.0	0.7	11.3	土製	外面ナデ、筋上に砂粒	北東部下層	100% PL63
266	球状土師	2.1	2.9	0.8	16.6	土製	外面へラ削り、筋上に長石・パミス	中央部中層	100% PL64

番号	器種	長さ	幅	厚さ	底径	材質	特徴	出土位置	備考
267	磁石	(9.4)	(4.8)	6.8	(32)	凝灰岩	底面3面、目が細かい	北東部床面	
268	磁石	(10.0)	4.5	3.9	(25)	凝灰岩	底面4面	層上中	PL66
269	刀子	(7.3)	(1.1)	0.4	(6.9)	鉄製	基部欠損	南西部下層	50%
270	刀子	(4.9)	(1.0)	0.4	(4.7)	鉄製	基部残存	南西部下層	30%
271	鏝	(4.7)	9.9	0.4	(2.5)	鉄製	表面	南西部下層	30%

### ③ 内堀

#### 第2号堀 (第6・12～29区)

**位置** 調査I区南東部のK4～L6区に位置した方形の内堀で、南西端部と北東部の南寄りには調査区域外に延び、現況は水田である。

**重複関係** 第311号土坑を掘り込み、第208～305・307～310・312～317号土坑、第6～9号不明遺構に掘り込まれている。

**規模と形状** 上橋とスロープ状施設を含んだ長さは北西部外辺66m・内辺51m、南西部外辺62m・内辺44m、南東部外辺60m・内辺48m、北東部外辺60m・内辺48mではほぼ方形を呈し、N-40°-Wを指している。堀は、上幅7.0～7.4m、下幅6.4～6.8m、深さ50～100cmで、断面形状は箱堀状を呈している。北東辺の南東部外壁は、トレンチを設置して調査したが確認することができなかった。北西部外片の16m北西側には第3号堀、南東部外片の12～14m南東側には第1号堀が位置し、それらの間の区域には本跡と同時期の遺構は確認されていない。また、本跡の北西辺の中央部に第1号土橋、南東辺の中央部に第2号土橋、北東辺の中央部にスロープ状施設がそれぞれ確認されている。

**土橋** 北西部に位置する第1号土橋は、上幅4.0～5.0m、下幅5.4～6.0mで台形状に地山を掘り残して構築され、南東部に位置する第2号土橋は、上幅5.8～6.0m、下幅6.4～7.0mで第1号土橋同様に地山を掘り残している。両土橋の周辺からは、門などの出入りに伴う施設の痕跡は確認されていない。

**スロープ状施設とその周辺部** 北東部に位置するスロープ状施設は、長さ7m、上幅4.6～5.1m、下幅5.4～5.9mで、北東に5～11°の傾斜を示すスロープ状を呈している。この部分の北側は、1.8～2.6mの幅で堀の外側につながっている。北東部堀の東側では外壁が確認できず、堀の底面は東側の湿地へ緩やかに傾斜しながら続いている。当初、堀は張り出し部の外側を遡ると想定してトレンチを北側に設置して調査したが、地山面が北東に緩やかに傾斜しているだけで、堀の北西部分は一且ここで立ち上がっていることが確認された。

このスロープ状施設を北東に下った堀中から、長径1.7m前後、短径1.2m前後の平面形が不整楕円形で、高さがそれぞれ70cmの突起状の土壇部2か所が確認された。これらは堀の堆積土と考えられる黒色土の上に明堀

色上と黒褐色上、褐色上を交互に積み上げて構築されており、締まりは極めて強い。これらはスロープ状施設に接していることから、同施設を拡張する目的で構築されたものと考えられる。さらにこれらの構築物を除去すると、その下面から2.1×1.3m、3.6×2.2mの不整楕円形で、深さ10・30cmの掘り込みが確認された。これらの底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに外傾している。この掘り込みの中に黒色土が堆積した後、突起状の土壇部を作ったと考えられる。しかし、これらの構築物については不明である。

また、スロープ状施設の南東側の内壁部には、長さ10.6mの範囲で、5cmほどの厚さに粘土が貼り付けられた部分が確認されている。埋め込まれたロームの下面に暗褐色の堆積土が確認されたことなどから、堀が構築された後に新たに掘り込まれた別の施設と考えられ、この部分だけが他の壁よりも堀の内側へ張り出している。また、この壁から2.6m離れた堀内に長軸4.6m、短軸3.4m、深さ25cmの竪穴状の掘り込みが確認されている。北東壁は存在しないが他壁は直立し、北東部では緩やかに傾斜する堀の底面と同レベルとなる。この竪穴状の掘り込みは、スロープ状施設の南東端部を掘り込んでいることから、堀が作られた後に掘り込まれた施設と考えられる。

覆土 堀の覆土(A~G)は3層から10層に分層され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第1号上橋の北東側(A)と南西辺中央部(D)は黒色土や極暗褐色土の堆積だけであるが、第1号土橋の北西側(G)・第2号上橋の北東側(D)・南西側(E)では両側からの流れ込みが認められ、スロープ状施設(B)と南東側(C)では内側から褐色土や暗褐色土の堆積層が確認されている。また、突起状の土壇部(II・1)では10・15層がそれぞれ堀の堆積層で、その上部が積み上げられた上である。スロープ状施設の北側に入れたトレンチ(K)では、図中の第1層が黒褐色土、第2層が黒色土の堆積土であり、第3層は地山である。

#### 土層解説A

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量   | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

#### 土層解説B

- |       |           |       |                  |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量   | 4 黒褐色 | ロームブロック微量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |       |                  |

#### 土層解説C

- |       |         |       |         |
|-------|---------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色  | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 |       |         |

#### 土層解説D

- |       |                  |      |                  |
|-------|------------------|------|------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量     | 6 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色  | ローム粒子中量、炭化物少量    | 7 褐色 | ローム粒子多量          |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量   | 8 褐色 | ローム・炭化粒子少量       |

#### 土層解説E

- |       |                     |       |                |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | 焼上粒子・炭化物少量、ローム粒子微量  | 6 褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量        | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量    | 8 褐色  | ローム粒子中量        |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼上粒子微量 | 9 褐色  | ロームブロック中量      |
| 5 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子少量    |       |                |

#### 土層解説F

- |       |                  |       |         |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量        | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |       |         |

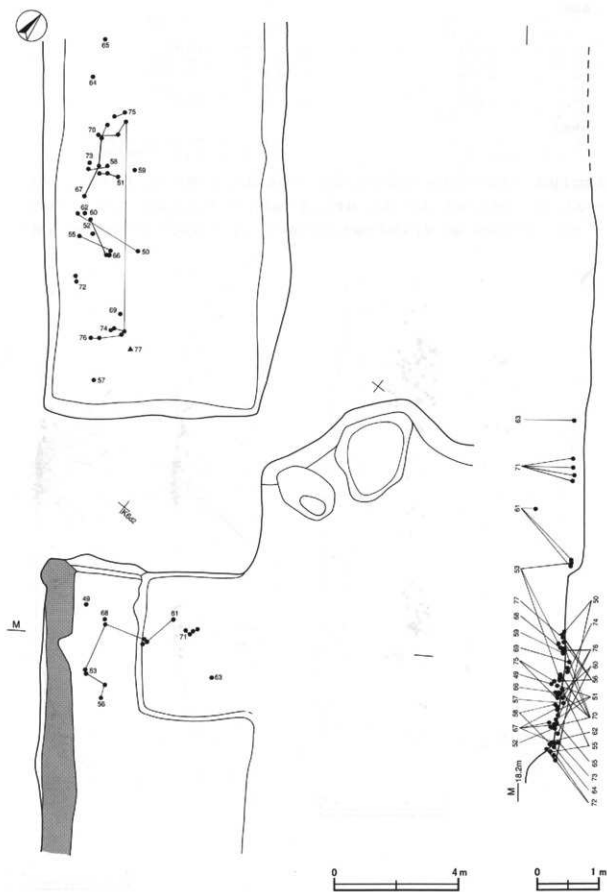
#### 土層解説G

- |       |                          |         |                  |
|-------|--------------------------|---------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量            | 6 暗褐色   | ロームブロック少量        |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量                  | 7 暗褐色   | ロームブロック少量        |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量                | 8 黒褐色   | ローム粒子少量          |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 9 にぶい褐色 | ローム粒子多量          |
| 5 褐色  | ロームブロック多量                | 10 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

#### 土層解説H

- |       |                   |        |           |
|-------|-------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック微量 | 7 暗褐色  | ロームブロック少量 |
| 2 褐色  | ロームブロック多量         | 8 暗褐色  | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量         | 9 明褐色  | ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量         | 10 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量         | 11 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 6 褐色  | ロームブロック多量         | 12 黒褐色 | ロームブロック微量 |





第13图 第2号堀穴测图(2)

土層解読I

- |   |       |           |
|---|-------|-----------|
| 1 | 褐色    | ロームブロック多量 |
| 2 | にぶい褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 | 暗褐色   | ローム粒子中量   |
| 4 | 黒褐色   | ローム粒子少量   |
| 5 | 褐色    | ローム粒子多量   |
| 6 | 暗褐色   | ロームブロック中量 |
| 7 | 黒褐色   | ローム粒子微量   |
| 8 | 暗褐色   | ロームブロック少量 |

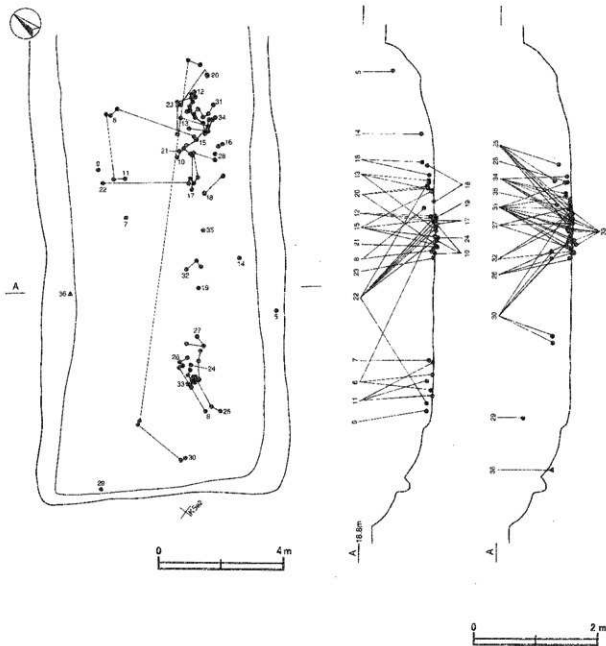
土層解読J

- |   |       |           |
|---|-------|-----------|
| 1 | 褐色    | ロームブロック多量 |
| 2 | にぶい褐色 | 砂質粘土中量    |

- |    |     |           |
|----|-----|-----------|
| 9  | 褐色  | ロームブロック多量 |
| 10 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 11 | 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 12 | 褐色  | ロームブロック多量 |
| 13 | 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 14 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 15 | 黒褐色 | ローム粒子微量   |

- |   |     |                 |
|---|-----|-----------------|
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭土粒子微量 |
| 4 | 褐色  | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片22,112点(坏類5,236, 碗15, 高坏18, 埴24, 甕・瓶16,721, 手捏土器50, その他48) 須恵器片339点(坏類56, 鉢1, 蓋8, 甕6, 瓶類7, 甕・瓶207, その他54)が出土している。これらの遺物は、第1・2号土橋河側の堀の覆土下層や底面から多く出土し、スロープ状施設でもその両側の覆土下層から

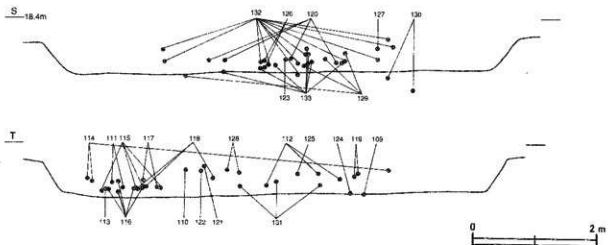
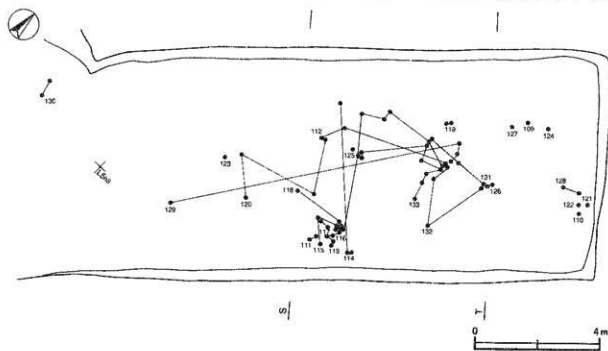


第14図 第2号堀実測図(3)

底面にかけて特に多量の出土が認められ、土橋部や内郭側から投棄された出土状況を示している。また、本跡の南コーナー部の底面は、第6号不明遺構によって掘り込まれ、そこに多量の遺物が投棄された状況で出土しているが、出土遺物は「⑤ 堀内の不明遺構」の第6号不明遺構の解説で図示した。

所見 本跡は、第1・3号堀の内側にあって、内部には同時期の住居跡が存在することから、これらを区画する内堀である。本跡の北西辺と南東辺には土橋が構築され、また、北東辺にはスロープ施設がある。これらは出入りに伴う施設と考えられ、第1号土橋と第2号土橋は線上に位置せず、外側からは互いを見通せないような構造を示している。出土土器から見ると、6世紀中葉はこれらの施設だけであったが、6世紀後葉にスロープ施設の近辺に突起状土壇部や竅穴状掘り込み、粘土貼りの塀が構築され、北東側外部への出入りに利用したと想定される。また、覆土の堆積状況から、外堀の内側や内堀の内側に低い土塁状の盛土が存在した可能性も考えられる。調査された部分において祭祀的な施設は確認されていないが、出土遺物や遺物の出土状況から、土橋やスロープ施設の周辺、さらに南コーナー部で祭祀が行われたことが考えられる。

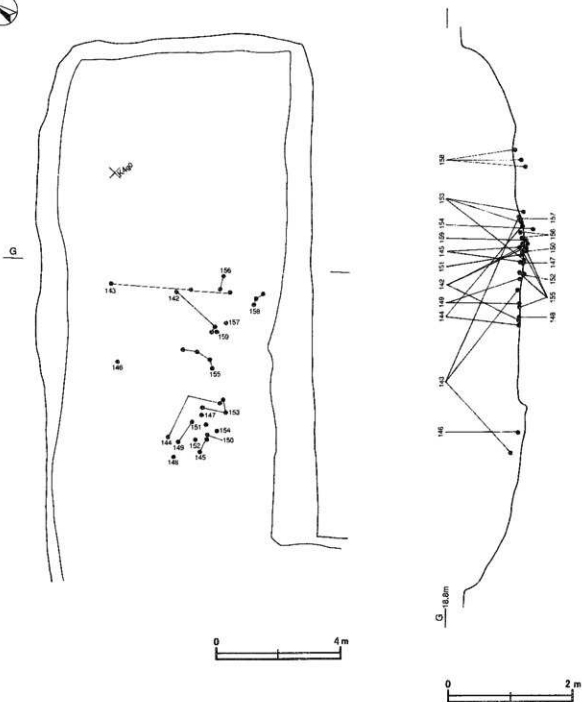
本跡からの出土土器は、6世紀後半のものが中心であり、6世紀末葉から7世紀初頭の土器も出土している。



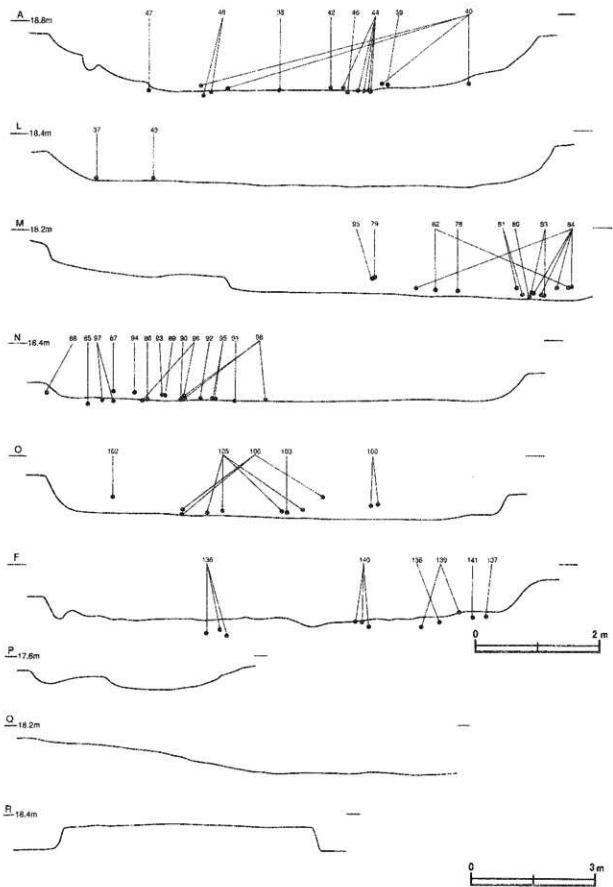
第15図 第2号堀実測図(4)



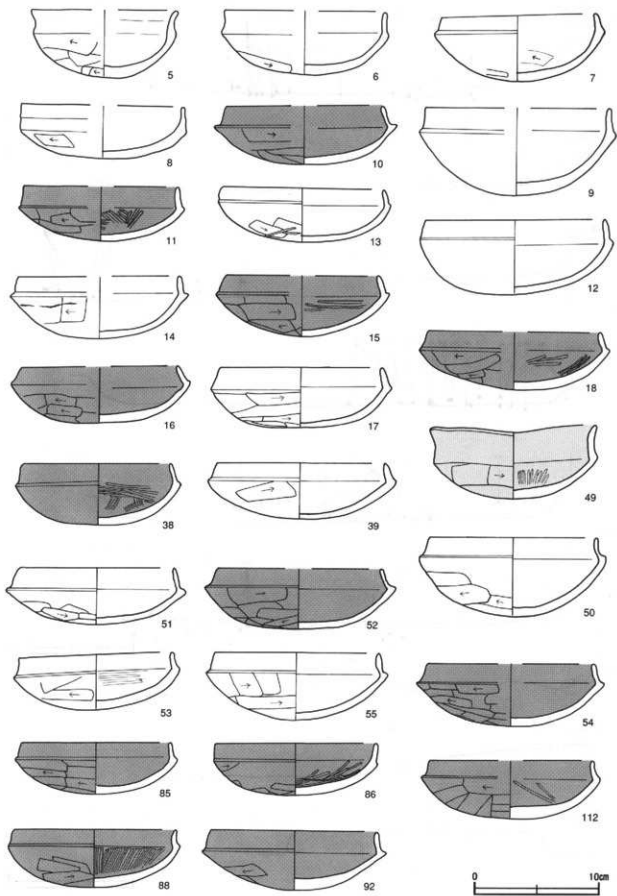
また、5世紀後葉から6世紀前葉の土器もごくわずかに出土しているが、この時期の住居跡は内郭には1軒のみ検出されているだけで居館の外縁部にも確認されておらず、しかも主軸方向は本跡の長軸方向と20°もずれており、これらの土器は混入したものと考えられる。また、遺物の大半が覆土下層から底面にかけて出土しているが、居館に伴う住居跡の土器と時期が一致している。従って、本跡の時期は、6世紀後半には構築され、6世紀末葉から7世紀初頭まで機能し、住居跡群の衰退期には機能を失いつつ埋没したと考えられる。



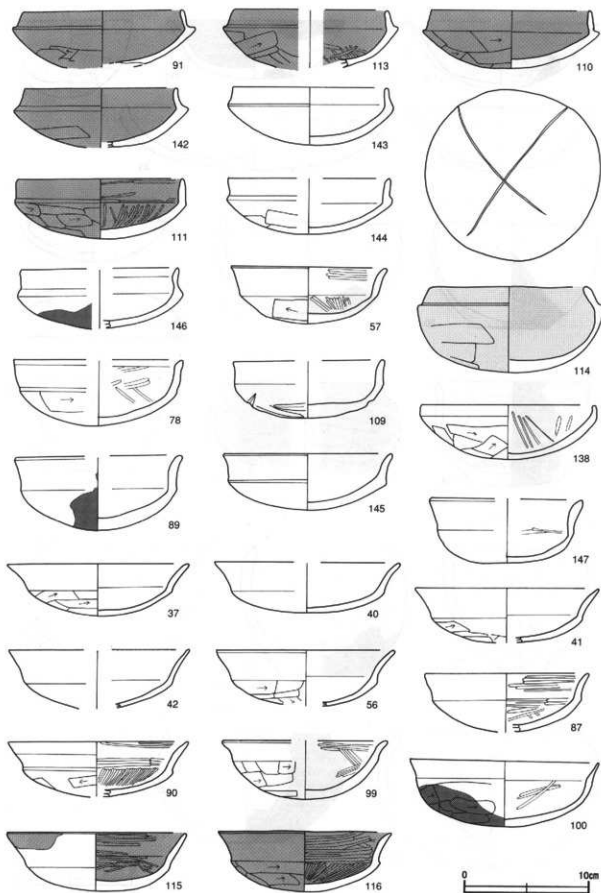
第16図 第2号堀実測図(5)



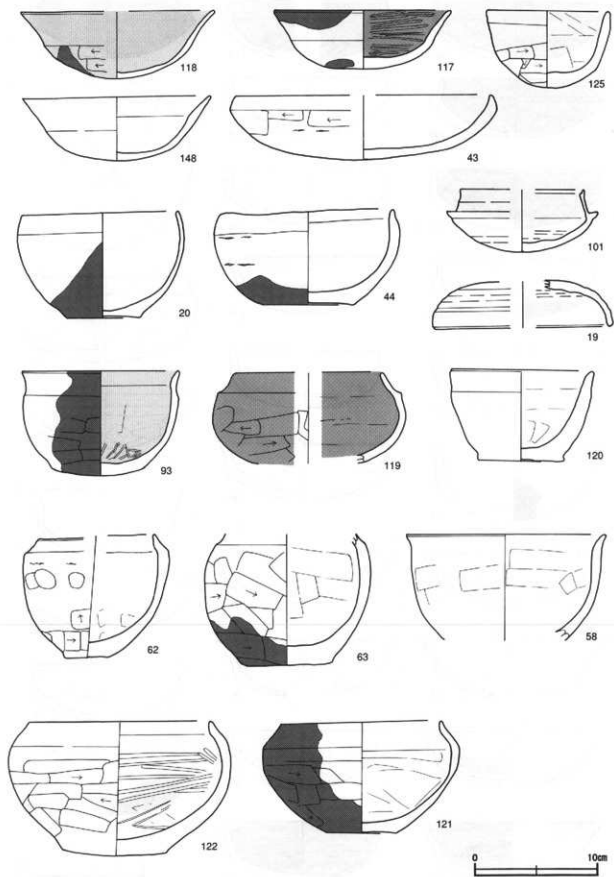
第17图 第2号掘突测网(6)



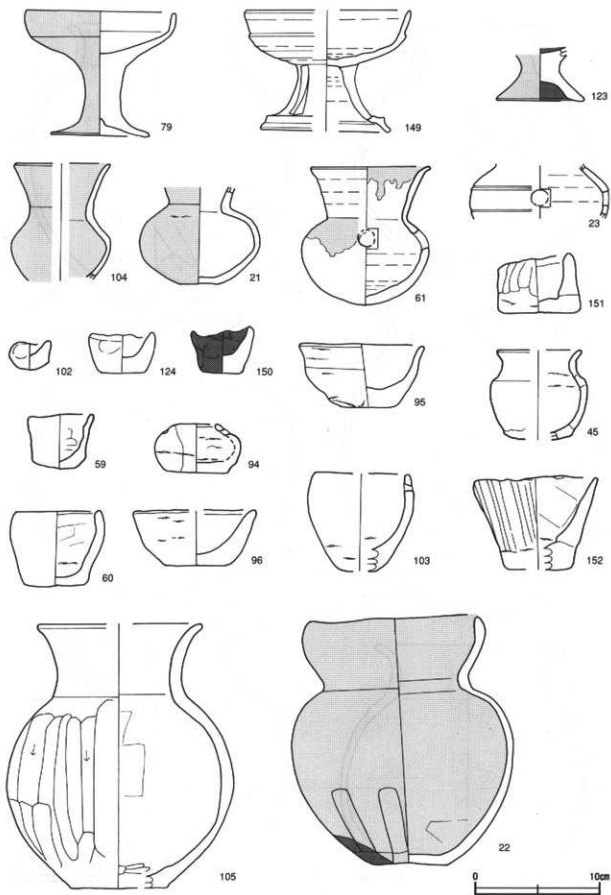
第18图 第2号掘出土物实测图(1)



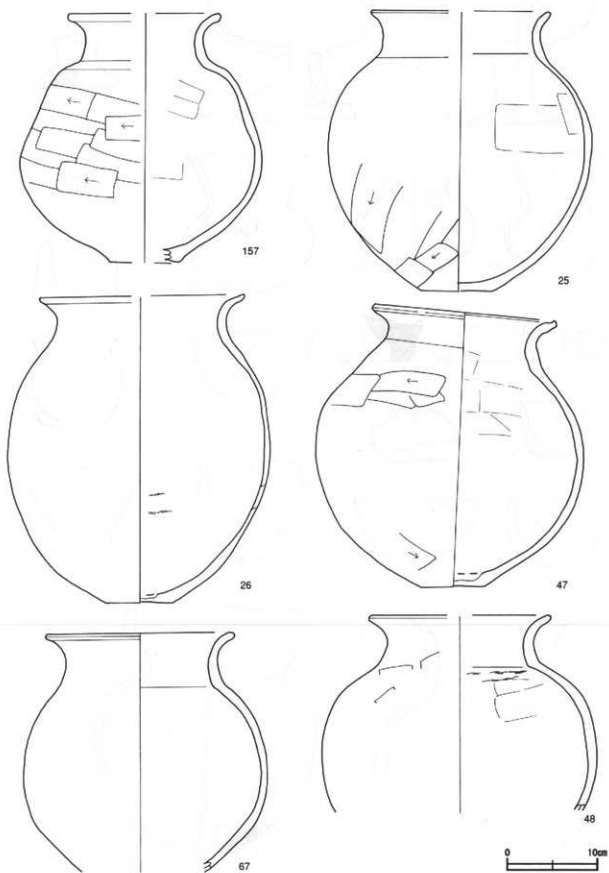
第19图 第2号掘出土遺物実測図(2)



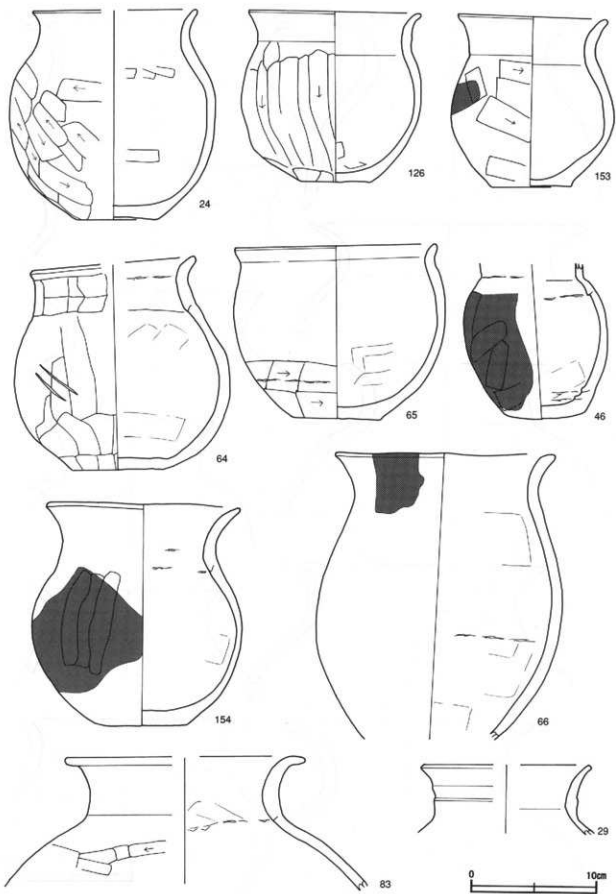
第20图 第2号掘出土遺物実測図(3)



第21图 第2号掘出土道物实测图(4)

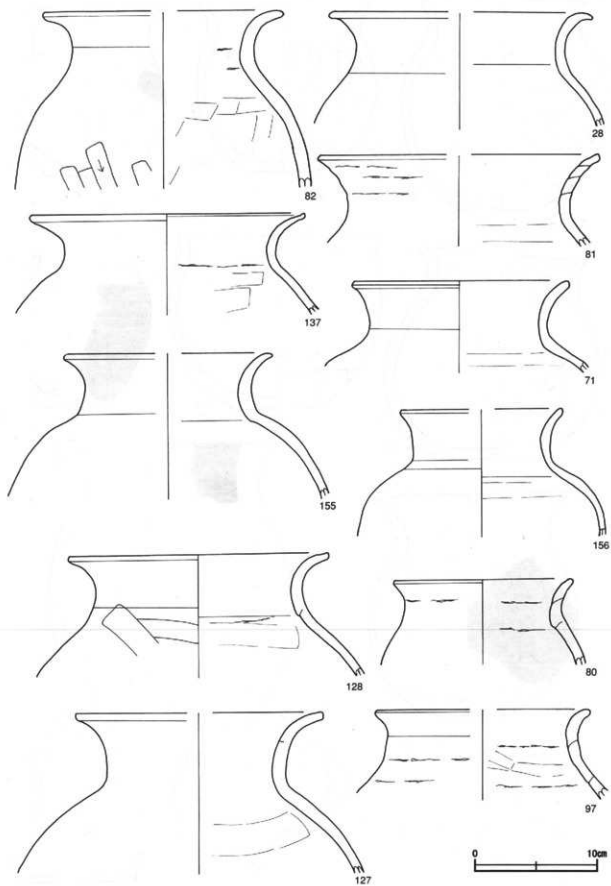


第22图 第2号堀出土遺物実測図(5)

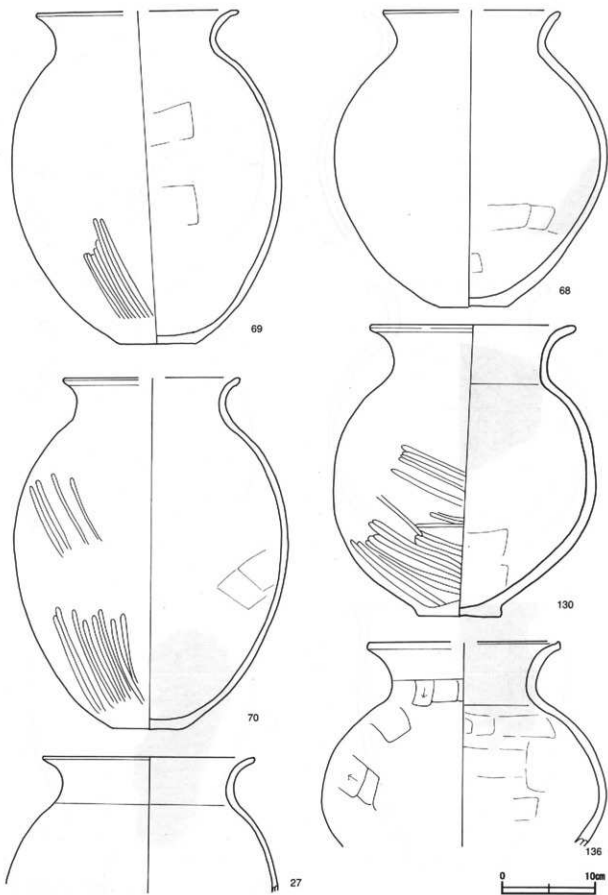


第23图 第2号窟出土遗物实测图(6)

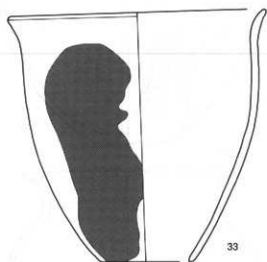
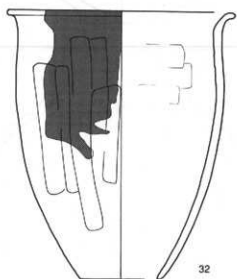
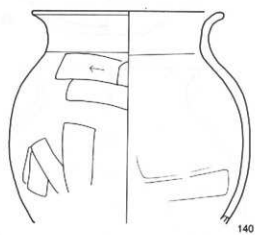
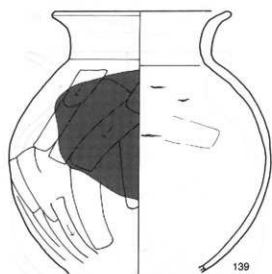
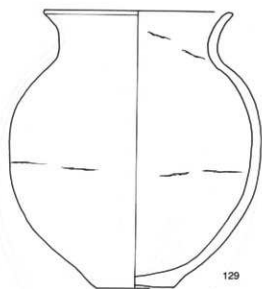
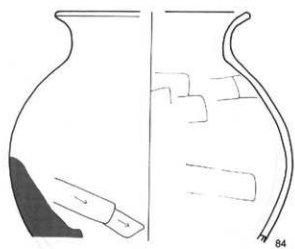




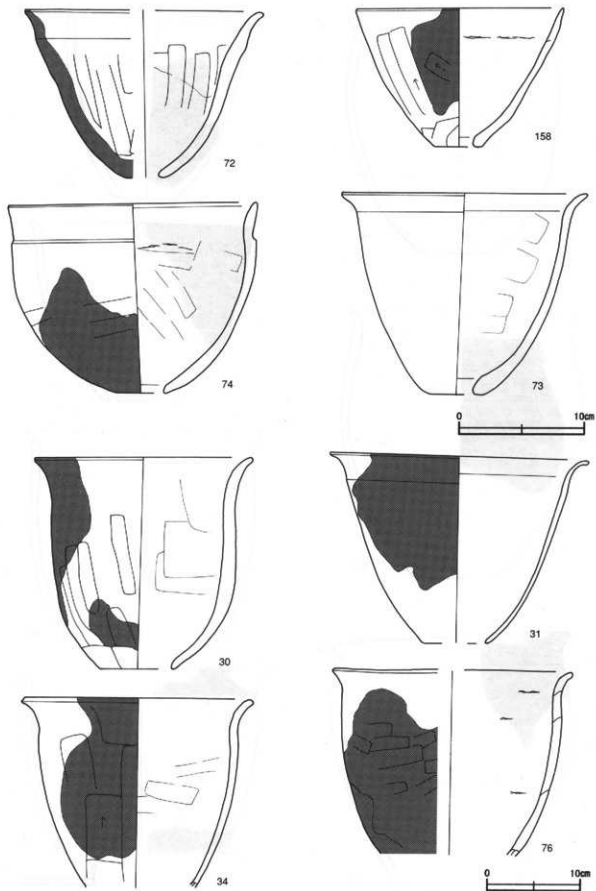
第24图 第2号掘出土遺物実測図(7)



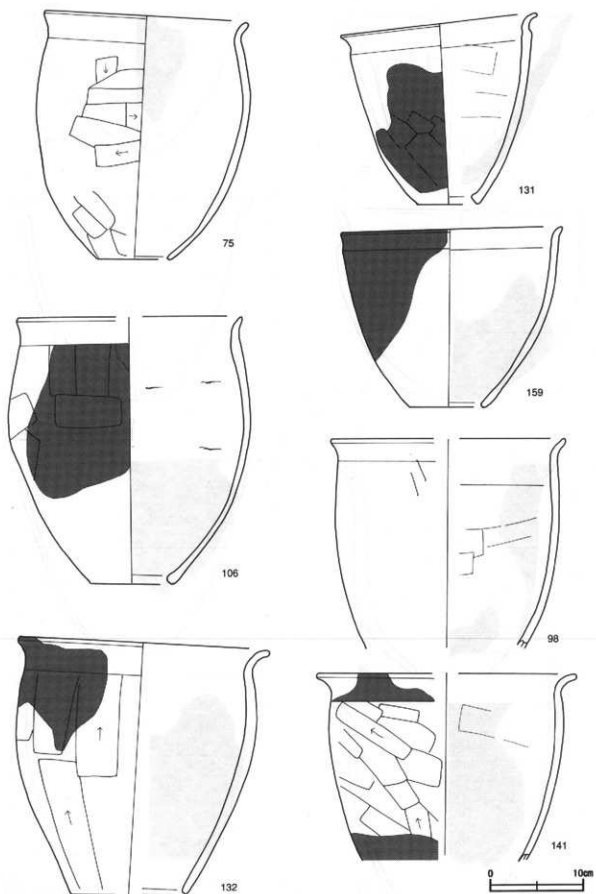
第25图 第2号墓出土遗物实测图(8)



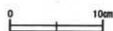
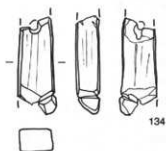
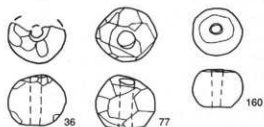
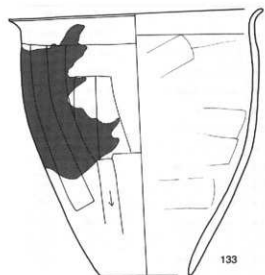
第26图 第2号掘出土遺物実測図(9)



第27图 第2号墓出土遗物实测图(0)



第28图 第2号出土器物实测图(1)



第29図 第2号出土遺物実測図②

第2号堀出土遺物観察表 (第18~29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	坏	[12.2]	5.4	—	長石・スコリア	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	1号土壇之上層	55% PL37
6	土師器	坏	[12.6]	5.1	—	鉄・赤鉄・スコリア	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内面摩耗	同底面	55% PL36
7	土師器	坏	12.2	5.2	—	長石・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面摩耗	同下層	95% PL37
8	土師器	坏	[13.0]	4.3	—	鉄・スコリア	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	同下層	60% PL37
9	土師器	坏	[14.7]	7.0	—	鉄・スコリア	橙	普通	内・外面摩耗	同下層	50%
10	土師器	坏	[12.3]	4.8	—	赤鉄・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内面摩耗	同底面	60% PL38
11	土師器	坏	[12.2]	4.4	—	砂粒	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	同底面	50%
12	土師器	坏	14.3	6.0	—	長石・石英・砂粒	にぶい赤褐	普通	内・外面摩耗	同底面	60% PL38
13	土師器	坏	12.8	4.4	—	長石・赤鉄・スコリア	赤褐	普通	内・外面摩耗	同下層・底面	90% PL38
14	土師器	坏	[13.0]	5.1	—	長石・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内面摩耗	同下層	40%
15	土師器	坏	[12.2]	4.9	—	鉄・赤鉄・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 底部外面へう張り	同下層・底面	40%
16	土師器	坏	[12.5]	4.4	—	鉄・赤鉄・スコリア	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内面摩耗	同下層	80% PL38
17	土師器	坏	12.9	4.9	—	砂粒	にぶい赤褐	普通	内面摩耗	同底面	65% PL38
18	土師器	坏	[13.6]	4.7	—	鉄・赤鉄・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層	50% PL38
19	須恵器	蓋	[14.4]	3.9	—	長石・砂粒・パミス	灰	良好	天井部2段の回転へう張り, 天井部と口縁部の境・口縁部内面に比べ遜る	同底面	40% PL38
20	土師器	椀	12.6	8.7	6.2	長石・石英・砂粒	橙	普通	内・外面摩耗	同下層・底面	85% PL38 底
21	土師器	埴	—	(7.8)	3.0	長石・石英・砂粒	橙	普通	内・外面摩耗	同覆土中	90% 外面・口縁部内面赤彩痕 PL38

番号	種別	器種	口径	器高	口径	材料	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	壺	13.3	20.1	6.2	砂粒	浅黄緑	黄褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	同層下中	60% PL38
23	須恵器	甕		(4.5)	—	黒色砂子	灰	良好	体部内・外面口口ナデ	同底面	10%	
24	土師器	小形甕	[13.0]	18.2	6.4	長石・雲母	成	普通	口縁部内・外面横ナデ	同底面	85% PL39	
25	土師器	壺	[19.0]	30.2	7.6	砂粒・石末	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層	50%	
26	土師器	壺	[21.8]	33.1	7.0	石英・砂粒	にぶい粉	普通	内・外面横ナデ	同下層・底面	40%	
27	土師器	壺	22.2	(14.3)	—	赤石・石英	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層・底面	35%	
28	土師器	壺	[20.0]	(9.4)	—	赤石・スコリア	粉	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層・底面	10%	
29	土師器	小形壺	[13.2]	(5.5)	—	長石・雲母・砂粒	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	同上層	40%	
30	土師器	瓶	[22.8]	22.3	7.8	砂粒・スコリア	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面横ナデ	同中層	70%	
31	土師器	瓶	25.9	30.0	[6.8]	砂粒・スコリア	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面横ナデ	同下層・底面	70% PL39	
32	土師器	瓶	24.0	28.7	8.5	長石・雲母	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ	同底面	80% PL39	
33	土師器	瓶	26.6	26.7	9.3	長石・雲母・砂粒	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面横ナデ	同底面	95% PL39	
34	土師器	瓶	23.6	(20.2)	—	輝石・石英	成	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層・底面	40%	
25	須恵器	壺		(8.7)	—	砂粒	灰黄褐	普通	口縁部内・外面口口ナデ	同下層	5%	
37	土師器	埴	14.4	4.1	—	雲母・スコリア	成	普通	内・外面横ナデ	7-1-1層	100% PL38	
38	土師器	埴	11.8	5.0	—	長石・雲母	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ、外面横ナデ	北西辺底面	85% PL39	
39	土師器	埴	13.2	4.5	—	雲母・砂粒	にぶい粉	普通	内・外面横ナデ	北西辺下層	90% PL39	
40	土師器	埴	[14.6]	4.0	—	赤石・スコリア	成	普通	内・外面横ナデ	北西辺下層	50%	
41	土師器	埴	14.5	(4.3)	—	砂粒・スコリア	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面横ナデ	同層上中	60%	
42	土師器	埴	[14.2]	(4.2)	—	砂粒・スコリア	成	普通	内・外面横ナデ	北西辺下層	40%	
43	土師器	埴	[20.6]	5.3	—	長石・砂粒	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面横ナデ	北西辺下層	50%	
44	土師器	埴	13.9	7.9	7.4	砂粒	浅黄	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ	同層上中	80% PL40	
45	土師器	小形埴	[5.6]	7.2	[6.0]	石英・雲母・砂粒	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ	同層上中	35%	
46	土師器	小形壺	[12.5]	6.5	砂粒・スコリア	赤褐	普通	体部外側ヘウナデ	7-1-1層	80%		
47	土師器	壺	19.4	30.5	6.8	砂粒・スコリア	成	普通	口縁部内・外面横ナデ	7-1-1層	60%	
48	土師器	壺	[18.8]	(21.2)	—	輝石・長石・石英	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部外側ヘウナデ	7-1-1層	30%	
49	土師器	埴	13.0	5.8	—	雲母・スコリア	成	普通	口縁部内・外面横ナデ	北西辺中層	80% PL40	
50	土師器	埴	13.2	6.3	—	長石・雲母・砂粒	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面横ナデ	7-1-1層	80% PL40	
51	土師器	埴	12.2	1.5	—	砂粒	明赤褐	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ、体部外面ヘウナデ	スロープ施設北西下層	70% PL40	
52	土師器	埴	[12.9]	4.9	—	砂粒・スコリア	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面横ナデ	7-1-1層	70%	
53	土師器	埴	12.2	4.6	—	雲母・スコリア	にぶい粉	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部外側ヘウナデ	北西辺下層	80%	
54	土師器	埴	[13.3]	5.0	—	雲母・砂粒	灰黄褐	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ、体部外側ヘウナデ	同層上中	50%	
55	土師器	埴	12.6	3.4	—	石英・雲母・砂粒	明赤褐	普通	口縁部外側ヘウナデ、体部外側ヘウナデ	7-1-1層	50%	
56	土師器	埴	14.0	(4.5)	—	砂粒・スコリア	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面横ナデ	北西辺下層	50% PL40	
57	土師器	埴	12.3	4.5	—	石英・砂粒	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部外側ヘウナデ	7-1-1層	60%	
58	土師器	鉢	16.1	(6.6)	—	赤石・雲母・砂粒	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	7-1-1層	50% PL40	
59	土師器	手取土	5.1	4.5	4.0	長石・雲母	明赤褐	不良	体部外面ナデ、内面ヘウナデ、体部外面指物、内面ナデ	スロープ施設北西下層	70% PL46	
60	土師器	手取土	6.9	6.0	4.7	砂粒・パミス	明赤褐	不良	体部外面ナデ、内面ヘウナデ	7-1-1層	70% PL46	
61	須恵器	埴	9.5	11.1	—	灰石・パミス	赤灰	良好	底面ヘウナテ、口縁部磨面、深緑色の自然釉	方形器口上層・下層	65% PL40	
62	土師器	鉢	9.4	10.0	3.6	スコリア・パミス	明赤褐	不良	口縁部内・外面ナデ、体部外側磨面	7-1-1層	80%	
63	土師器	小形壺	—	(10.8)	7.2	雲母・パミス	にぶい粉	普通	体部外面ヘウナテ	北西辺下層	90%	
64	土師器	小形壺	[12.9]	17.0	7.0	長石・雲母・砂粒	にぶい粉	普通	体部外面横ナデ	7-1-1層	90% PL40	
65	土師器	小形壺	16.0	14.0	7.0	長石・雲母・砂粒	浅黄褐	不良	口縁部内・外面横ナデ、外面横ナデ	7-1-1層	70% PL41	
66	土師器	壺	17.4	(23.1)	—	輝石・石英	成	普通	口縁部内・外面横ナデ、外面横ナデ	同層上中	40%	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
67	土師器	甕	19.7	(25.9)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラナグサ、内・外面摩耗	スロープ施設北西1号・北東	40%
68	土師器	甕	[18.2]	34.0	8.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面摩耗	前土師墓下層	65% PL41
69	土師器	甕	[21.0]	35.1	8.2	砂粒・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	1号土師墓北東	50% PL41
70	土師器	甕	[18.2]	36.9	7.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	スロープ施設北西1号・北東	70%
71	土師器	甕	17.5	(7.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	前土師墓下層	20%
72	土師器	瓶	19.0	13.4	2.8	長石・雲母	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	1号土師墓北東	45%
73	土師器	瓶	19.4	16.3	4.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、外面摩耗	1号土師墓北東	95% PL41
74	土師器	瓶	19.7	15.2	3.8	砂粒・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	1号土師墓北東	80% PL41
75	土師器	瓶	21.1	26.3	7.7	長石・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	1号土師墓北東	60% PL42
76	土師器	瓶	[24.1]	(19.6)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	1号土師墓北東	20%
78	土師器	杯	[13.4]	5.4	—	石英・パミス	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	スロープ施設	50% PL41
79	土師器	高杯	11.9	10.0	7.7	長石・石英・スコリア	橙	普通	内・外面摩耗	同中層	80%、一部に赤砂残る PL41
80	土師器	甕	14.4	(7.0)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	同底面	20%
81	土師器	甕	[22.8]	(7.5)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	同底面	10%
82	土師器	甕	[19.2]	(14.5)	—	長石・石英・スコリア・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ、体部内面ヘラナグサ後部ナデ、体部内面ヘラナグサ	同下層	10%
83	土師器	甕	[18.7]	(10.2)	—	長石・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	同下層	15%
84	土師器	甕	[19.9]	(24.0)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	同下層	30% PL43
85	土師器	杯	11.8	4.7	—	石英・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面摩耗	同底面	90% PL42
86	土師器	杯	12.8	4.2	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	同底面	95% PL42
87	土師器	杯	13.0	(4.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤	普通	口縁部内・外面横ナデ、外面摩耗	同底面	70% PL42
88	土師器	杯	13.0	4.6	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部外面ヘラナグサ	同底面	95% PL42
89	土師器	杯	[13.0]	6.0	—	長石・パミス	にぶい橙	普通	体部内面ヘラナグサ、外面摩耗	同底面	30%、底面赤
90	土師器	杯	14.2	(4.4)	—	長石・パミス	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面ナデ	同底面	80% PL42
91	土師器	杯	12.7	(4.6)	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面横ナデ	同底面	70% PL43
92	土師器	杯	13.2	4.7	—	砂粒	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面横ナデ	同底面	35%
93	土師器	瓶	12.6	8.5	7.5	砂粒・スコリア	赤	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	同下層	80% PL43
94	土師器	手持土器	3.3	3.9	5.1	長石・パミス	黄褐	不良	体部外面ナデの境に一條の浅溝、体部・底部内面横ナデ、底部外面ヘラナグサ	同下層	100% PL46
95	土師器	手持土器	9.8	5.1	4.4	パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ及び体部内面横ナデ	同底面	75% PL47
96	土師器	手持土器	[9.5]	4.5	5.0	長石・パミス	にぶい橙	不良	内・外面ナデ、体部外面ヘラナグサ及び体部内面横ナデ	同下層・底面	50%
97	土師器	甕	[17.4]	(7.4)	—	長石・石英	赤褐	不良	口縁部内・外面横ナデ	同底面	10%
98	土師器	瓶	[21.8]	(22.3)	—	砂粒・スコリア	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	同下層	20%
99	土師器	杯	[12.8]	4.7	—	長石・石英	にぶい橙	普通	底部外面ヘラナグサ	1号土師墓北東	45%
100	土師器	杯	15.0	5.1	—	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	1号土師墓北東	70% PL43
101	須恵器	杯	[10.0]	5.1	—	長石・パミス	灰	良好	底部外面同底ヘラナグサ	1号土師墓北東	30% PL43
102	土師器	手持土器	2.6	2.5	4.7	長石・パミス	にぶい橙	普通	内・外面に指痕	1号土師墓北下層	95%
103	土師器	手持土器	[7.3]	7.9	—	長石・パミス	明赤褐	不良	内・外面ナデ	1号土師墓北下層	40% PL46
104	土師器	卍	[7.6]	(9.3)	—	石英・砂粒	橙	普通	内・外面摩耗	1号土師墓北東	20%、赤砂残る
105	土師器	甕	[12.8]	21.3	[7.8]	長石・雲母	浅黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	1号土師墓北東	50%
106	土師器	瓶	[23.4]	28.2	8.6	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	1号土師墓北東	70% PL43
109	土師器	杯	[11.8]	4.7	—	砂粒・スコリア	にぶい橙	普通	体部・底部外面横ナデ、内・外面摩耗	1号土師墓北東	60%
110	土師器	杯	12.5	4.7	—	石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ、体部内面ヘラナグサ後部ナデ、体部内面ヘラナグサ	2号土師墓南西面上層	95% PL42
111	土師器	杯	13.0	4.3	—	石英・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	2号土師墓下層	75% PL43
112	土師器	杯	[12.8]	(4.7)	—	石英・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ヘラナグサ	同下層	60% PL42



番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎上	色面	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
113	土師器	坏	[12.0]	[4.6]	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同下層	40%
114	土師器	坏	12.3	6.8	—	砂粒	浅黄	普通	口縁部内・外面及び器部内外面横ナテ	同中層	65%
115	土師器	坏	14.3	4.9	—	長石・石英	にぶい黄黒	普通	外面摩耗	同下層	70%
116	土師器	坏	13.8	5.0	—	雲母・砂粒	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナテ, 底部外面へう割り	同下層	70% PL42
117	土師器	坏	14.1	4.8	—	長石・石英	にぶい橙	普通	外面摩耗	同下層	60%, 量 PL43
118	土師器	坏	[15.6]	3.5	—	長石・石英	浅黄橙	普通	底部外面へう割り, 内・外面摩耗	同中層	40%
119	土師器	碗	[11.8]	[7.5]	—	長石・石英	暗赤褐	普通	口縁部内・外面及び器部内外面横ナテ	同中層	35%
120	土師器	小形鉢	11.5	7.6	7.0	石英・バミス	浅黄橙	普通	口縁部内・外面及び器部内外面横ナテ	同下層	70% PL44
121	土師器	鉢	13.0	9.2	5.7	砂粒	にぶい黄赤	普通	口縁部内・外面横ナテ	同下層	80% PL44
122	土師器	鉢	14.7	11.1	8.5	長石・石英	暗赤褐	普通	口縁部内・外面横ナテ, 底部外面へう割り	同下層	100% PL44
123	土師器	高坏	—	[4.3]	[6.8]	長石・石英	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	同中層	50%
124	土師器	手取土器	5.0	3.3	3.4	長石・バミス	明赤褐	不良	内・外面指摺痕	同底面	100% PL46
125	土師器	小形坏	10.0	6.2	—	石英・バミス	黄橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 底部外面へう割り	同中層	90% PL44
126	土師器	小形甕	13.5	13.8	5.6	砂粒・スコリア	淡赤橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 底部外面へう割り	同下層	60% PL44
127	土師器	甕	[20.3]	[13.1]	—	長石・石英・雲母	にぶい赤黒	普通	内・外面摩耗	同上層	15%
128	土師器	甕	20.9	[10.1]	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同上層・中層	20%
129	土師器	甕	19.4	29.3	8.2	砂粒・スコリア	出褐	普通	口縁部内・外面横ナテ, 内・外面摩耗	同中層・底面	60% PL45
130	土師器	甕	21.6	30.8	8.6	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同底面	70% PL44
131	土師器	瓶	20.8	19.5	6.5	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同下層	80% PL45
132	土師器	瓶	26.4	26.8	12.2	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 内面ナテ	同上層・底面	70%
133	土師器	瓶	26.5	27.8	9.5	砂粒・スコリア	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同上層・底面	70% PL45
136	土師器	甕	[21.8]	[21.8]	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	南西辺底面	30%
137	土師器	甕	22.3	8.3	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	南西辺底面	30%
138	土師器	坏	13.5	4.5	—	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナテ, 底部外面へう割り	南西辺底面	95% PL44
139	土師器	甕	[18.0]	[27.5]	—	雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 器部内面へう割り	西コート・底面	60% PL45
140	土師器	甕	20.0	[22.5]	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	南西辺底面	60% PL46
141	土師器	甕	[27.4]	[20.0]	—	長石・石英	にぶい黄赤	普通	口縁部内・外面横ナテ	南西辺底面	30%
142	土師器	坏	12.0	4.8	—	長石・石英	にぶい黄赤	普通	口縁部内・外面横ナテ, 内・外面摩耗	1号土師器	70% PL44
143	土師器	坏	12.1	4.7	—	長石・石英・スコリア・バミス	橙	普通	内・外面摩耗	同下層・底面	70% PL45
144	土師器	坏	[12.7]	4.5	—	長石・石英	にぶい橙	普通	底部外面へう割り, 内・外面摩耗	同底面	60%
145	土師器	坏	13.3	4.6	—	長石・石英	橙	普通	底部外面へう割り, 内・外面摩耗	同下層	60%
146	土師器	坏	[12.5]	[4.3]	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部外面へう割り, 内・外面摩耗	同下層	40%
147	土師器	坏	[11.0]	5.2	—	石英・バミス	橙	普通	底部外面へう割り, 内・外面摩耗	同下層	60%, 底部外面横ナテ
148	土師器	坏	15.5	5.2	—	長石・石英・バミス	明赤褐	普通	内・外面摩耗	同下層	70% PL45
149	須恵器	高坏	[13.1]	9.8	[10.0]	長石・石英・バミス・雲母・磁石	灰	良好	3窓, 杯部内面・脚部外面に自然釉の刷割痕	同底面	40% PL46
150	土師器	手取土器	4.6	3.8	3.2	長石・石英	にぶい黄赤	普通	底部外面へう割り, 内・外面指摺痕	同底面	100% PL46
151	土師器	手取土器	5.3	4.8	6.0	長石・石英	橙	不良	器部・底部外面へう割り	同下層	100% PL47
152	土師器	手取土器	9.6	7.5	[5.1]	長石・石英	赤褐	不良	底部外面横ナテの工具による割り	同底面	80% PL47
153	土師器	小形甕	14.0	11.7	6.5	長石・石英・スコリア	にぶい黄赤	普通	口縁部内・外面横ナテ, 底部外面へう割り	同底面	70%
154	土師器	甕	15.1	17.8	7.2	長石・石英・スコリア	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 内・外面摩耗	同底面	70% PL47
155	土師器	甕	[16.6]	[12.0]	—	長石・石英・バミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同底面	10%
156	土師器	甕	[13.0]	[10.5]	—	長石・石英・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同下層	15%
157	土師器	甕	[16.2]	26.8	[7.4]	石英・砂粒・スコリア	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	同底面	70% 器部外面横ナテ PL47
158	土師器	瓶	16.4	11.1	3.8	長石・石英・バミス	赤	普通	器部内面摩耗	同下層・底面	70% 量 PL47

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
150	土胎器	瓶	23.0	19.1	7.6	群9型-1077	赤褐色	普通	日輪部中外表面滑り、内外面粗粒	同位置	70% PL45	

番号	器種	長さ	径	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
26	球状土罐	2.65	3.1	0.6	(12.5)	土製	外面へり削り、胎土に砂粒・パミス	1号土溝北東1層	50%
77	球状土罐	3.1	3.1	1.0	19.1	土製	外面へり削り、胎土に長石・パミス	3号土溝北東2層	100% PL61
160	球状土罐	2.0	2.7	0.7	12.5	土製	外表面滑り、胎土に石灰・砂粒	1号土溝南西3層	100% PL63

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
108	切子土	2.2	1.1	1.2	(12.1)	木製	断面六角形、部欠損	遺10中	95% PL70
134	瓦石	(5.1)	2.1	1.3	(19.9)	凝灰岩	断面3面、上部に貫通孔	2号土溝北東2層	90% PL66

#### ④ 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡(第30・31回)

位置 調査I区南東部のK5h4区、第1号土溝の内側正面に10mほど離れて位置している。

遺構関係 第28・29・59・74・84・85・89・93号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.50m、短軸6.30mの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は25~37cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、出入り口部近くに高まりがあり、中央部から各主柱穴にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。天井部の一部と袖部が残存し、焚口部は第5号溝に掘り込まれて確認することができなかった。規模は袖部先端から煙道部まで160cm、袖部最大幅70cmである。煙道部は壁外へ10cmほど掘り込まれており、緩やかな傾斜で立ち上がっている。天井部と袖部は粘土・砂・ロームで構築され、火床部は平坦に作られており、あまり火熱を受けていない。第5層は灰が含まれている火床部の覆土である。

##### 竈土層解説

- |        |                                 |        |                   |
|--------|---------------------------------|--------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼上粒子・粘土粒子・砂粒微量                  | 6 黒褐色  | 砂粒中量、炭化粒子少量       |
| 2 暗赤褐色 | 焼上ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 7 褐色   | ローム粒子・炭化粒子微量      |
| 3 暗赤褐色 | 焼上粒子・ロームブロック・炭化物・砂粒微量           | 8 褐色   | 焼上ブロック少量、ローム粒子微量  |
| 4 暗赤褐色 | 焼上粒子・粘土粒子・砂粒・炭微量                | 9 暗赤褐色 | 焼上粒子少量、砂粒中量、炭化物微量 |
| 5 暗赤褐色 | 砂粒少量、ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |        |                   |

ピット 4か所。主柱穴はP1~P3で、深さは29~43cmである。P4は深さ38cmで、南東壁寄りの中央で竈の正面に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 平面形は楕円形を呈し、P4と南東壁の間に付設されている。深さは50cmほどで、底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

##### 貯蔵穴土層解説

- |       |                   |       |              |
|-------|-------------------|-------|--------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼上粒子微量    | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼上粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量    |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量         | 6 褐色  | ロームブロック中量    |

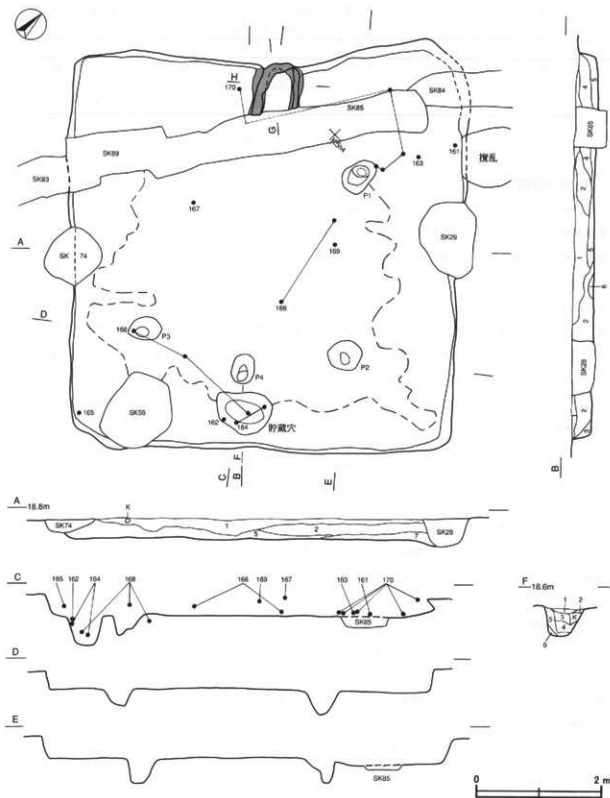
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した、自然堆積である。

##### 土層解説

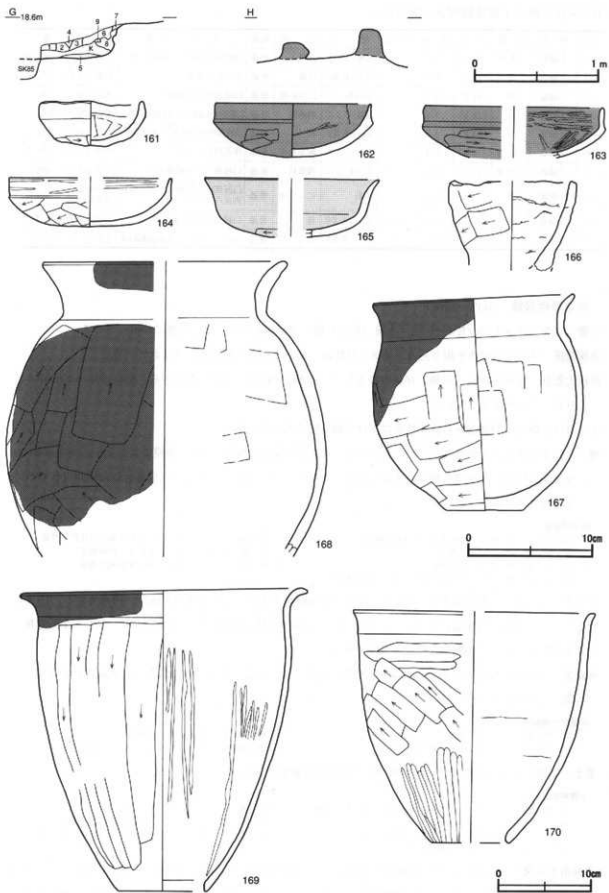
- |       |                       |       |                  |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量        | 5 褐色  | ロームブロック少量、焼上粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼上ブロック微量      | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 3 褐色  | ロームブロック中量             | 7 暗褐色 | ロームブロック少量        |
| 4 褐色  | ロームブロック少量、焼上粒子・炭化粒子微量 |       |                  |

遺物出土状況 土師器片883点(坏類141、甕・甗739、高坏3)、須恵器片2点(坏類、甕)、土製品1点(支脚)が出土しており、土師器の底部片などから推定される個体数は、坏5点、手捏土器1点、甕65点、甗3点

である。これらの遺物はP2・P3周辺の覆土下層から床面と、P1周辺の覆土上層を中心に出土している。出土状況から、161の手捏土器、162・164の土師器環、170の土師器甕は本跡に伴う土器と考えられる。所見 本跡は、主軸方向が内堀の長軸方向と概ね一致しており、堀を意識して構築された居館を構成する施設である。本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第30図 第1号住居跡実測図



第31图 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第31回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
161	土師器	小形平	8.1	3.7	-	長石・パミス	淡橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 基外面へウ張り	北西隅部	100% PL47
162	土師器	杯	12.3	4.3	-	長石・石炭	浅黄	普通	内・外面厚肌	貯蔵穴上層	96% PL48
163	土師器	杯	14.2	(4.1)	-	長石・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	北部下層	35%
164	土師器	杯	12.8	3.9	-	長石・パミス	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナテ, 基外面へウ張り	貯蔵穴中層	40%
165	土師器	杯	13.8	(4.2)	-	長石・石炭	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 外面厚肌	北ノテ上層	45%
166	土師器	子粒上蓋	9.4	(6.1)	-	長石・パミス	暗赤褐色	普通	体部内面へラナテ	中央部下層	60% PL47
167	土師器	小形壺	15.8	17.3	3.2	長石・パミス	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	中央部上層	79% PL48
168	土師器	光	19.1	(23.6)	-	長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 体部内面へラナテ	P39層・体部上層・貯蔵穴中層	75% PL48
169	土師器	瓶	28.7	32.2	9.4	長石・石炭	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	中央部中層	20% 須恵器 PL8
170	土師器	瓶	25.3	24.4	8.2	長石・石炭	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナテ, 体部内面厚肌	北ノテ上層	40%

## 第2号住居跡(第32・33図)

位置 調査1区南東部のK5f5区, 内堀(第2号堀)北西辺から6mほど内側に位置している。

重複関係 第20号住居跡を掘り込み, 第3号住居跡, 第16・83号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.76m, 短軸5.16mの長方形で, 主軸方向はN-42°-Wである。壁高は30~36cmで, 各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部から各主柱穴にかけて踏み固められている。

竪 北西壁中央部の北東寄りに付設されている。天井部と袖部は残存しない。規模は焚火口から煙道部まで100cm, 煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれており, 外傾して立ち上がっている。火床部はほぼ平坦に作られており, 赤変硬化している。

## 土層解説

- |        |                     |        |                     |
|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量   | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色  | 焼土ブロック微量            | 6 暗褐色  | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量      |
| 3 暗褐色  | 焼土粒子・砂粒微量           | 7 暗褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子微量     |
| 4 暗褐色  | 焼土ブロック少量・ローム粒子・砂粒微量 |        |                     |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P3で, 深さは12cm前後である。P4は深さ17cmで, 南東壁寄りの中央に位置しており, 出入り口施設に伴うピットである。P5は中央部に位置しているが, P1~P3と深さや覆土の色調も同じことから, 補助的な柱穴と推定される。

貯蔵穴 平面形は楕円形を呈し, 東コーナー部に付設されている。深さは40cmほどで, 底面は皿状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

## 貯蔵穴土層解説

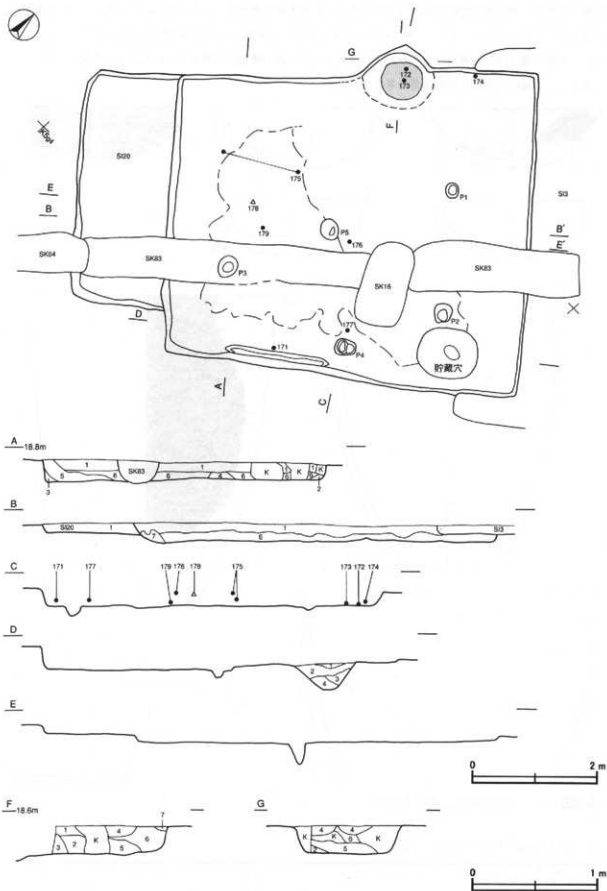
- |       |              |       |                   |
|-------|--------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量      | 3 暗褐色 | ロームブロック微量         |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |

覆土 7層からなり各層にロームブロックを含む人為堆積である。

## 土層解説

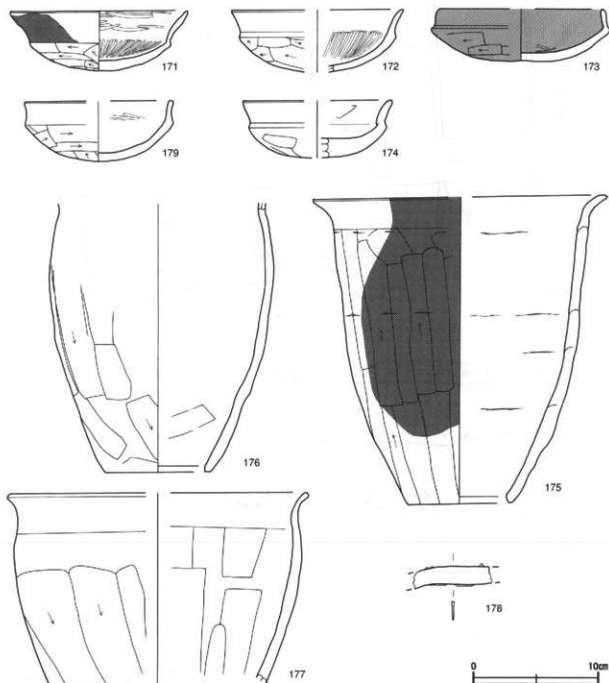
- |       |                        |       |                     |
|-------|------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量           |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量              | 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量      | 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量              |       |                     |

遺物出土状況 土師器片563点(坏類162, 甕類401), 須恵器片1点(坏), 鉄器1点(刀子)が出土しており, 土師器の底部片などから推定される個体数は, 坏11点, 甕12点である。これらの遺物は, 覆土上層から床面にかけて全体的に出土している。172・173の土師器坏は, 出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。



第32图 第2·20号住居跡実測图

所見 本跡は、第20号住居跡を掘り込んでいるが、主軸方向と北西壁のラインが一致しており、第20号住居跡の建て替えと考えられる。また、主軸方向から、堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつである。なお、本跡の覆土は人為堆積であるが、これは第3号住居跡の構築時に埋め戻されたものと推定される。出土土器から、本跡の時期は6世紀後葉と考えられる。



第33図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
171	土師器	坏	14.1	4.9	—	長石・スコリア	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面へウ張り	南東院階下層	70% PL48
172	土師器	坏	[13.6]	(5.0)	—	パリス・スコリア	明赤褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面へウ張り	竈火床面	20%

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
173	土師器	坏	13.0	1.2	—	長石・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内外面磨ナデ、内・外面磨ナ	焼火床周	30%
174	土師器	坏	11.8	(4.6)	—	長石・パミス	にぶい橙	普通	口縁部内外面磨ナデ、底面磨ナヘラナデ	北東壁下層	40%
175	土師器	瓶	22.8	21.5	8.1	長石・砂粒	灰黄濁	普通	口縁部内外面磨ナデ、底部内面ヘラナデ	西壁の中層	80% PL4a
176	土師器	瓶	—	(23.5)	8.1	長石・パミス	成黄濁	普通	体部内面ヘラナデ	中央部中層	50%
177	土師器	瓶	24.0	(15.3)	—	黒・黄・白・灰・スズパ・イロ	にぶい橙	普通	口縁部内・外面磨ナデ、体部内面ヘラナデ	南東壁下層	10%
179	土師器	坏	11.8	4.8	—	雲母・スコリア	にぶい橙	普通	口縁部内外面磨ナデ、底面外側ヘラナデ	西壁下層	65%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
178	刀子	(6.3)	(1.55)	0.2	(8.35)	鉄	刃部中央部	西壁中層	

### 第3号住居跡 (第34・35図)

位置 調査I区南東部のK5e6区、内堀北西辺から5mほど内側に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込み、第83号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.12m、短軸6.12mの長方形で、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は10~18cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部から各土柱穴にかけて筋み固められており、南東壁の一部に壁溝が確認されている。

竈 掘乱を受け、残存していないが、床面や壁際に混じる焼土や粘土と焼土ブロックを含む覆土から、北西壁中央部に壁を50cmほど掘り込まれて構築されていたと想定される。

#### 覆土層解説

- |        |                 |        |                     |
|--------|-----------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色  | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | ロームブロック中量           |
| 2 赤褐色  | 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | 6 灰褐色  | ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 黒褐色  | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色  | 炭化粒子中量、焼土ブロック微量     |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量   |        |                     |

ピット 11か所。P4は深さ31cm、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P1~P3・P5~P11の性格は不明である。

覆土 4層からなり、各層ともロームブロックを含み、ほぼ同じ色調のため人為堆積の可能性も考えられるが、覆土が薄いため堆積状況の判断は困難である。第4層は第3層よりもやや色調が明るい。

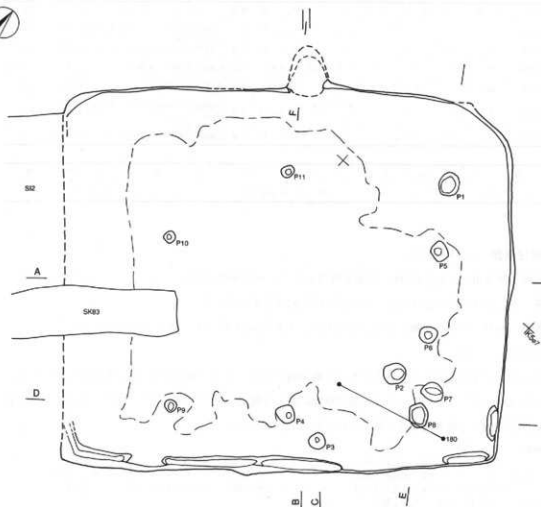
#### 土層解説

- |       |                  |       |           |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量   | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片128点(坏型41、甕・瓶87)、須恵器片1点(坏)が出土しており、土師器の底部片などから推定される個体数は坏3点、甕1点、瓶2点である。これらの遺物は全体的に覆土上層から中層にかけて出土している。180はほぼ平底で、南東壁際の覆土下層から出土しており、本跡に伴うと考えられる。

所見 本跡は、内郭では面積が約44m<sup>2</sup>と大型の住居跡で、主軸方向は第2号住居跡とほぼ一致し、それを掘り込んでいる。これらのことから、第20号住居跡→第2号住居跡→本跡と、規模を拡張させながら建て替えを繰り返したと考えられる。また、本跡も、堀を意識して構築された層館を構成する施設のひとつである。第2号住居跡を掘り込んでいることと出土土器から、本跡の時期は6世紀末葉から7世紀初頭と考えられる。





A-18.8m



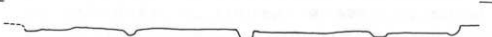
B



C



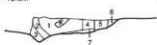
D



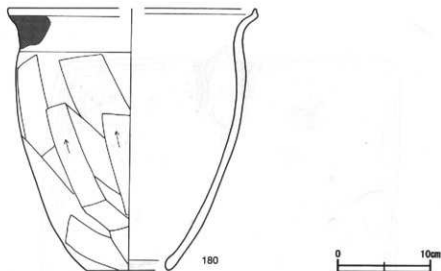
E



E-18.6m



第34图 第3号住居跡実測图



第35図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
180	土師器	甕	[25.8]	27.6	8.5	礫・石英・スコリア	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ、肩部外面上平ヘラナテ・下平ヘラナテ、底部内面ナテ	南東部中層	65% PL48

#### 第4号住居跡 (第36~38図)

位置 調査I区南東部のK5h7区、内郭のはほぼ中央に位置している。

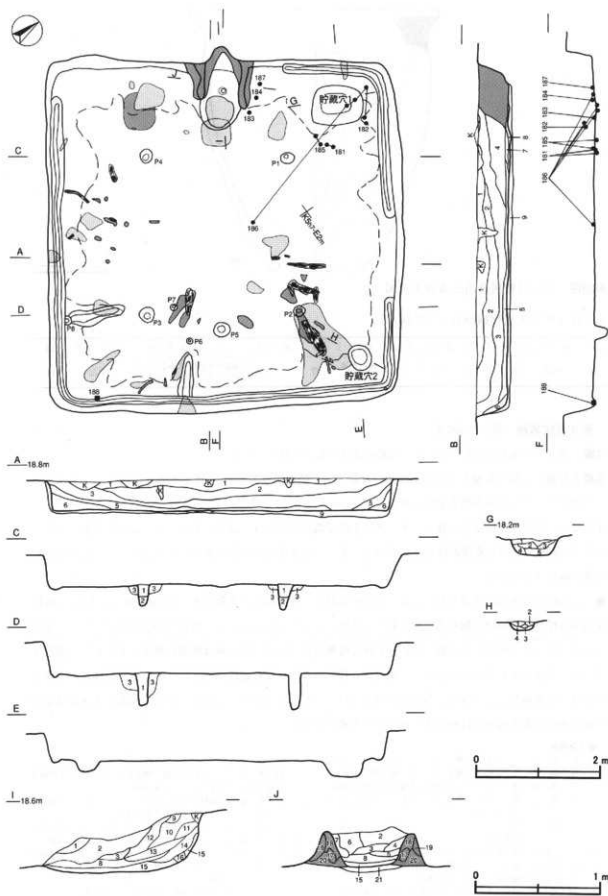
規模と形状 長軸・短軸とも5.60mほどの方形で、主軸方向はN-52°-Wである。壁高は30~36cmで、各壁とも外傾して立ち上がる焼失家屋である。

床 はほぼ平坦で、中央部から各コーナー部にかけて踏み固められており、北コーナー部の壁と東コーナー部の壁から南西壁にかけて壁溝が確認されている。また、南東壁と南西壁の南コーナー寄りでは、断面形がU字状の溝が検出されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。袖部が残存し、焚口部から煙道部まで135cm、袖部最大幅90cmほどで、煙道部は壁外へ20cmほど掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。第17~20層は袖部であり、平坦な地山の上にロームと砂混じりの粘土を積み上げて構築されている。第20層は袖部の基部であるが、黒褐色土で焼土ブロックが含まれていることから、竈が作り替えられている可能性が考えられる。火床部はほぼ平坦で火熱を受けて赤変色しているが、第21層に焼土ブロックや灰が含まれていることから、旧竈の火床面は第33層の下面の地山を若干掘りくぼめて作られていたと考えられる。

#### 竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量
2 灰褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子中量	12 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
3 灰褐色	焼土ブロック・炭化粒子多量、粘土粒子中量	13 暗赤褐色	焼土ブロック・灰少量
4 赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	14 黒褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
5 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量	15 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
6 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂粒少量	16 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、砂粒少量	17 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、砂粒微量
8 暗赤褐色	焼土粒子少量、砂粒微量	18 褐色	ロームブロック中量、砂粒少量、粘土粒子微量
9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子少量、砂粒微量	19 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子微量	20 黒褐色	粘土粒子少量、焼土粒子・砂粒微量
		21 黒褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・灰微量



第36图 第4号住居跡実測图

ビット 8か所。主柱穴はP1～P4で、深さは35～58cmである。P5は深さ23cmで、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うビットである。P1・P3・P4の第3層は床の掘り方の埋土で、床を貼る前に柱穴を掘り、柱を立てていることが確認された。

**P1・P3・P4土層解説**

- |       |                |       |           |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量        |       |           |

**貯蔵穴** 貯蔵穴1・2はそれぞれ北コーナー部と東コーナー部に付設されている。平面形は隅丸長方形と楕円形で、深さはそれぞれ30cmと15cmあり、底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。覆土はブロック状に堆積しているが、下層に焼土や炭化材が多く含まれており、家屋の焼失に伴い流れ込んだと考えられる。

**貯蔵穴1土層解説**

- |       |              |       |                    |
|-------|--------------|-------|--------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化物微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量  | 5 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・粘土粒子少量  |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化物少量 |       |                    |

**貯蔵穴2土層解説**

- |      |                         |       |                         |
|------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子中量     | 3 褐色  | ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量       |

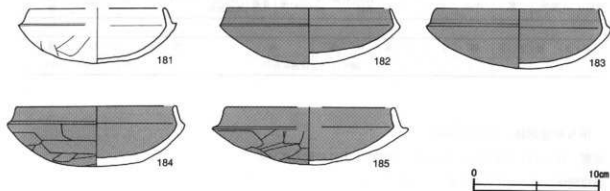
**覆土** 8層からなり、各層に焼土や炭化物が含まれているが床面と下層に多く、上・中層が少なく、自然堆積の状況を呈している。第8層は竈の火床部で、第9層は締まりが強く掘り方の埋土である。

**土層解説**

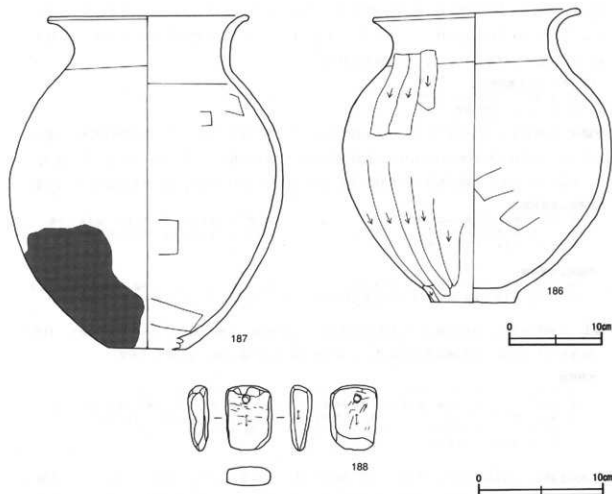
- |       |                         |        |                |
|-------|-------------------------|--------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量  | 6 褐色   | ロームブロック中量      |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量  | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量  |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 9 暗褐色  | ロームブロック少量      |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子・炭化物中量、ロームブロック微量    |        |                |

**遺物出土状況** 土師器片648点（坏型252、甕・瓶392、椀4）、須恵器片2点（坏型）、土製品1点（支脚）、石製模造品1点が出土しており、土師器の底部片などから推定される個体数は、坏17点、甕4点、瓶2点である。これらの遺物は、竈周辺を中心に覆土上層から床面にかけて出土している。また、焼土と炭化材が覆土下層から床面を中心に全体的に出土し、181・183～185の土師器坏は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

**所見** 本跡は焼失家屋であるが、覆土下層や床面からの出土遺物数が少なく、大半が破片であるため住居が機能していた段階での火災とは考えにくく、本跡の廃絶後、焼失までに時間が経過していれば、貯蔵穴の覆土下層に焼土や炭化材が含まれない自然堆積層が確認されるはずであるが、下層を中心に焼土や炭化物が含まれた堆積状況であり、本跡は廃絶時に焼失している。本跡は、出土土器から時期は6世紀後葉と考えられるが、同時期の住居跡で主軸方向が一致するものはない。また、内堀の長軸方向とも異なるが、堀底面から本跡と同時期の土器が出土しており、居館を構成する施設のひとつである。



第37図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第37・38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	土師器	坏	[10.8]	4.4	—	灰(灰・白)	橙	普通	内・外面摩耗	北部床面	50%
182	土師器	坏	13.0	4.6	—	雲母	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	北東壁下層	80% PL48
183	土師器	坏	13.1	4.8	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	内・外面摩耗	竈石袖前下層	100% PL48
184	土師器	坏	12.6	4.8	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面磨ナデ、底部外面へうすり	竈石袖脇下層	90% PL49
185	土師器	坏	[13.2]	4.7	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面磨ナデ、底部外面へうすり	北部下層・床面	80% PL49
186	土師器	甕	21.2	31.1	8.8	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面磨ナデ、底部へうすり	中央・北東部	60% PL49
187	土師器	甕	20.5	35.0	[8.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面磨ナデ、体部外面摩耗	竈石袖脇下層	85% 煤付 PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
188	磁石	5.1	3.7	1.5	43.1	凝灰岩	貫通孔有り	南コーナー壁溝	100% PL66

### 第5号住居跡(第39・40図)

位置 調査1区南東部のK518区、内郭の中央に位置している。

重複関係 第6号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 遺構の大半を第6号住居跡に掘り込まれており、北西辺5.40mの方形または長方形と考えられ、

主軸方向はN-45°-Wである。壁高は35cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 軟質で平坦である。残存する壁下から壁溝が確認されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。袖部の一部が残存し、規模は焚口部から煙道部まで80cm、袖部最大幅90cmであり、煙道部は外傾して立ち上がり壁外へはほとんど掘り込まれていない。第11・12層は袖部で、地山を掘り残した基部の上にロームと砂混じりの粘土を積み上げて構築されている。第12層に焼土粒子が含まれていることから、竈が作り替えられていたと考えられる。第13層は火床面の埋土で、火床部はほぼ平坦で火熱を受けて赤変硬化している。また、焚口部に当初の火床面であった長径50cm、短径40cmほどの浅い窪みが確認されている。

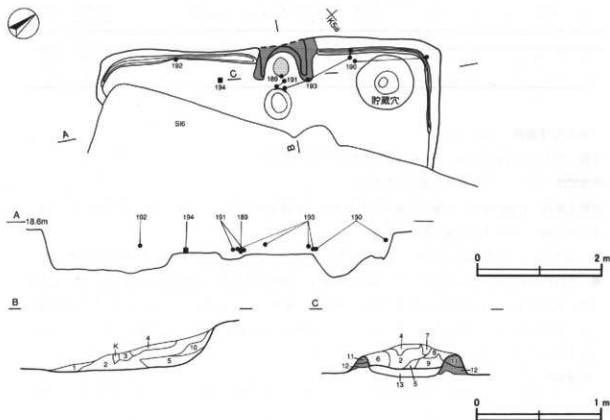
**竈土層解説**

- |                           |                                  |
|---------------------------|----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 砂粒中量、焼土ブロック少量      | 8 赤褐色 焼土粒子中量                     |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中量        | 9 極暗赤褐色 焼土ブロック微量                 |
| 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 10 暗褐色 ローム粒子少量                   |
| 4 赤褐色 焼土ブロック少量            | 11 灰黄褐色 粘土ブロック中量、砂粒少量、ローム粒子微量    |
| 5 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量       | 12 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック・砂粒微量 |
| 6 赤褐色 焼土ブロック中量            | 13 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量    |
| 7 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量       |                                  |

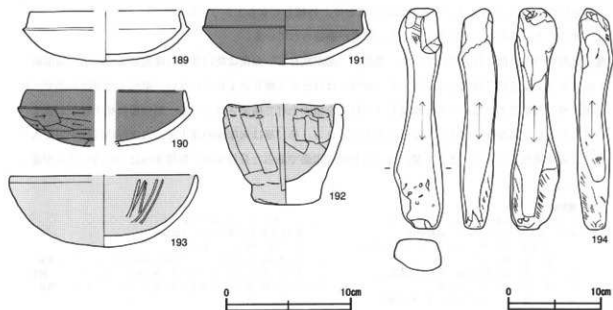
貯蔵穴 平面形は楕円形を呈し、北コーナー部に付設されている。深さは35cmで、底面は皿状を呈しており、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 土師器片316点（坏類175、甕類141）、石器1点（砥石）が出土しており、土師器の底部片などから推定される個体数は、坏14点、甕4点である。これらの遺物は、おもに竈内と右袖脇の覆土下層から出土しており、189と191の土師器坏は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 主軸方向から見て、本跡は、堀を意識して構築された居館を構成する施設で、出土土器から、時期は6世紀後葉と考えられる。



第39図 第5号住居跡実測図



第40図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
189	土師器	坏	[12.0]	4.0	—	筋筋・スリ	にぶい赤褐	普通	内・外面摩耗	竈火床面下層	50%
190	土師器	坏	[12.6]	(4.5)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面へう削り	北コーナー上層・北壁際下層	50%
191	土師器	坏	12.4	4.3	—	筋筋・スリ	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面摩耗	竈前下層	70% PL49
192	土師器	子登土器	[ 8.5]	8.6	5.4	長石・雲母・砂鉄	にぶい橙	不良	内・外面へうナデ	北西壁際下層	80%
193	土師器	坏	[14.7]	5.7	—	石英・パズルス	にぶい黄橙	普通	内・外面摩耗	北西壁際・竈前下層	70% PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
194	磁石	23.1	5.2	4.1	588	泥岩	紙面4面、目が細かい	北西壁際床面	100% PL66

### 第6号住居跡（第41～43図）

位置 調査I区南東部のK5j8区、内郭の中央に位置している。

重複関係 第5・7号住居跡を掘り込んでいる。

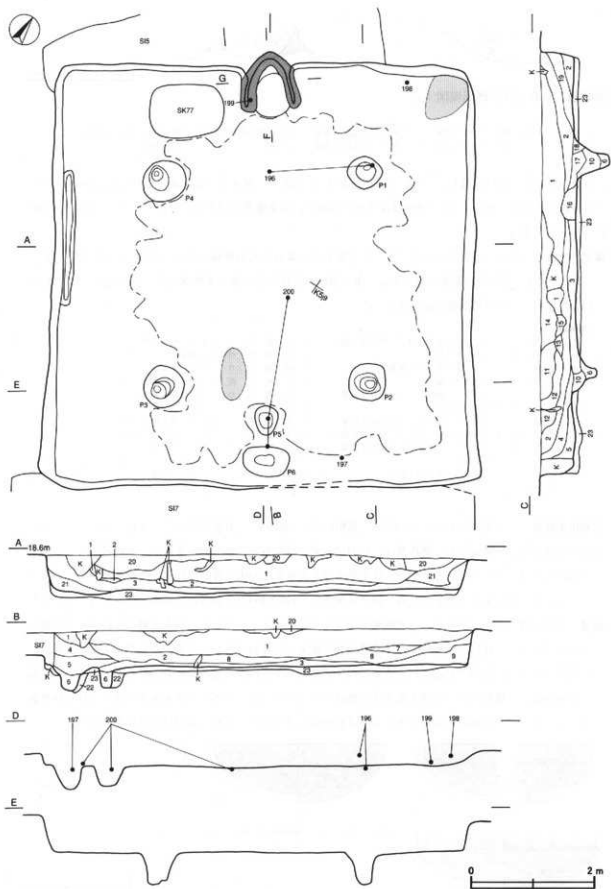
規模と形状 長軸6.90m、短軸6.80mほどの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は30～36cmで、各壁とも外傾して立ち上がる焼失家屋である。

床 ほぼ平坦で、中央部から各主柱穴にかけて踏み固められており、南西壁の中央部で壁溝が確認されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。袖部が残存し、規模は焚口部から煙道部まで105cm、袖部最大幅98cmで煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれており、緩やかに傾斜して立ち上がっている。第10～12層は袖部で、地山を台形状に掘り残して基部とし、その上にロームと砂混じりの粘土を積み上げて構築されている。火床部はほぼ平坦に作られており、あまり火熱を受けていない。

#### 竈土層解説

1	にぶい黄橙色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	5	にぶい黄橙色	砂鉄多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化物少量	6	橙	色 焼土ブロック中量、砂鉄少量、ロームブロック微量
3	にぶい黄橙色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量	7	暗 褐	色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量
4	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量	8	褐	色 粘土粒子・砂鉄中量、ローム粒子少量



第41图 第6号住居跡実測图(1)





第42図 第6号住居跡実測図(2)

- |                               |                           |
|-------------------------------|---------------------------|
| 9 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量    | 11 にふい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量 |
| 10 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 褐色 ローム粒子多量             |

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4で、深さは50～55cmあり、掘り方の形状からそれぞれ内側に向かって抜き取られたと推定される。P5・P6は深さ30・38cmで、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

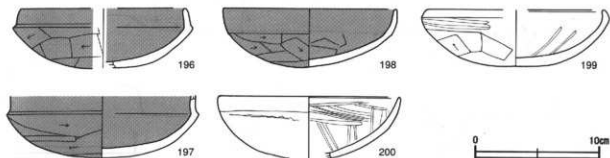
覆土 23層からなり、各層にロームブロックと焼土が含まれた人為堆積である。第6・22層はP1・P2・P5・P6の覆土、第23層は貼床の層である。第6層は柱の抜き取り後の本跡埋没時に入り込んだ土であり、第22層は埋土でその上に第23層が貼られている。

土層解説

- |                             |                                  |
|-----------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量               |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量             | 14 暗褐色 焼土粒子微量                    |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量        | 15 暗褐色 ロームブロック少量                 |
| 4 褐色 ロームブロック中量              | 16 黒褐色 焼土粒子・炭化物微量                |
| 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 17 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量       |
| 6 褐色 ロームブロック少量              | 18 暗褐色 ロームブロック少量                 |
| 7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 19 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量           |
| 8 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 20 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量              |
| 9 褐色 ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量    | 21 暗褐色 ロームブロック少量                 |
| 10 暗褐色 ローム粒子微量              | 22 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・砂粒微量 |
| 11 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量       | 23 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量、砂粒微量    |
| 12 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量       |                                  |

遺物出土状況 土師器片1,598点(環類558, 甕類1,039, 高坏1), 須恵器片2点(甕類)が出土しており、土師器で底部片から推定される個体数は、環33点, 甕13点である。これらの遺物は、竈周辺を中心に覆土上層から床面にかけて出土している。また、焼土が南部と南東壁際の床で確認され、炭化物も覆土中から出土していることから、焼失家屋と考えられる。出土状況から、197と199の土師器環は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡は焼失家屋であるが、二次焼成を受けた土器が出土しておらず、覆土下層から焼土や炭化物が出土していることから、住居の廃絶時または廃絶直後に焼失して埋め戻されたと考えられる。また、本跡は、内郭の住居跡の中では、面積が46㎡を超える大型の住居跡であり、出土土器の破片数が最も多い。また、主軸方向から層を意識して構築された居館を構成する施設のひとつで、出土土器と6世紀後半の第5号住居跡を掘り込んでいることから、時期は6世紀末葉から7世紀初頭と考えられ、居館の最終期の住居跡である。



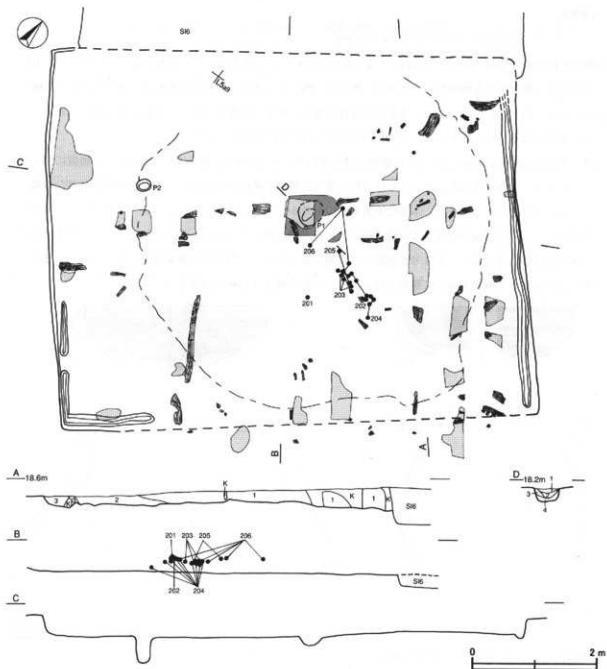
第43図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
196	土師器	坏	[13.0]	4.7	—	パミス	黒褐	普通	口縁部内・外面横ナデ, 底部外面へラ削り, 体部内面割蒸	F1内上層・遺積上層	60%
197	土師器	坏	—	(5.0)	—	長石・パミス	暗灰	普通	底部外面へラ削り, 内面摩耗	南東壁際床面	80%
198	土師器	坏	13.8	4.7	—	長石・石灰・パミス	極暗赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ, 底部外面へラ削り	北東壁際中層	80% PL50
199	土師器	坏	[14.0]	4.5	—	長石・石灰・スコリア	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	壁左袖床面	50%
200	土師器	坏	14.4	(5.0)	—	長石・石灰・パミス	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面摩耗	中央・南東下層	80% PL50

第7号住居跡 (第44~46図)

位置 調査I区南東部のL5a9区, 内郭の中央部南東寄りに位置している。



第44図 第7号住居跡実測図

**重複関係** 第6号住居跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸7.60m、短軸6.10mの長方形で、長軸方向はN-50°-Eである。壁は北西壁と南東壁が残存しており、壁高は30~35cmで、ほぼ直立している焼失家屋である。

**床** ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められており、南東部と南コーナー部の壁下で壁溝が確認されている。中央部で、長軸80cm、短軸65cmの長方形に貼られた粘土が確認され、その中央にピット（P1）が掘られている。ピット 2か所。P1は径35~45cmの楕円形で、粘土が埋め込まれた床の中央から確認されていることからロクロ設置用のピットの可能性も考えられるが、深さが20cmと浅く、確定しがたい。第2・4層は明褐色の粘土で、第2層の方が砂粒が多い。第1・3層は褐色のローム土で、第1層は焼土粒子が微量含まれる。

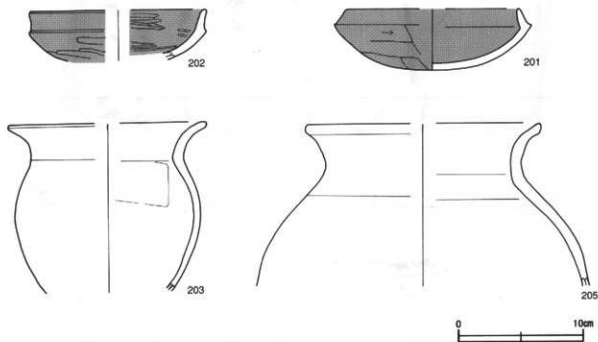
**覆土** 3層からなり、各層にロームブロックと焼土・炭化物が含まれ、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

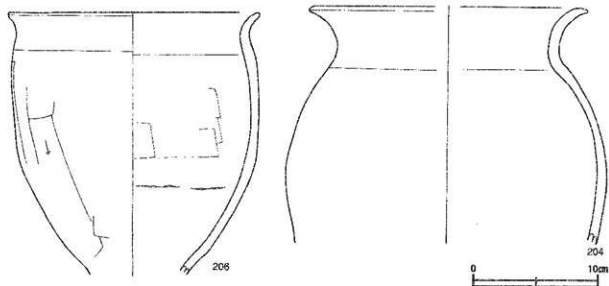
- 1 層 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 層 褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 層 褐色 ローム粒子・炭化物少量

**遺物出土状況** 土師器片540点（坏類121、甕・瓶418、椀1）、須恵器片2点（甗類）が出土しており、土師器の底部片から推定される個体数は、坏10点、甕9点、瓶1点である。これらの遺物は、中央部の覆土上層から中層を中心に出土している。また、焼土と炭化材が覆土下層から床面を中心に全体的に確認されており、焼失家屋と考えられる。出土状況から、201の土師器坏は本跡に伴う土器である。

**所見** 本跡は、面積が46㎡を超える、居館内では大型の住居跡であるが、竈や支柱穴、出入り口施設に伴うピットが見られず、床面中央部からピットを伴う粘土貼りの施設が確認されるなど、一般の住居跡と異なる機能を有していたと考えられる。また、本跡は焼失家屋であるが、住居に伴う土器は少ない。また、焼土や炭化材の出土状況から、住居の廃絶時または廃絶直後に火災を受け、埋め戻されたと考えられる。従って出土土器と本跡の時期差はほとんどなく、第6号住居跡との重複関係などから、時期は6世紀後半と考えられる。また、主軸方向から本跡も内堀を意識して構築されており、居館を構成する施設のひとつである。



第45図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第46図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

第7号住居跡出土遺物観察表(第45・46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	土師器	坏	13.6	4.9	—	赤褐色の土	にぶい褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	40%
202	土師器	坏	14.0	(4.0)	—	長石・ハミス	明赤褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	30%
203	土師器	小形甕	15.4	(13.6)	—	長石・ハミス	褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	35%
204	土師器	甕	21.5	(18.9)	—	長石・石英	黒褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	20%
205	土師器	甕	18.6	(13.0)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	10%
206	土師器	甕	19.6	(21.1)	—	長石・ハミス	明赤褐	普通	口縁部内・外縁部ナデ	口縁部内・外縁部ナデ	中央部上層	15%

### 第8号住居跡(第47・48図)

位置 調査1区南東部のL5d7区、内郭の南コーナー部に位置している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込み、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.34m、短軸4.45mの長方形で、長軸方向はN-34°-Eである。壁高は24cmほどで、外版して立ち上がっている。

床 軟質で平坦である。

ピット 2か所。P1は深さ28cmで、位置と形状から主柱穴の可能性が考えられるが、他の主柱穴は確認されていない。P2は性格が不明である。

覆土 11層からなり、ロームブロックと焼土、炭化物が含まれている層が多く、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

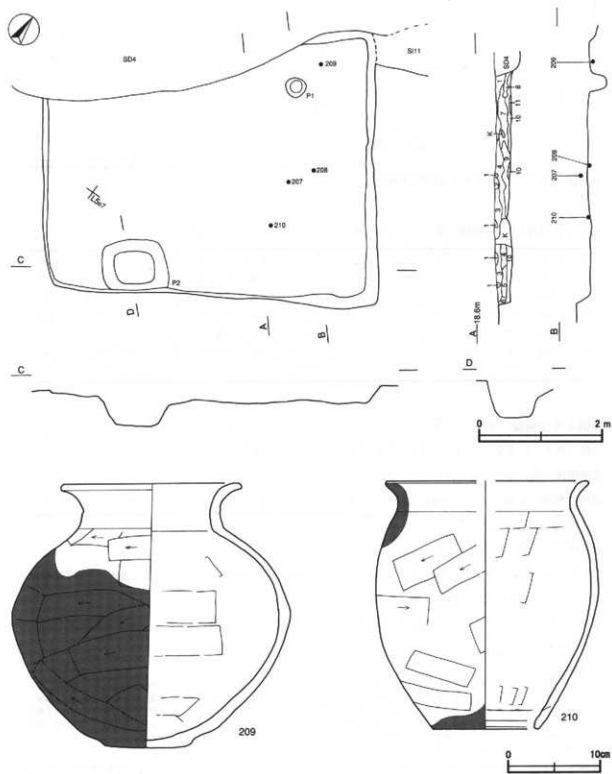
#### 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	灰褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	11	褐色	ロームブロック多量
6	褐色	ロームブロック中量			

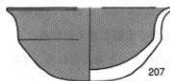
遺物出土状況 土師器片175点(坏類25、甕・甗141、甗5、高坏4)が出土しており、土師器の底部片から推定される個体数は、坏7点、甗1点、高坏5点、甕5点、甗1点である。これらの遺物は、北コーナー部と東

コーナー部を中心に覆土層から床面にかけて出土している。出土状況から、208の土師器高環と209の土師器甕、210の土師器甕は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の長軸方向は内堀の長軸方向と一致しないが、本跡と同時期の土器が堀の底面からも出土しており、居館を構成する施設のひとつと考えられる。本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられ、居館の初期段階の住居である。



第47図 第8号住居跡・出土遺物実測図



第48図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表 (第47・48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
207	土師器	坏	[12.8]	5.9	—	長石・石膏・カス	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面縦ナデ	東部下層	30%
208	土師器	高坏	—	(4.4)	9.2	石膏・カス	にぶい褐色	普通	脚部外面へつ磨き	東部床面	40%
209	土師器	甕	18.3	28.0	8.5	砂粒・スコリア	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	北コーナー部	70% PL50
210	土師器	甕	[20.8]	26.2	10.8	黄・長石・雲母	黄褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	東部床面	60% PL50

### 第9号住居跡 (第49図)

位置 調査I区南東部のL5 b0区, 第2号土橋内側のはほぼ正面で, 南東側の出入りを掘る位置に立地している。

規模と形状 長軸5.25m, 短軸5.07mの方形で, 主軸方向はN-37°-Wである。壁高は23~25cmで, 各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 軟質で平坦である。

竈 北西壁の中央部に付設されている。天井部と袖部は残存せず, 火床面と焚口部も攪乱のため確認することができなかった。煙道部は壁外へ50cm掘り込まれており, 外傾して立ち上がっている。

ピット 10か所。P1・P2は深さ40・49cmで, 位置と形状から主柱穴と考えられる。また, P1・P2の北東側に主柱穴が存在したと想定し, 北コーナー部と東コーナー部の床面を精査したが, 攪乱のため, 確認できなかった。P3は深さ66cmで, 南東壁寄りの中央に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4~P10の性格は不明である。

#### P1・P3土層解説

1 褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子微量
2 明褐色	ローム粒子多量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック微量		

貯蔵穴 平面形は隅丸長方形を呈し, 北コーナー部に付設されている。深さは55cmで, 底面は皿状を呈しており, 壁はほぼ直立している。

#### 貯蔵穴土層解説

1 褐色	ロームブロック少量	3 暗褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子微量

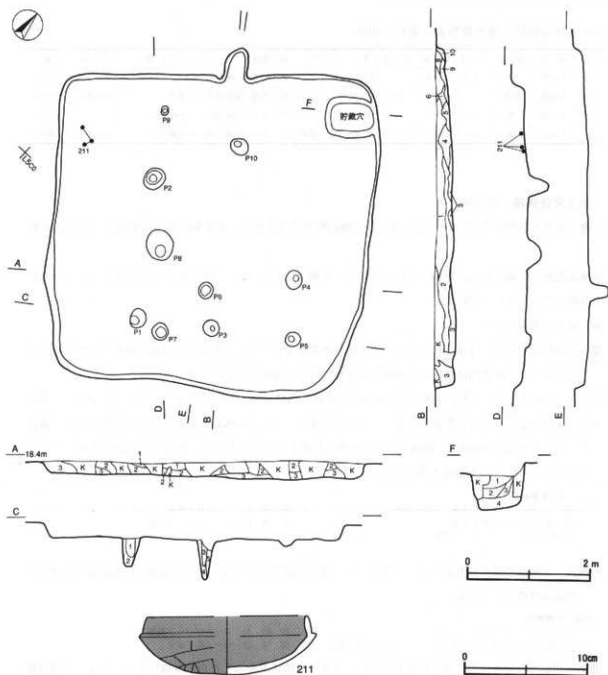
覆土 10層からなり, 第3層から流れ込むレンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第5~10層は竈の部材が流れ込んだ土層である。

#### 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量	6 灰褐色	粘土粒子・砂粒中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	7 極暗褐色	焼土ブロック少量, 粘土粒子・砂粒微量
3 褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化材少量, 焼土ブロック微量	9 黒褐色	焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
5 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック微量	10 黒褐色	炭化物少量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

遺物出土状況 土師器片74点（坏類31、壺・瓶43）、須恵器片1点（坏）が出土している。これらの遺物は西部の床面と竈内を中心に出土している。出土状況から、211の土師器坏は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡も、主軸方向から、内堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつと考えられる。本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられるが、6世紀後葉の第7号住居跡と隣接しているため、同時に存在しなかったと考えられる。



第49図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	土色	調成	手法の特徴	出土位置	備考
211	土師器	坏	[12.8]	4.8	—	パミス	黒褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面へラ削り	西壁階下層	60% PL50

第10号住居跡 (第50・51図)

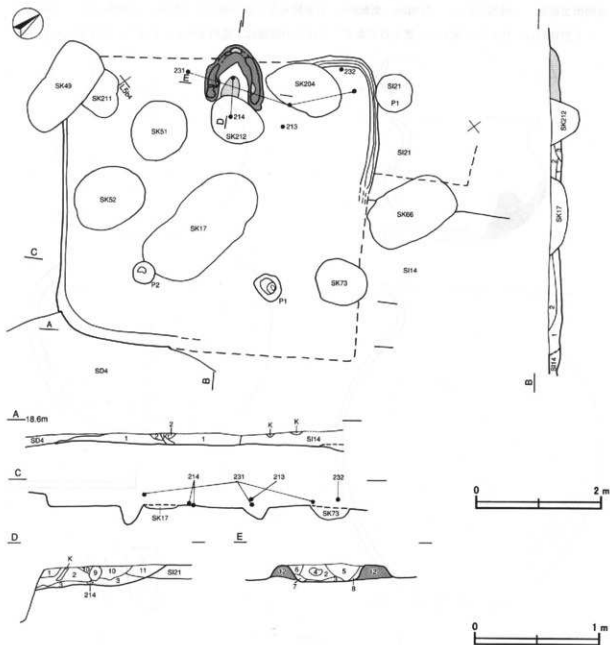
位置 調査I区南東部のL5b4区、内堀の南西辺から8mほど内側に位置している。

重複関係 第14・21号住居跡を掘り込み、第4号溝と第12・17・49・51・52・73・204・211・212号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北コーナー部と南コーナー部の壁が残存しており、長軸推定4.80m、短軸4.50mの方形と推定され、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は20cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 軟質で平坦であり、北コーナー部壁下に壁溝が確認されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。火床部の一部と焚口部は第212号土坑に掘り込まれているが、袖部が残存し、袖部最大幅95cm、煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれ、緩やかに傾斜して立ち上がっている。第12層は袖部であり、平坦な地山の上に砂泥じりの粘土を積み上げて構築されている。火床部はほぼ平坦に作られて



第50図 第10号住居跡実測図



おり、赤変硬化している。

覆土層解説

- |        |                                  |         |                     |
|--------|----------------------------------|---------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒微量               | 7 暗褐色   | ロームブロック・焼土粒子・砂粒微量   |
| 2 明赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量               | 8 橙褐色   | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量        | 9 暗赤褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量  |
| 4 赤褐色  | 焼土ブロック・砂粒少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量  |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土ブロック・砂粒微量        | 11 暗赤褐色 | 砂粒少量、焼土粒子・粘土粒子微量    |
| 6 暗赤褐色 | 砂粒少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量             | 12 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量           |

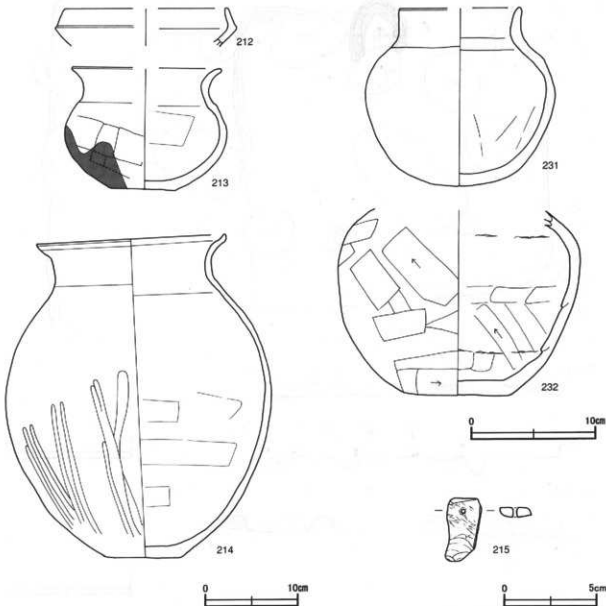
ピット 2か所。主柱穴はP1・P2で、深さは15cmと25cmである。また、P1・P2の北西側に主柱穴が存在したと想定して、北コーナー部と西コーナー部の床面を精査したが確認されなかった。

覆土 3層からなるが覆土が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- |       |                    |       |                       |
|-------|--------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量   |       |                       |

遺物出土状況 土師器片135点(坏類50, 甕類85), 石製模造品1点が出土しており, 土師器の底部片から推定される個体数は, 坏6点, 碗1点, 甕4点である。これらの遺物は, 竈内を中心に出土し, 出土状況から, 212



第51図 第10号住居跡出土遺物実測図

の土師器環と214の土師器甕は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡も主軸方向から、堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつと考えられる。本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉から7世紀初頭と考えられるが、6世紀後葉の第14号住居跡を掘り込んでいるため、それよりも新しく、居館最終期の住居である。また、掘り込んでいる第14号住居跡と主軸方向が一致しているため、それを建て替えたものと推定される。

#### 第10号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
212	土師器	環	[13.0]	(3.1)	—	長石・石英・バミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	竪覆土中	10%
213	土師器	小形甕	[11.7]	9.8	5.2	石英・バミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 底部外面ヘラナデ	北部中層	60%
214	土師器	甕	19.5	33.9	8.2	長石・石英・バミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	甕下層・床面	80% PL51
231	土師器	小形甕	[9.6]	14.3	—	長石・石英・砂粒	にぶい赤黒	不良	口縁部内・外面横ナデ, 底部内面ヘラナデ	北西上・中層	60% PL51
232	土師器	甕	—	(14.8)	8.9	長石・石英・砂粒	にぶい黒	普通	体部内面上半横ナデ, 底部外面ナデ	北東壁土層	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
215	石製模造品	(3.0)	2.6	0.6	(4.7)	頁岩	勾玉形, 磨き調整なく表面凹凸残る	覆土上層	95% PL65

#### 第11号住居跡 (第52・54・55図)

位置 調査I区南東部のL5c8区, 第2号土橋の約8m内側に位置している。

重複関係 遺構の大半を第8・13号住居跡, 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 残存するのは南東壁5.82m, 北東壁2.15mだけであるが方形と推定され, 南東壁からの主軸方向はN-20°-Wである。壁高は10~14cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 軟質で平坦である。

ピット 1か所。性格は不明である。

覆土 2層からなるが覆土が薄く, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片61点(環類8, 甕類53), 鉄器1点(鎌)が出土しており, 土師器の底部片から推定される個体数は, 環4点, 甕4点である。216の土師器環は第4号溝の覆土上層と底面から出土しているが, 出土状況から本跡から流れ込んだものと考えられ, 本跡で取り上げた。

所見 本跡の時期は, 出土土器から5世紀後葉と考えられる。同時期の土器は, ごくわずかであるが内堀からも出土している。しかしながら, 本跡の主軸方向が内堀の長軸方向とは異なり, 周辺にも同時期の住居跡が存在しないことから, 第1~3号堀の構築は困難であり, 内堀から出土した5世紀後葉の土器は混入と考えられ, 本跡は居館が構築される以前の住居と推定される。



第52図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
215	土師器	埴	15.3	5.6	4.1	赤丹・バミス	にない得	普通	口縁部内外裏面ナシ、底部外面へうろこ?	覆土中	95% Pl.50

第12号住居跡 (第53図)

位置 調査I区南東部のK5j6区、内郭のほぼ中央に位置している。

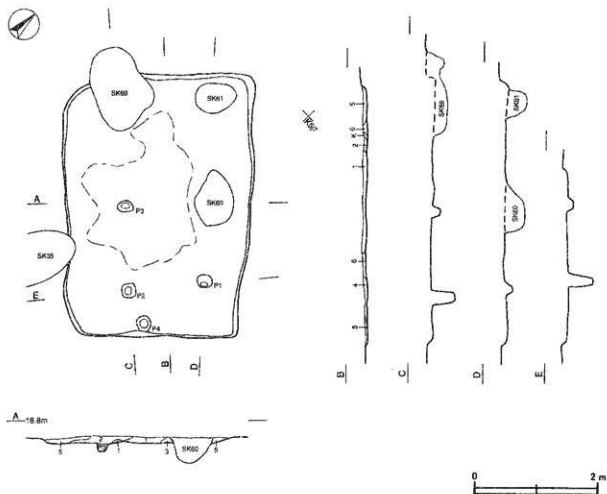
重複関係 第35・60・61・69号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.25m、短軸3.07mの長方形で、主軸方向はN-45°-Wである。増高は3~11cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部分が踏み固められている。東コーナー部でわずかに未変している箇所が確認されているが、床は灰質で焼け方も非常に弱いため、炉跡とは考えられない。

ピット 4か所。P1~P3は、深さが12~40cmと均一ではないが、配置された位置から柱穴の可能性が考えられる。北コーナー部や西コーナー部、北東壁寄り中央の床面を精査したが、第60・61・69号土坑に掘り込まれるなどして、P1~P3と対応する柱穴は確認されなかった。P4の性格は不明である。

覆土 6層からなる。覆土が厚く堆積状況の判断は困難であるが、多くの層に分層でき、ロームブロックを含む層が多いことから、人為堆積と推定される。



第53図 第12号住居跡実測図

## 土層解説

1 灰褐色	ロームブロック少量	4 灰褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片55点(坏類14, 甕類41)が出土している。出土遺物はいずれも細片で図示できるものはない。

所見 本跡は、面積が約13㎡と小形で、竈や炉が設けられておらず、一般の住居跡とは異なる機能を有していたと考えられる。本跡は、出土遺物がいずれも細片のため明確な時期を判断するのが困難であるが、主軸方向が内廂の長軸方向と近いことから内廂を意識して構築された居館を構成する施設のひとつと考えられる。

## 第13号住居跡(第54・55図)

位置 調査I区南東部のL5 b6区, 中央部やや南寄りに位置している。

重複関係 第11・14号住居跡を掘り込み、第26・38A・38B・44・67・82・95号土坑と第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が6.65mほどの方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁高は16~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から各土柱穴にかけて踏み固められており、北西壁下中央から南東壁下中央にかけて境溝が確認されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。袖部は残存し、焚き口から煙道部まで135cm、竈部最大幅105cmで、煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれており、緩やかに傾斜して立ち上がっている。第17~25層は火床部の埋土と袖部であり、断面U字状に地山を掘りくぼめてからロームブロック混じりの第23~25層を埋め、北東部と南西部にロームと砂混じりの粘土の第17~21層を積み上げて竈部を構築し、中央部に第22層を埋めて火床面を作り出している。火床面は、赤変硬化している。

## 埋土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	14 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量
2 灰褐色	粘土ブロック・砂粒少量	15 にぶい褐色	ローム粒子少量、砂粒微量
3 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒微量	16 褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック微量
4 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量	17 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量
5 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	18 にぶい黄褐色	砂粒少量、焼土粒子微量
6 灰褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量	19 にぶい黄褐色	粘土ブロック・砂粒・焼土ブロック微量
7 明赤褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック微量	20 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量
8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	21 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・粘土ブロック・砂粒微量
9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	22 暗褐色	焼土ブロック少量、粘土ブロック・砂粒微量
10 赤褐色	焼土ブロック中量	23 褐色	ロームブロック中量
11 にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	24 暗褐色	ロームブロック少量
12 暗赤褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	25 暗褐色	ローム粒子少量
13 赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子微量		

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4で、深さは48~66cmである。P5は深さが58cmで、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P6の性格は不明である。

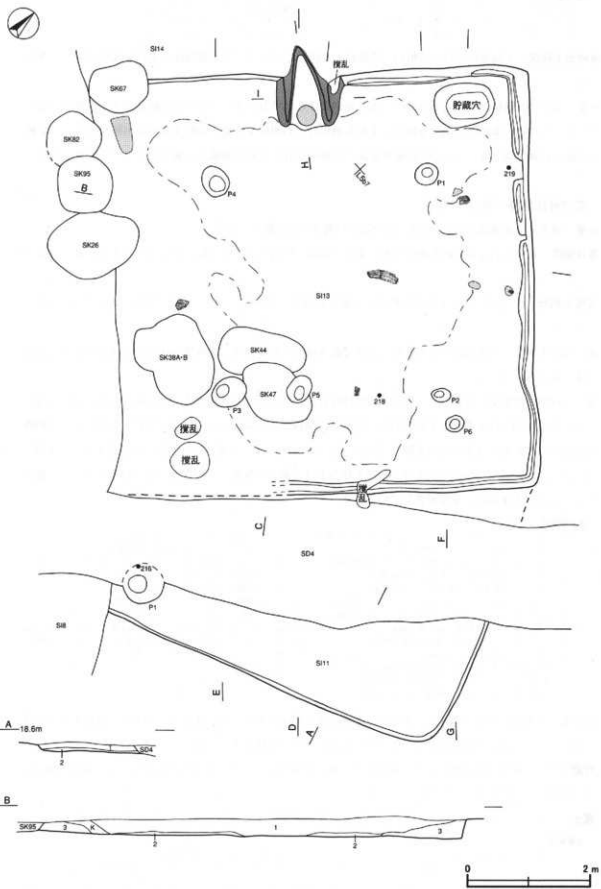
貯蔵穴 平面形は楕円形を呈し、北コーナー部に付設されている。深さは50cmほどで、底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、第3層から流れ込むレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

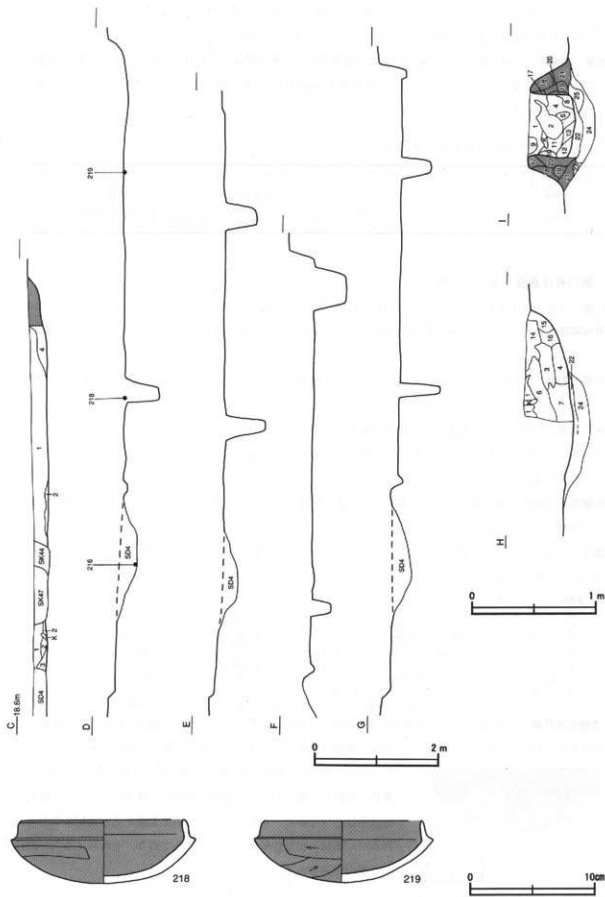
## 土層解説

1 黒褐色	焼土粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック微量	4 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片388点(坏類165, 高坏10, 甕類213)、土製品2点(支脚)が出土しており、土師器の底部片から推定される個体数は、坏6点、高坏1点、甕3点である。これらの遺物は、全体的に覆土上層から



第54图 第11·13号住居跡実測图



第55图 第11・13号住居跡・出土遺物実測図

床面にかけて出土しており、218と219の土師器坏は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。また、わずかに焼土と炭化材が覆土下層と床面から出土しており、焼失家屋と想定される。

所見 本跡は、主軸方向から、内堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつである。出土土器から、時期は6世紀後葉と考えられるが、同じ6世紀後葉の第14号住居跡を掘り込んでいるため、それよりも新しい時期の住居跡である。

#### 第13号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	土師器	坏	12.8	5.1	—	長石・パミス	いぶき褐	普通	口縁部内・外面横ナデ、内・外面摩耗	東部床面	100% PL50
219	土師器	坏	12.5	4.9	—	石英・パミス	燈	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナデ、底部外面へうすり	北東壁際床面	95% PL50

#### 第14号住居跡（第56・57図）

位置 調査Ⅰ区南東部のL5b5区、中央部の南西寄りに位置している。

重複関係 第10・13号住居跡、第19・20A・20B・31・55・63・66・67・73・78・87号土坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.36m、短軸6.00mの方形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は20~23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 軟質で平坦である。北東壁下で壁溝が確認されている。

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは50cmほどである。P5は深さが45cmで、位置と形状から補助的な柱穴と考えられる。

貯蔵穴 平面形は隅丸方形を呈し、東コーナー部に付設されている。深さは30cmほどで、底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 16層からなり、各層ともロームブロックを含んだ人為堆積である。第8~10層はP2の覆土、第11~13層はP1の覆土である。

##### 土層解明

1 明褐色	ロームブロック多量	9 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 橙褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子少量
3 橙褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	11 明褐色	ロームブロック多量
4 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子少量
6 明褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
7 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	15 暗褐色	ローム粒子少量
8 橙褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片292点（坏類84、甕類204、不明4）が出土しており、土師器の底部片から推定される個体数は、坏12点、甕6点である。これらの遺物は、北部から中央部を中心に覆土上層から床面にかけて出土しており、220の坏は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。



第56図 第14号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡も主軸方向から、内堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつである。本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられるが、第10・13号住居跡に掘り込まれており、それらよりも一段階古い時期の住居である。





第14号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

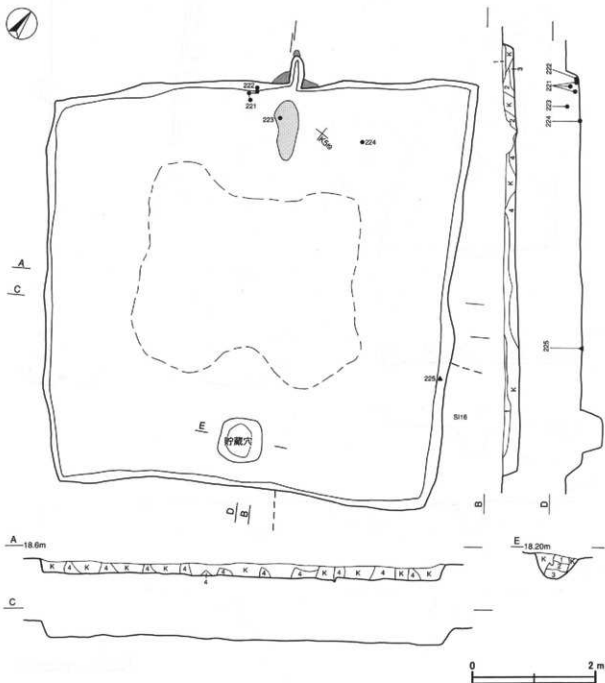
番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
220	土師器	坏	[12.8]	4.8	—	—	長石・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面準直	貯蔵穴下層	60% PL51

第15号住居跡 (第58・59図)

位置 調査Ⅰ区南東部のK5f9区, 内郭中央部の北東寄りのスロープ状施設から10mほど内側に位置している。

重複関係 東部の一部が第16号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.83m, 短軸6.25mの方形で, 主軸方向はN-35°-Wである。壁高は20cmほどで, 外傾して立ち上がっている。



第58図 第15号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されているが、天井部、袖部とも残らず、わずかに火床面と煙道部が残存しているだけであり、煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。火床面は赤変硬化している。

貯蔵穴 平面形は隅丸長方形を呈し、南東壁際の中央に付設されている。深さは40cmほどで、底面は皿状を呈しており、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 灰暗褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 ロームブロック少量  
3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

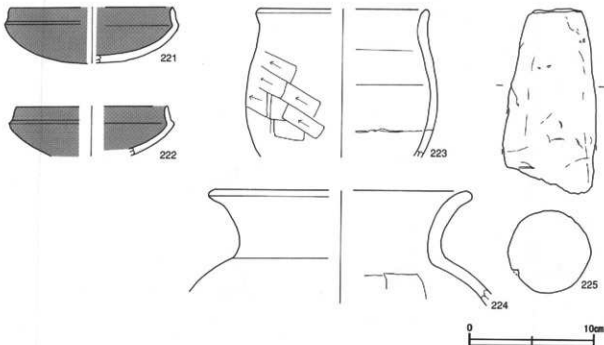
覆土 4層からなるが、攪乱が激しく、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量  
2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒微量  
3 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒微量  
4 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片382点(坏類118, 甕類262, 手握土器1, 不明1), 須恵器片3点(坏類1, 甕類2), 土製品10点(支脚片)が出土しており, 土師器の底部片から推定される個体数は坏8点, 甕4点である。これらの遺物は、竈周辺を中心に出土しており, 221の坏は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡も主軸方向から、堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつで、出土土器から時期は6世紀後葉と考えられる。



第59図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	土師器	坏	[12.8]	4.5	—	長石・雲母	灰黄褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面摩耗	北部壁際下層	30%
222	土師器	坏	[12.0]	(3.9)	—	長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面摩耗	北部壁際床面	15%
223	土師器	小形甕	[13.4]	(11.8)	—	長石・雲母	にぶい赤褐色	不良	口縁部内・外面横ナデ, 底部内面ヘラナデ	火床部上層	30%
224	土師器	甕	[20.0]	(9.1)	—	長石・石長・雲母	褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ, 底部内面ヘラナデ	北東部床面	15%

番号	器種	長さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
225	支脚	(14.8)	6.6	—	(560)	土製	ナデ、被熱痕あり	北東段階床面	70%

### 第16号住居跡 (第60図)

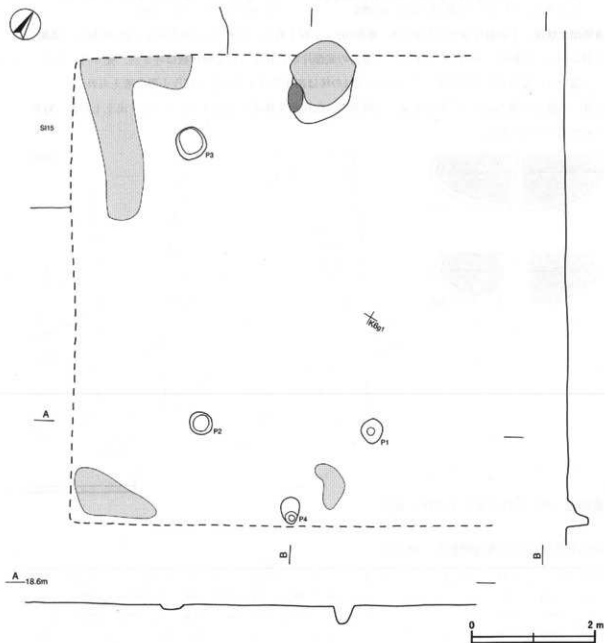
**位置** 調査I区南東部のK5g0区、内郭の北東部のスロープ状施設から6mほど離れて位置している。

**重複関係** 第15号住居跡の上に構築されている。

**規模と形状** 床面が露出した状態で検出されたため壁は明確でないが、支柱穴の配置や床面の出土状況などから長軸7.50m、短軸6.50mほどの長方形と推定される焼失家屋で、主軸方向はN-31°-Wである。

**床** 軟質でほぼ平坦である。

**竈** 残存していないが、北西辺のほぼ中央から焼土と粘土が確認されており、そこに付設されていたと推定さ



第60図 第16号住居跡実測図

れる。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P3で、深さは4～10cmである。また、P3の北東側に主柱穴が存在したと想定し、北コーナー部の床面を精査したが、確認されなかった。P4は深さ32cmで、南東辺寄りの中央に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

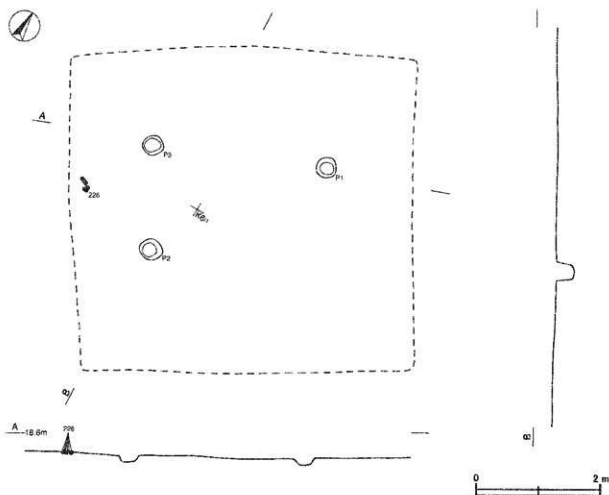
遺物出土状況 土師器片38点(坏類11, 甕類27), 須恵器片1点(坏類)が出土している。これらの遺物はすべて細片で、図示できるものはない。また、西コーナー部と南コーナー部、南東辺中央部の床面から焼土が確認され、焼失家屋と推定される。

所見 本跡は、面積が50㎡に近い内部では大形の住居跡である。床面からは焼土が確認され、焼失家屋と推定されるが、覆土が残存していないため、火災を受けた状況は不明である。木跡の出土遺物はいずれも細片のため時期判断が困難であるが、主軸方向が内堀に近いことから居館を構成する施設のひとつで、6世紀後半の第15号住居跡の上に構築されていることから居館最終期の住居と考えられ、6世紀後半から7世紀初頭の時期が想定される。

#### 第17号住居跡 (第61・62図)

位置 調査I区南東部のK8h1区、中央部の東寄りに位置している。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、壁は確認されていないが、主柱穴の配置や遺物の出土範囲などから判断して、長軸5.40m、短軸5.00mほどの長方形と推定され、長軸方向はN-59°-Eである。



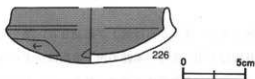
第61図 第17号住居跡実測図

床 軟質で平坦である。

ピット 3か所。主柱穴はP1～P3で、深さは10～20cmである。また、P1の南東側の、北コーナー部の床面を精査したが、柱穴は確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片32点(坏類18, 甕類14)が出土している。これらの遺物は、西部と南部の床面から出土しており、226の土師器坏は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡は、居館最終期の第16号住居跡と隣接しているため同時期に存在したとは考えられず、出土土器などからも、それよりは古い時期の6世紀後半と推定される。本跡は、主軸方向が内堀の長軸方向と一致しないが、時期から居館を構成する施設のひとつと考えられる。



第62図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

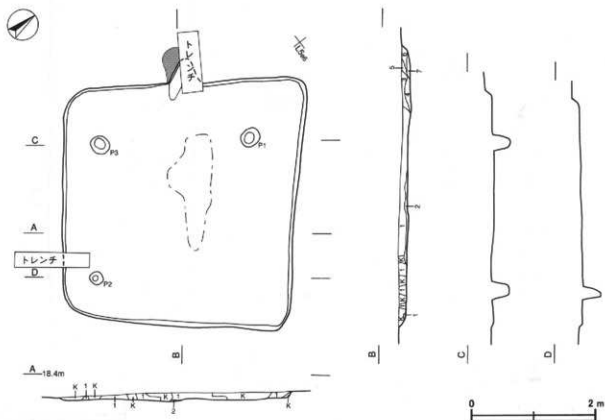
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
226	土師器	坏	[12.3]	4.4	—	雲母・スコリア	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外周及び底部内面磨ナデ	北西部床面	60%

第19号住居跡 (第63・64図)

位置 調査I区南東部のL5e6区、内郭の南コーナー部に位置している。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.80mの方形で、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第63図 第19号住居跡実測図

**竈** 天井部や袖部、火床部は残存してないが、北西壁の中央部に火熱を受けて赤変した壁と粘土が確認され、それが壁外に50cmほど掘り込まれていることから、そこに付設されていたと考えられる。

**ピット** 3か所。主柱穴はP1～P3で、深さは25～30cmである。P1と対応する主柱穴を東コーナー部で精査したが、確認されなかった。

**覆土** 7層からなるが攪乱が激しく、覆土も薄いため堆積状況は不明である。第3～7層は竈の覆土である。

**土層解説**

- |         |                            |       |                        |
|---------|----------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色   | ロームブロック少量                  | 5 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量       |
| 2 褐色    | ロームブロック中量                  | 6 褐色  | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量     |
| 3 暗褐色   | ロームブロック少量、焼土ブロック微量         | 7 灰褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 極暗赤褐色 | ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 |       |                        |

**遺物出土状況** 土師器片27点(坏類7, 甕類20)が出土している。これらの大半は細片である。

**所見** 本跡の出土土器は細片であり、本跡に伴うものがないが、覆土中の土器から時期は6世紀後半と推定される。また、面積は約15㎡と小形で他の住居跡から離れて位置している。主軸方向は、内堀の長軸方向とは異なるが、居館が機能していた時期の住居であり、それを構成する施設のひとつと考えられる。



第64図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表(第64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
227	土師器	坏	[12.0]	(2.1)	—	砂粒	にぶい赤黒	普通	口縁部内外面及び体部内面磨ナデ	覆土下層	5%

第20号住居跡(第32図)

**位置** 調査I区南東部のK5f4区、第1号土橋から約8m内側に位置している。

**重複関係** 第2号住居跡、第83・84号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南西辺3.74mで、北西辺と南東辺は1.44mだけが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、北西辺の方向はN-42°-Wである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

**床** 軟質で平坦である。

**覆土** 覆土は薄いが単一層で、ロームブロックを含むことから人為堆積と推定される。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片6点(甕類)が出土している。出土遺物はいずれも細片であり、図示できるものはない。

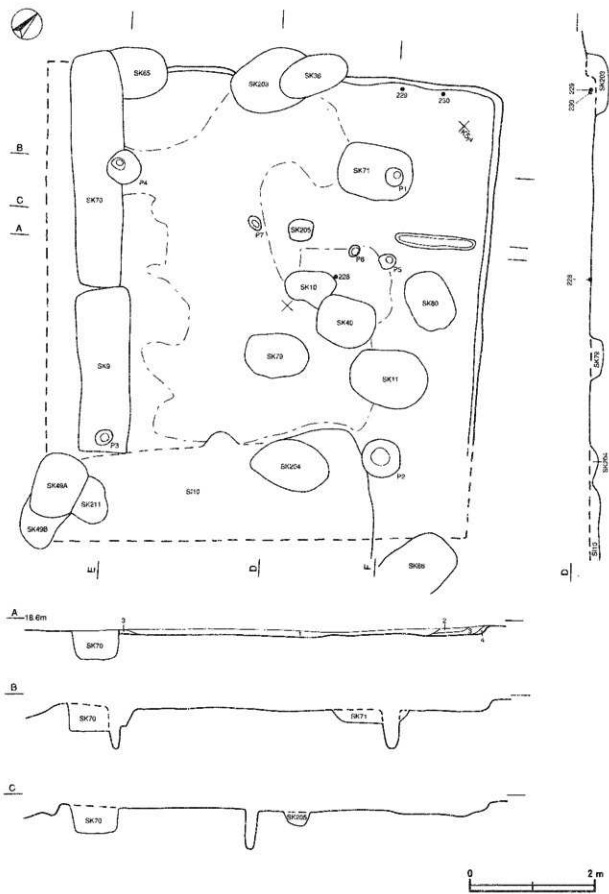
**所見** 本跡は、主軸方向から、内堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつと考えられる。本跡は6世紀後半の第2号住居跡に掘り込まれていることから、居館初期段階の住居と考えられ、6世紀中葉の時期が想定される。

第21号住居跡(第65・66図)

**位置** 調査I区南東部のK5j3区、内郭の西部に位置している。

**重複関係** 第10号住居跡、第9・10・11・12・36・40・49A・49B・65・70・71・79・80・90・203～205・211号土坑、第4号溝跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 北西壁と北東壁が遺存しており、長軸7.30m、短軸6.95mの方形と推定され、主軸方向はN-40°-Wである。壁高は10cmで、外傾して立ち上がっている。



第65图 第21号住居跡実測図

床 はほぼ平坦で、中央部から各主柱穴にかけて踏み固められている。北東壁下から深さ7cmほどの間仕切り溝1条が確認されている。

竈 遺存していないが、北西壁際中央部の覆土中に焼土や砂粒が検出されたことから、そこに付設されていたと考えられ、第36・203号土坑に掘り込まれてしまっている。

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4で、深さは39～65cmである。P5～P7の性格は不明である。

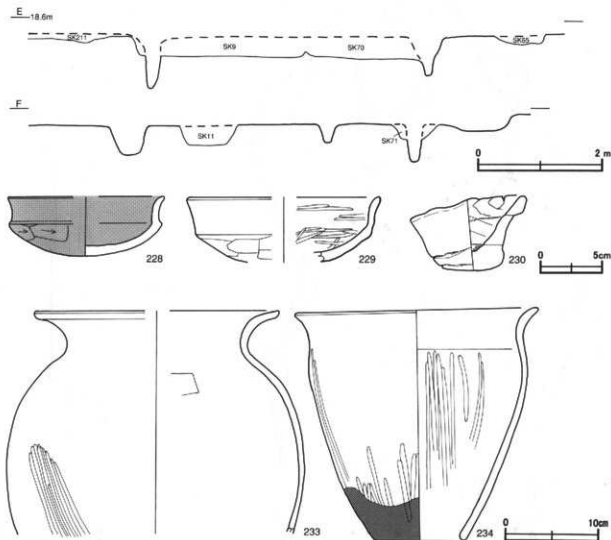
覆土 4層からなるが、覆土が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量     |
| 2 暗褐色 炭化物少量、ローム粒子微量  | 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片273点（坏類54，甕・甔210，手捏土器3，不明6），須恵器片2点（甕，甔）が出土しており，土師器の底部片から推定される個体数は，坏8点，手捏土器2点，甕7点，甔1点である。これらの遺物は，竈周辺を中心に出土しており，覆土下層から床面にかけて出土している。228～230は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡も堀を意識して構築された居館を構成する施設のひとつであり，本跡の出土土器から時期は6世紀後半と考えられ，居館の初期段階の住居である。



第66図 第21号住居跡・出土遺物実測図



第21号住居跡出土遺物観察表（第66図）

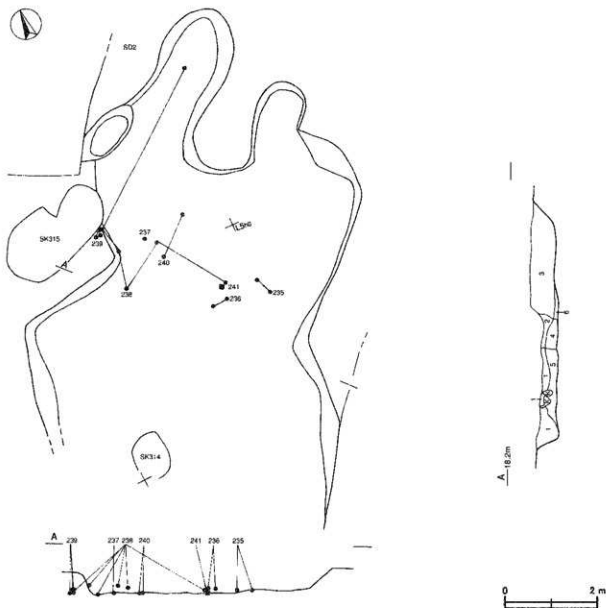
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	測地	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
228	土師器	杯	12.2	4.7	—	長石・石英	にぶい	黒	普通	口縁部内・外面横ナデ、係器内側割器	中央部床面	40%
229	土師器	外	16.2	5.2	—	長石・石英	にぶい	黒	普通	口縁部内・外面横ナデ	北東壁際ト基	30%
230	土師器	付土器	9.0	6.0	5.1	長石・石英	にぶい	黒	普通	内・外面ナデ、全部内・外面ヘラテ	北東壁際下層	100% PL51
233	土師器	甕	25.2	23.5	—	長石・石英	浅黄緑	黒	普通	体部内面ヘラテ	覆土中	30%
234	土師器	甕	24.8	24.3	9.3	長石・石英	にぶい	黒	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	80% PL51

③ 堀内の不明遺構

第6号不明遺構（第67・68図）

位置 調査1区南東部の1.5g8～i8区、第2号堀南コーナー内部に位置している。

重複関係 第2号堀の底面を掘り込み、第314・315号土坑に掘り込まれている。



第67図 第6号不明遺構実測図

**規模と形状** 南部が調査区域外のため、確認された長軸は10mほどで、短軸8mの不整形を呈し、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は15~37cmで、外傾して立ち上がっている。

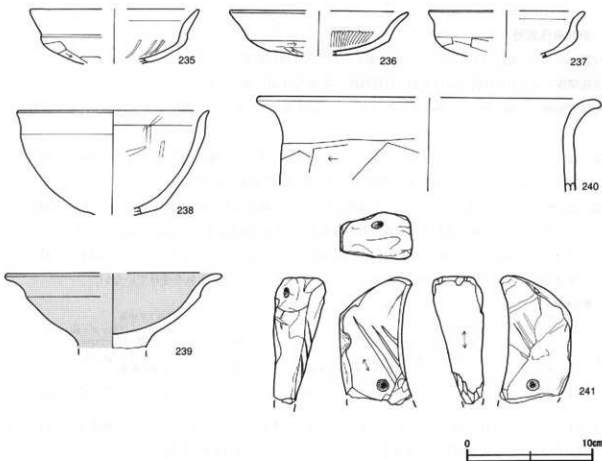
**覆土** 6層からなり、第1層は堀の下層と同じ覆土で自然堆積の状況を示し、第2~7層はロームブロックを含んだブロック状の堆積状況を示す人為堆積で、廃絶後に一部に土を埋め、その後自然に堆積したと考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	ロームブロック少量	4 灰褐色	ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック中量	5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子中量	6 褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片691点(坏138, 椀4, 高坏6, 壺・瓶535, 不明8), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石)が出土しており、土師器の底部片から推定される個体数は坏17点, 椀1点, 高坏2点, 壺3点, 瓶3点である。これらの遺物は、底面を中心に全体的に出土しており、投棄された状況を示している。

**所見** 本跡の平面形は不整形であり、本跡が掘られた目的と性格は不明であるが、遺物の出土状況から、最後は遺物を投棄する施設として機能したと推定される。本跡の時期は出土土器から6世紀中葉と考えられ、居館の初期段階に遺物が投棄されたものと考えられる。



第68図 第6号不明遺構出土遺物実測図

第6号不明遺構出土遺物観察表(第68回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施焼	手法の特徴	出土位置	備考
235	土師器	坏	[14.4]	(4.4)	--	灰白・ハミス	緑	普通	口縁部内・外面横ナデ	東部底面	25%
236	土師器	坏	[14.0]	(3.6)	--	長石・ハミス	明赤黒	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部土層	25%
237	土師器	坏	[12.3]	(3.7)	--	灰白・ハミス	明赤黒	普通	内・外面厚化粧	西部底面	25%
238	土師器	甗	15.3	(6.4)	--	砂粒	にぶ黄緑	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面厚化粧	中央部土層	63% PL51
239	土師器	高坏	[16.9]	(5.0)	--	長石・ハミス	赤	普通	口縁部内・外面横ナデ, 内・外面厚化粧	西部土層・底面	40%
240	土師器	甗	[26.8]	(7.5)	--	黄緑・S257	緑	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部底面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
241	紙石	(10.2)	(5.8)	4.1	(254)	頁岩	底面4面, 目が細かい。	中央部底面	PL66

## (2) 居館以外の遺構と遺物

居館以外の遺構は、堅穴住居跡8軒が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

## ① 堅穴住居跡

## 第30号住居跡(第69・70回)

位置 調査Ⅰ区北部の14g1区, 第3号堀から約50m北西に位置している。

重複関係 第38号住居跡と第11号掘立柱建物跡, 第260号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.40m, 短軸5.20mの方形で, 主軸方向はN-35°-Wである。壁高は20cmほどで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部から各支柱穴にかけて踏み固められている。掘り方は, 中央部が不整形円形に20cmほど掘りくぼめられ, ロームブロックで厚さ5~10cmほどの床が貼られている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。右袖部は残存し, 左袖部の基部が一段低く残ることから, 範囲が推定できるだけである。規模は築1日から残存する煙道部まで100cm, 袖部最大幅125cmほどである。煙道部は, 壁外へ15cmほどで第260号土坑に掘り込まれているが, 緩やかな傾斜で立ち上がっている。袖部は粘土・砂・ロームで構築され, 火床部は地山を掘りくぼめられて作られており, あまり火熱を受けていない。

## 竈土層解説

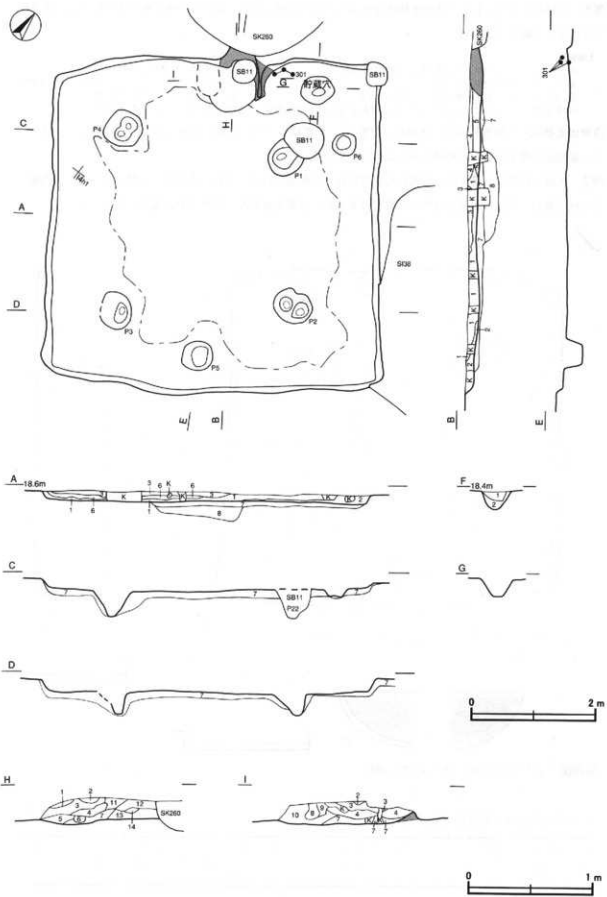
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック微量	9 暗褐色	砂粒少量, ロームブロック・粘土ブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック微量	10 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	12 暗褐色	炭化粒子・砂粒微量
6 灰褐色	粘土粒子・砂粒中量, ロームブロック少量	13 暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック微量
7 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	14 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。支柱穴はP1~P4で, 深さは40cmほどである。P5は深さ30cmで, 南東壁寄りのほぼ中央に位置しており, 出入り口施設に伴うピットであるが, P6の性格は不明である。

貯蔵穴 平面形は楕円形を呈し, 右袖部の脇に付設されている。深さは30cmほどで, 底面は皿状を呈しており, 壁は外傾して立ち上がっている。

## 貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
-------	-------------	-------	----------------



第69图 第30号住居跡実測图

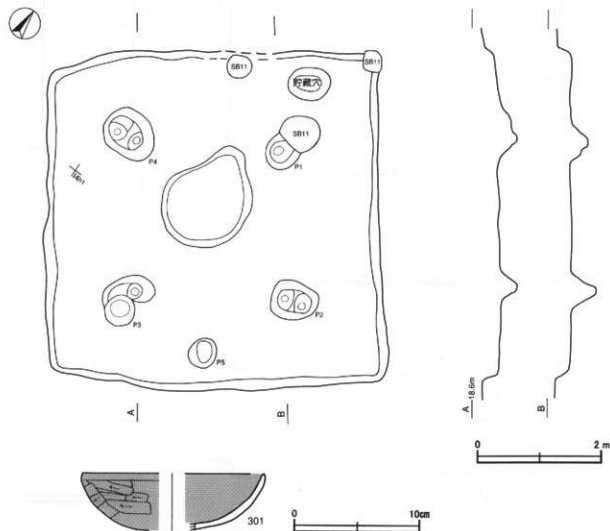
覆土 8層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第7・8層は掘り方の埋土で、第7層は第8層よりも締まりが強い。

土層解説

- |        |                               |        |                    |
|--------|-------------------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量           | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂粒少量          |
| 2 褐色   | ロームブロック少量                     | 6 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 3 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量             | 7 褐色   | ロームブロック中量          |
| 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色  | ロームブロック中量          |

遺物出土状況 土師器片68点（坏類24、甕類44）、須恵器片2点（坏類、高坏）が出土している。これらの遺物は竈周辺の覆土上層から中層を中心に出土している。

所見 本跡の時期は、覆土中の土器から6世紀後半と推定される。また、本跡は、主軸方向が居館の内堀の長軸方向と概ね一致しており、居館の外部ではあるが、居館を意識して構築された施設と考えられる。



第70図 第30号住居跡・出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
301	土師器	坏	[14.3]	(4.9)	—	長石・スコリア・バミス	にぶい橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面 横ナデ	竈右脇中・下層	70% PL51

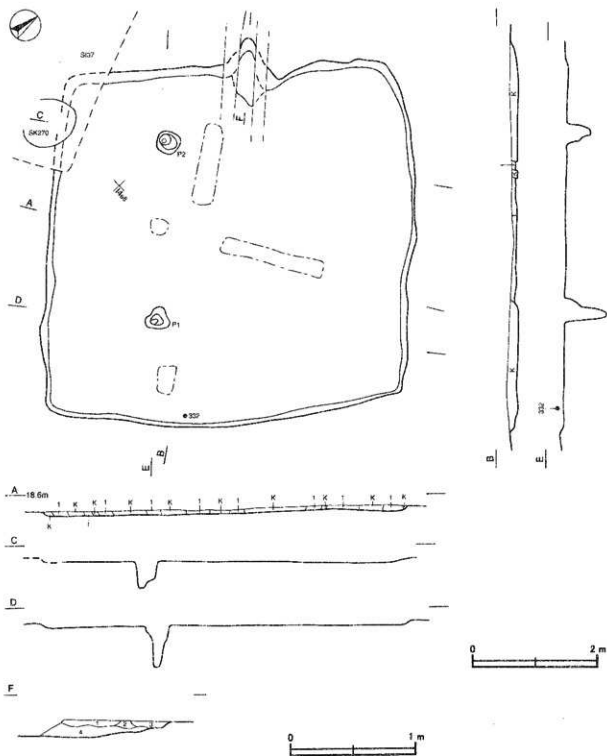
第36号住居跡 (第71・72図)

位置 調査I区北部のI4d8区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第37号住居跡・第270号土坑に掘り込まれている。

確認状況 トレンチャーによる攪乱が著しく、遺構の遺存状況は極めて悪い。

規模と形状 長軸5.85m、短軸5.80mの不整形であり、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は最大で10cmである。



第71図 第36号住居跡実測図

床 残存部分の床面は、ほぼ平坦で中央部が踏み固められている。壁溝は検出されていない。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設され、右袖の一部が残存する。規模は焚口から煙道部まで105cm、壁外への掘り込みは43cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築され、床面をわずかに掘りくほめた地山面を火床面としている。火床面から煙道部は、被熱のため赤変している。竈土層断面図中の、第3層は崩落した天井部の一部である。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量  
 2 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子・砂粒微量  
 3 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量  
 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は主柱穴に相当し、深さは45～65cmである。北東壁側に想定される主柱穴2か所及び出入り口施設に伴うピットは攪乱により検出されなかった。

覆土 ロームブロックを微量含む黒褐色土の単一層である。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片97点（環類25、甕類72）が出土し、大部分は細片である。第72図333・334はいずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡に明確に帰属するといえる遺物がないうえに、時期を推定するのは困難である。しかし、図示した遺物は、本跡の周辺近くと同時期と推定される遺構がないため本跡に伴う可能性は高く、また本跡の軸方向は本跡の南側90m程に位置する第1・2・14号住居跡等とほぼ同一であり、規模も近似している。これらから類推した本跡の時期は、6世紀中葉である。



第72図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第72図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
332	土師器	環	[11.9]	4.7	—	雲母・長石	にぶい濁	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部内面ナデ	東部下層	40%
333	土師器	環	[14.5]	(4.5)	—	雲母・長石	にぶい濁	普通	外部外面へラ削り、内・外面磨耗	覆土中	10%
334	土師器	環	[10.2]	(4.1)	—	雲母・長石	にぶい濁	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部内面ナデ	覆土中	5%

#### 第66号住居跡（第73・74図）

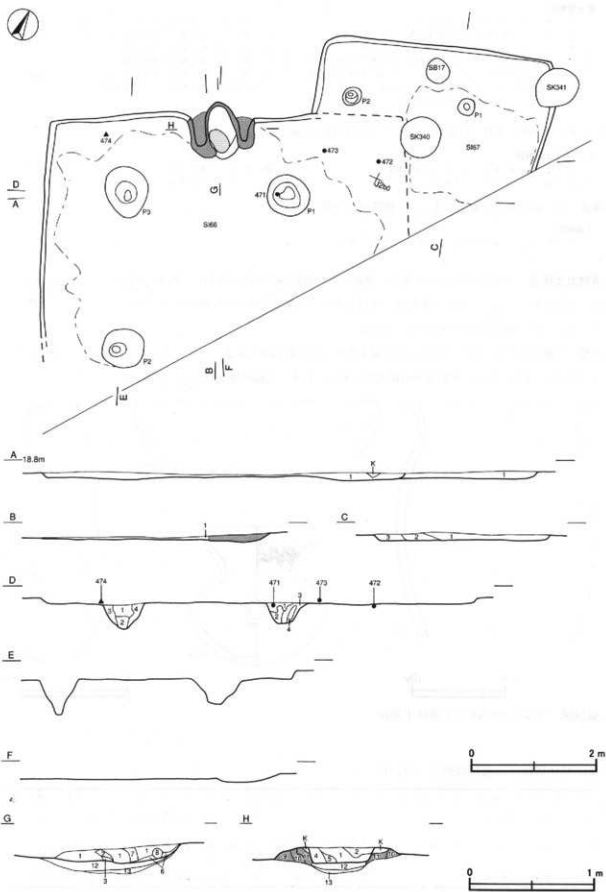
位置 調査I区西部のJ2 b9区に位置し、第3号堀から約70m西の低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第67号住居跡を掘り込み、第340号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸が5.90mほどで、南北軸は、南部が攪乱のため4.10mだけが確認され、方形または長方形と推定される。軸方向はN-23°-W、壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前から各コーナー部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央に付設されている。袖部が残存し、焚口から煙道部まで90cm、袖部最大幅100cmほどである。煙道部は壁外へ20cmほど掘り込まれ、緩やかに傾斜して立ち上がっている。第9～11層は袖部であり、平坦な地山の上に粘土と砂を積んで構築されている。第12・13層は火床部の埋土であり、赤変している。



第73图 第66·67号住居跡実測图



覆土層解説

- |          |                          |         |                       |
|----------|--------------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色    | 焼土粒子・炭化粒子中量              | 8 黒褐色   | 炭化粒子少量、焼土ブロック微量       |
| 2 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量      | 9 灰褐色   | 粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒色     | ローム粒子中量、焼土ブロック少量         | 10 暗灰色  | 粘土粒子・砂粒多量             |
| 4 暗褐色    | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量    | 11 灰褐色  | 粘土粒子・砂粒中量             |
| 5 暗褐色    | 焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 12 暗褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量   |
| 6 にぶい黄褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量           | 13 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量           |
| 7 褐色     | ローム粒子・焼土粒子中量             |         |                       |

ピット 3か所。主柱穴はP1～P3で、深さは33～54cmである。

P1・P3土層解説

- |       |                |       |         |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量      | 4 黒褐色 | ローム粒子微量 |

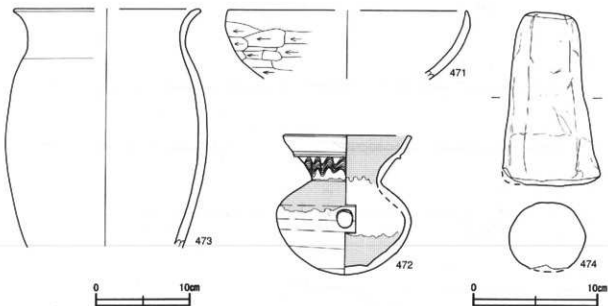
覆土 単一層であるが覆土が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片240点（坏類8、甕類232）、須恵器片10点（坏類6、甕1、甕類3）、土製品1点（支脚）が出土している。これらの遺物は、竈周辺を中心に覆土下層から床面にかけて出土している。出土状況から、471～473は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。また、主軸方向が居館の長軸方向と20°近くずれており、居館跡との関連性は考えられず、居館跡構築以前の住居跡と考えられる。



第74図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
471	土師器	坏	[19.0]	(5.4)	—	—	純土[7-0]A	橙	普通	口縁部内・外面及び体部内面横ナテ	P1内	10%
472	須恵器	甕	9.7	11.1	—	—	石英・パミス	黄灰、内・外面に深緑色の自然釉	良好	底部外面回転ヘラ削り	北東部床面	90% PL53
473	土師器	甕	[19.6]	(25.0)	—	—	長石・石英	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナテ、内・外面摩耗	北東部下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
474	支脚	13.7	(7.8)	—	(352)	土製	外面ナデ、筋中に雲母・パリス含む	北内堀掘下層	80% PL63

### 第67号住居跡 (第73区)

位置 調査Ⅰ区西部のJ2a0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第66号住居跡、第17号独立柱建物跡、第340・341号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は3.75mほどで、南北軸は南部が攪乱のため3.10mだけが確認され、方形または長方形と推定される。南北軸方向はN-18°-W、壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 2か所。主柱穴はP1・P2で、深さは15・24cmである。

覆土 3層からなるが覆土が薄く、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 褐色 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 3 褐色 色 ローム粒子中量  
2 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片56点(坏類21、甕類35)が出土している。これらの遺物は、すべて細片で図示できるものはない。

所見 本跡は、出土土器がすべて細片のため時期判断が困難であるが、4世紀以前の出土土器がなく、5世紀末葉から6世紀初頭の時期である第66号住居跡に掘り込まれていることから、時期は5世紀代と考えられる。

### 第91号住居跡 (第75区)

位置 調査Ⅱ区西部のE7a7区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.78m、短軸4.76mの方形であり、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は25~36cmで、各壁とも外傾して立ち上がる焼失家屋である。

床 ほぼ平坦で、礫を除き全体的によく踏み固められている。壁溝は検出されていない。

炉 2か所。炉1は、P1とP4を結ぶ線よりも北西壁寄りに付設されている。長径62cm、短径36cmの長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする小菱楕円形を呈し、深さ4cmである。炉2はP3とP4の間に付設されている。長径72cm、短径31cmの炉1同様、長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形を呈し、深さ4cmである。炉1・炉2ともに地床炉であり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。炉1は炉2に比べて、火熱を強く受けており、位置及び炉床の被熱の状況から、炉1が主炉と考えられる。

#### 炉土層解説 (炉1・2共通)

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量

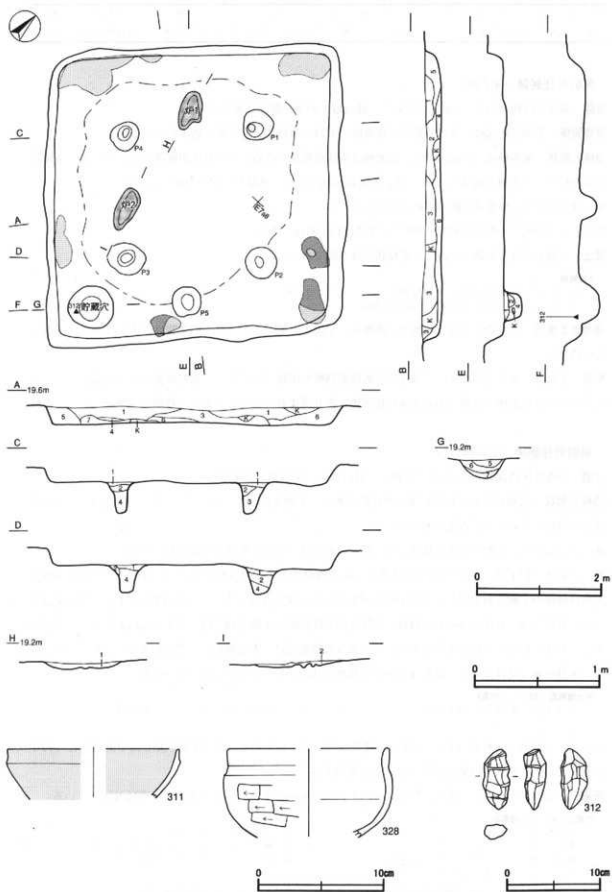
ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは42~52cmである。P5は深さ30cmで南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットに相当する。

貯蔵穴 南コーナー部に位置し、径70cmの円形、深さ40cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

#### 貯蔵穴・ピット土層解説

- 1 黒褐色 色 ローム粒子少量 5 暗褐色 色 ローム粒子中量  
2 褐色 色 ロームブロック少量 6 暗褐色 色 ローム粒子中量、炭化物少量  
3 暗褐色 色 ロームブロック・粘土粒子微量 7 暗褐色 色 ローム粒子・炭化物少量、焼土ブロック微量  
4 褐色 色 ローム粒子少量、粘土粒子微量

覆土 7層に分層される。堆積状況は、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第75图 第91号住居跡・出土遺物実測図

## 土層解説

1	黒褐色	焼土粒子微量	5	褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	6	褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック少量	7	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック・焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片31点（坏類24、甕類7）、不明土製品1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。第75図311は覆上下層、328は覆上層からそれぞれ出土している。また、312は南コーナー部の覆上下層から出土している。各コーナー部の床面からは、多量の炭化材及び焼土塊が検出されている。

所見 本跡は、炭化材及び焼土塊の検出状況から焼失家屋と考えられるが、本跡に伴う供膳具等が一切出土しておらず、住居廃絶に伴う意図的な焼失と推測される。これと同様な状況は、本跡の南30mに位置する第93号住居跡でもみられる。本跡は、出土遺物から5世紀後葉には廃絶されていたと推定される。

## 第91号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	出土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
311	土師器	坏	13.4	(5.9)	—	—	瓦石・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部内・外縁横ナデ	覆土中	5%
328	土師器	甕	12.6	(7.1)	—	—	赤母・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部内・外縁横ナデ 各部面ナデ	覆土中	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
312	不明土製品	6.4	2.9	1.6	31.5	土製	側面に明確な指原痕を有す	南部下層	

## 第92号住居跡（第76・77図）

位置 調査Ⅱ区西部のD8f1区に位置し、平坦な低台地上に立地している。

重複関係 北西部を第436号土坑、南東部を第25号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.00m、短軸6.92mの方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁高は40～48cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。断面J字状の壁溝が周回する。

炉 P1とP4を結ぶ線上に付設されている。長径72cm、短径60cmの、長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形である。床面を3cmほど削りくばめた地床床であり、炉床面は火熱を受け最大3cmほど赤変硬化し、凹凸が著しい。

## 炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴で、深さは75～86cmである。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、径100cmの円形、深さ52cmである。底面は平坦で、壁は外傾しており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。覆土下層から多量の焼土と炭化物が検出されている。

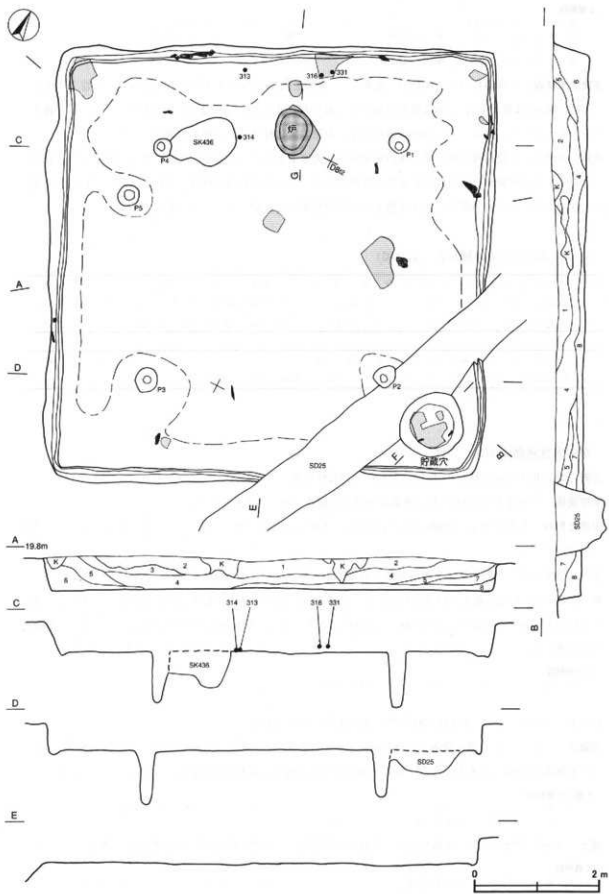
## 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量  
3 暗赤褐色 瓦土ブロック・炭化物多量、ロームブロック微量

覆土 8層に分層される。堆積状況は、全体的に周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

## 土層解説

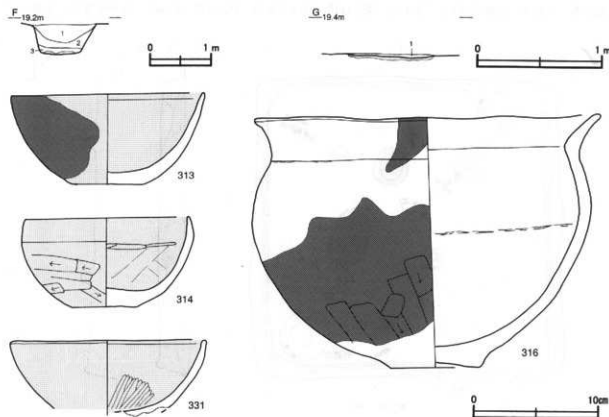
1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・小礫微量	7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4	暗褐色	炭化粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量



第76图 第92号住居跡実測图

**遺物出土状況** 土師器片73点(杯・椀類41点, 高杯14点, 甕18点)が出土している。細片はほぼ全域から散在した状態で出土しているが, 図示できた遺物はすべて北西壁寄りから出土している。第77図313は北西壁際, 314は炉とP4の間の, いずれも床面から正位の状態でも出土している。316, 331は北西壁際の床面直上から口縁部を南に向けた横位の状態でも出土している。各壁際の床面から焼土塊及び炭化材が検出されている。

**所見** 本跡は, 焼土塊や炭化材の検出状況から焼失住居と推測される。時期は出土土器から5世紀中葉と考えられ, 調査区内の5世紀代の住居跡の中で最大の規模である。



第77図 第92号住居跡・出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
313	土師器	椀	15.4	7.5	5.4	雲母	にぶい黄橙	普通	体部内・外面丁寧ナデ	北西部床面	95% PL52
314	土師器	椀	13.0	7.2	5.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面丁寧ナデ, 体部内面ナデ	北西部床面	90% PL52
316	土師器	甕	27.3	20.2	6.8	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	北部床面下層	95% PL52
331	土師器	高杯	15.7	(6.1)	—	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	環部外面丁寧ナデ	北部床面下層	45% PL52

### 第93号住居跡(第78・79図)

**位置** 調査Ⅱ区南西部のE7i0区に位置し, 低台地上の平坦部に立地している。

**規模と形状** 長軸4.92m, 短軸4.82mの方形であり, 主軸方向はN-36°-Wである。壁高は34~48cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められている。断面U字形の壁溝が周囲する。

**炉** 3か所。炉1はP1とP4を結ぶ線のやや内側に付設され, 径60cmほどの円形である。床面を5cmほど掘

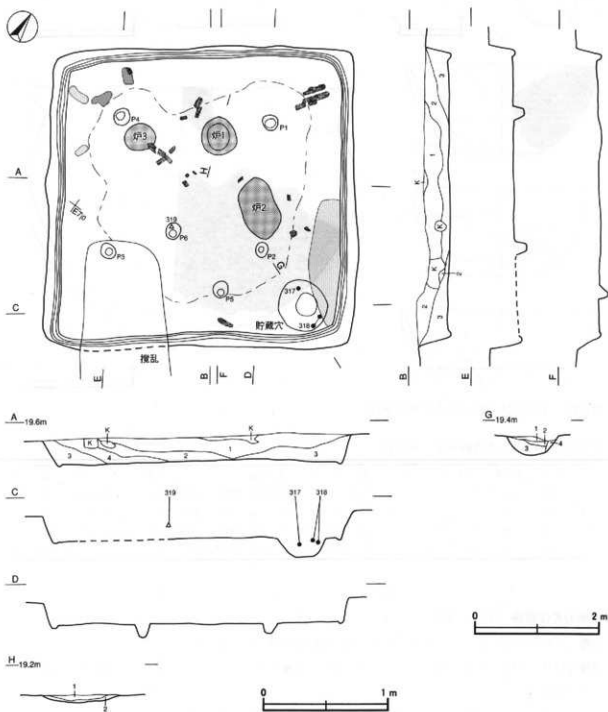
りくはめた地床があり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。炉2はP1とP2の間に付設されている。長径95cm、短径55cmの長径方向を主軸方向と同じくする不整楕円形である。炉3はP4の東側に付設され、径50cmほどの円形である。炉2・3ともに、炉床の上面は踏み固められ鈍い光沢があり、炉床の状況などから、炉1が住居廃絶時まで使用されていたと考えられる。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4で、深さは15～21cmである。P5は深さ15cmで、南東壁寄りの中央に位



第78図 第93号住居跡実測図

置しており、出入り口施設に伴うピットに相当する。P6の性格は不明である。

**貯蔵穴** 東コーナー部に位置し、径80cm程の円形、深さは33cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

**貯蔵穴土層解説**

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子微量       | 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量    |

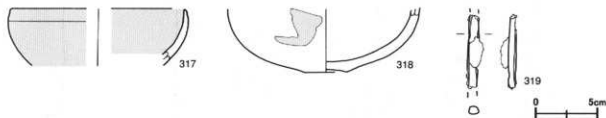
**覆土** 4層に分層される。堆積状況は、全体的に周囲からの土砂の流入を示しており、自然堆積である。

**土層解説**

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子微量         | 3 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子微量    |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片31点（坏・椀類18、甕類13）が全域から散在した状態で出土している。それらの大部分は細片で、本跡の廃絶後に混入したものと考えられる。第79図317・318は貯蔵穴内から出土している。319は中央部の覆土中層から出土している。また、床面からは焼土塊及び炭化材が検出されている。炭化材は、壁から中央部に向かって検出され、垂木材と考えられる。

**所見** 本跡は、炭化材及び焼土塊の検出状況から焼失住居と考えられるが、本跡に伴う食器具等が一切出土しておらず、住居廃絶に伴う意図的な焼失と推測される。本跡と同時期に存在したと考えられる第91号住居跡でも、これと同様な状況が見られることは興味深い。本跡は、出土遺物から5世紀後葉には廃絶されていたと推定される。



第79図 第93号住居跡出土遺物実測図

第93号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
317	土師器	坏	[13.8]	(4.5)	—	雲母・赤色 粒子	赤褐	普通	口縁部外面横ナデ、体部外面 ナデ、内面磨耗	貯蔵穴内	10%
318	土師器	埴	—	(5.1)	3.4	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ナデ、外面赤彩	貯蔵穴内	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
319	釘	(5.9)	(0.8)	(0.6)	(8.2)	鉄	断面方形	覆土中層	

第99号住居跡（第80・81図）

**位置** 調査Ⅱ区南西部のF8a7区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

**確認状況** 北西壁際を除いて床面直上まで削平された状態で検出された。

**規模と形状** 竈及び柱穴の位置と暗褐色をした床面の広がりから、長軸6.10m、短軸5.70mほどの長方形と推定される。主軸方向はN-52°-Wである。

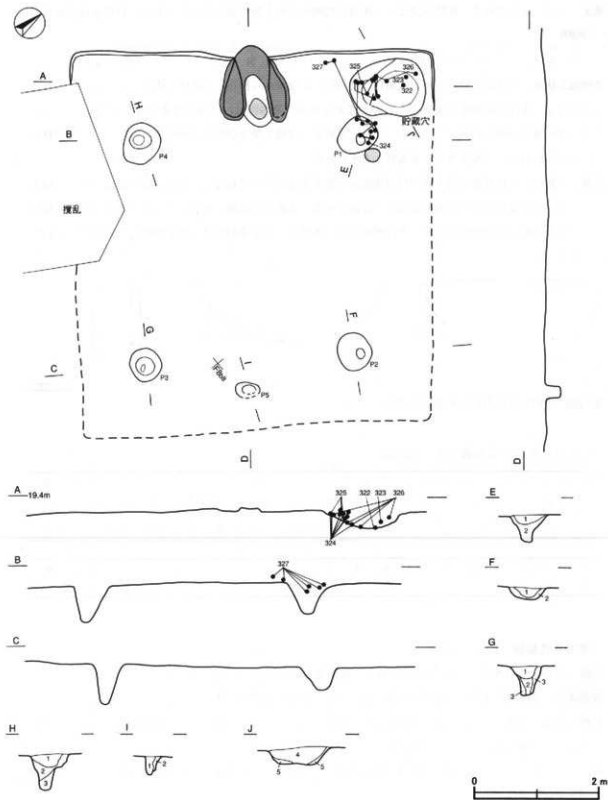
**床** ほは平坦である。硬化面及び壁溝は検出されていない。P1に隣接して、径20cmほどの円形に赤変硬化した部分が検出されている。

**竈** 北西壁の中央部に付設されている。両袖部の基部が残存し、規模は焚口部から煙道部まで130cm、袖部最

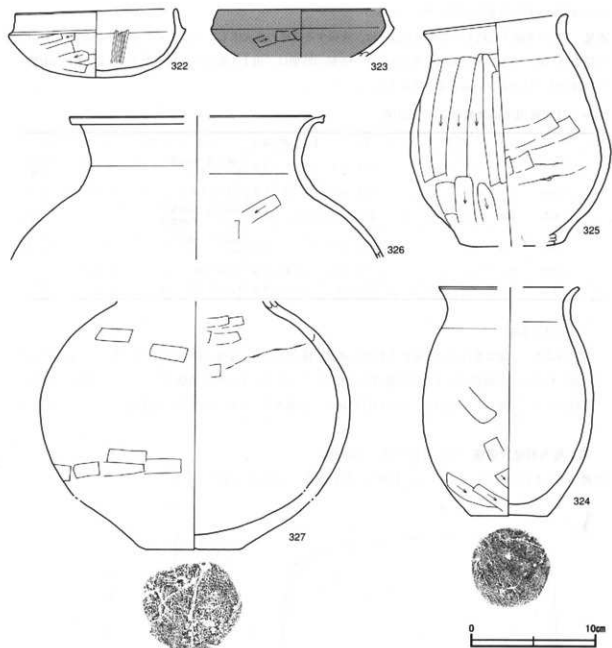


大幅110cm, 壁外への掘り込みは17cmである。軸基部は、床面と同じ高さに暗褐色土で構築されている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめて作られており、火床面は火熱を受け赤変している。火床部から煙道部にかけて、焼土粒子・炭化粒子を含むふい赤褐色土が堆積している。

ピット 5か所。P1～P4は支柱穴で、深さは35～65cmである。P5は出入り口施設に伴うピットで、深さ



第80図 第99号住居跡実測図



第81図 第99号住居跡出土遺物実測図

は35cmである。

**貯蔵穴** 北コーナー部に位置し、長軸120cm、短軸90cmの楕円形、深さ30cmである。底面は皿状で壁は外傾している。

**貯蔵穴・ピット土層解説**

- |       |                     |        |                      |
|-------|---------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量    | 5 暗褐色  | ローム粒子少量、炭化物微量        |
| 3 褐色  | ロームブロック少量           |        |                      |

**遺物出土状況** 土師器片281点（坏類10、甕類271）が、北コーナー付近から主に出土している。第81図322・323・325・326は貯蔵穴内から出土している。322は底面から逆位、323は覆土下層、325・326は覆土上層からそれぞれ出土している。また、324はP1の覆土上層及び貯蔵穴の覆土中層、327は北西壁際及びP1の覆土上層からそれぞれ出土している。図示した遺物は323を除きすべて破片の状態で狭い範囲から出土しており、住

居の埋没の過程で投棄されたと考えられる。

所見 P1に隣接する円形の赤変硬化部分は、重複する遺構の竈火床もしくは炉床の可能性があるので、周囲を精密したが、その痕跡は検出できなかった。本跡の時期は、出土土器から6世紀中葉と推定され、同時期の住居跡の中では調査区の中で最も北に位置する。

第99号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

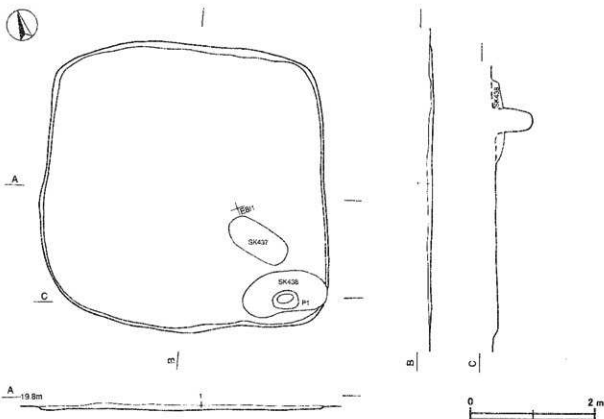
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	産地	手法の特徴	出土位置	備考
322	土師器	埴	12.8	5.4		雲母・長石	赤橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部外面ヘラ削り	貯蔵穴内	90% P1.52 二次焼成
323	土師器	埴	13.1	(3.1)		雲母・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、内面ナデ	貯蔵穴内	90% P1.52
324	土師器	小形甕	111.0	18.4	6.0	長石・石英	明赤橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部ヘラナデ、内面磨耗	P1内	70% P1.52 二次焼成
325	土師器	小形甕	11.3	18.5	6.1	雲母・長石	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部内面ヘラナデ	貯蔵穴内	70% P1.52 二次焼成
326	土師器	甕	20.2	(11.4)		雲母・長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部内面ヘラナデ	貯蔵穴内	20%
327	土師器	甕	19.9	7.4		雲母・赤鉄子	にぶい赤橙	普通	底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北部	20%

### ③ 方形竈穴遺構

今回の調査で、調査Ⅱ区から2基の方形竈穴遺構が確認された。当初、第94・95号住居跡として調査したが、炉や竈、柱穴などが検出されず、居住施設とは考えにくいので、方形竈穴遺構とした。以下、検出された遺構と遺物について記載する。なお、これらは住居跡として調査したため、調査時の遺構番号も併記しておく。

#### 第1号方形竈穴遺構 (第94号住居跡) (第82図)

位置 調査Ⅱ区南西部のE7e0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。



第82図 第1号方形竈穴遺構実測図

**重複関係** 南東コーナー付近を第437・438号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.62m、短軸4.57mの隅丸方形であり、主軸方向はN-67°-Wである。壁高は最大5cmである。

**床** ほぼ平坦である。床面を精査したが、硬化面及び壁溝は検出されなかった。

**ピット** 1か所。P1は南東コーナー部に位置し、長径40cm、短径23cmの楕円形、深さ43cmである。

**覆土** ロームブロックを少量含む暗褐色土の単一層である。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 土師器片8点(甕類)が出土している。土器片はいずれも細片で断面が摩滅しており、遺構の埋没時に混入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土土器から古墳時代と推定されるが、明確な時期は不明である。

### 第2号方形竪穴遺構(第95号住居跡)(第83図)

**位置** 調査Ⅱ区南東部のE7g0区に位置し、平坦な低台地上に立地している。

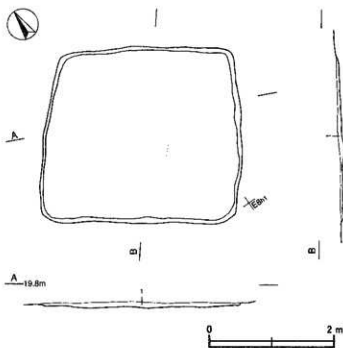
**規模と形状** 長軸3.15m、短軸2.75mの長方形であり、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は最大で4cmである。

**床** ほぼ平坦で、南に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で10cmである。床面を精査したが、硬化面及び壁溝は検出されなかった。

**覆土** ロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む暗褐色土の単一層である。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 土師器片54点(甕類)が、主に東コーナー付近から投棄されたような状況で出土している。

**所見** 時期を推定できる出土土器が少ないために、本跡の時期を推定することは困難であるが、本跡の南約3mに5世紀後半と考えられる第93号住居跡が位置することや体部が球形形状を呈する土師器甕が出土していることから、本跡の時期は5世紀後半と推定される。



第83図 第2号方形竪穴遺構実測図

## 2 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡70軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第22号住居跡（第84図）

位置 調査I区北西部のI 2 h 5区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第271号土坑を掘り込み、第23A・23B号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸（東西軸）は、第23A・23B号住居跡に掘り込まれているため推定3.80m、短軸3.70mで平面形は方形と推定され、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は5~12cmで、壁の立ち上がり具合は判然としない。

床 中央部の南側がややくぼんでいるほかはほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

竈 北壁のやや西寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道先端まで145cm、袖部幅110cm、壁外への掘り込みは25cmほどである。覆土の堆積状況から、天井部は崩落していると考えられ、竈土層断面図の第3・9層がその一部に相当する。袖部は、地山を山形に掘り残した基部の上に、灰白色の粘土を芯材にして砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの内側に位置し、赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。なお、火床の第17層中から土師器甕の体部片が出土していることから、竈の作り替え若しくは火床の再構築が想定される。

#### 竈土層解説

1 暗 褐色	焼土粒子・砂粒微量	10 暗 赤 褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2 濃い赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	11 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
3 暗 灰 色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量	12 黒 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量
4 暗 褐色	砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13 暗 灰 色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック微量
5 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	14 暗 赤 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化物
6 黒 褐色	粘土粒子・砂粒・焼土ブロック少量	15 黒 褐色	砂粒中量、焼土ブロック・炭化物微量
7 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	16 灰 褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
8 灰 褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック少量	17 暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量
9 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量		

ピット 4か所。P1~P3は主柱穴で、深さ30~40cmほどである。北東コーナー部に想定される主柱穴は、第23A・23B号住居跡に掘り込まれているため検出されていない。P4は深さ20cmで南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

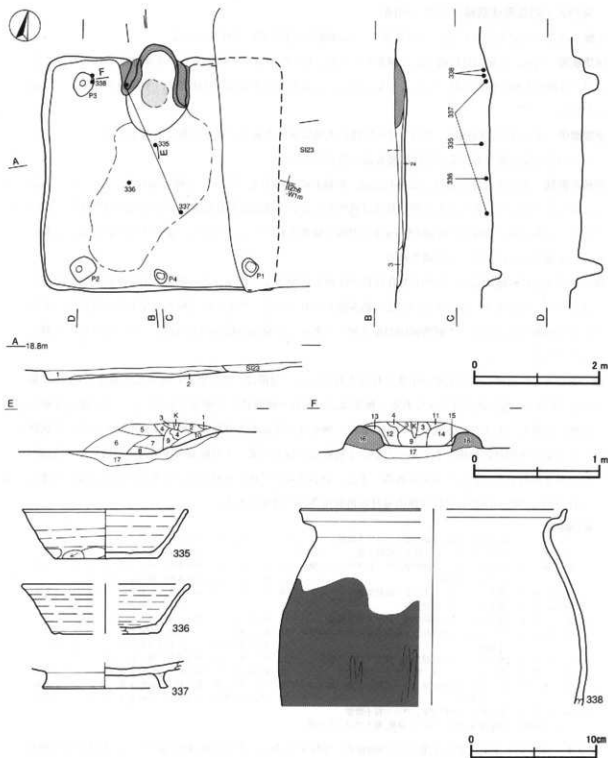
覆土 3層に分層される。層厚が最大で20cmほどと薄いため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

1 暗 褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子微量	2 濃い赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量
3 暗 褐色	ローム粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師器片159点（坏類17、甕類142）、須恵器片21点（坏類11、甕2、瓶類1、甕類7）が、主に中央部の床面付近及び竈の覆土中から出土しており、特に土師器甕類の大半は竈の覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第84図 第22号住居跡・出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
335	須恵器	坏	13.2	4.0	8.0	雲母・長石	褐灰	普通	底部多方向のヘラ削り	中央部床面上	70% PL53
336	須恵器	坏	[13.2]	4.0	[8.2]	長石	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	中央部床面	40%
337	須恵器	盤	—	(2.1)	9.8	雲母・長石・石英	にぶい黄緑	不良	底部回転ヘラ削り後、高台盛り付け	北部・中央部	30%
338	土師器	甕	[21.0]	(15.7)	—	長石・石英	明褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	北壁際	20% 埋付着

## 第23A・23B号住居跡（第85・86図）

**位置** 調査Ⅰ区北東部のⅠ2g5区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

**確認状況** 当初、1軒の住居跡として調査をしたが、柱の圧痕が2か所あるピットが検出されていることや、新II2時期の床面が検出されていることなどから、上部のものを第23A号住居跡、下部のものを第23B号住居跡とした。

**重複関係** 第23A号住居跡は、第23B号住居跡の上部に貼床を施し、壁を拡張して構築されている。また、第23A・23B号住居跡ともに第22号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 第23A号住居跡は、長軸4.75m、短軸4.65mの方形であり、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は最大8cmほどで、壁の立ち上がり具合は判然としない。第23B号住居跡については、壁が残存しないため不明な点が多いが、東壁側の壁溝が50cmほど内側で検出されていることから、第23A号住居跡よりも多少小規模で、主軸方向はほぼ同一と推測される。

**床** 第23A号住居跡の床は、第23B号住居跡の床面上に厚さ5～10cmほどの貼床（土層断面図第6層）を施して構築され、ほぼ平坦で壁際を除いてよく踏み固められている。壁下には、断面J字形の壁溝が周回する。第23B号住居跡の床も貼床（土層断面図の第7層）であり、中央部が踏み固められている。壁溝は、東側のみ検出されている。

**竈** 第23A号住居跡の竈は北壁の中央に付設されている。規模は、焚1部から煙道先端まで130cm、袖部幅100cm、壁外への掘り込みは55cmである。袖部は、灰褐色の砂質粘土で構築されている。火床部は北壁ラインの内側に位置し、わずかに赤変している。また、煙道は火床部から外傾して立ち上がる。第23B号住居跡の竈は、その痕跡を明確に検出できなかったが、土層断面の観察結果（土層断面図中第21～23層）からほぼ同位置で作り替えが行われていると考えられる。また、第23A号住居跡の袖材の中には焼土が比較的多く含まれており、作り替えの際、第23B号住居跡の袖材が再利用された可能性がある。

### 竈土層解説

1 黒 褐色	粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	13 黒 褐色	砂粒中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	14 灰 褐色	砂粒多量、焼土ブロック・粘土ブロック少量
3 暗 褐色	粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	15 灰 赤色	砂粒多量、粘土粒子中量
4 極 暗 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	16 褐 灰色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量
5 極 暗 褐色	焼土ブロック・砂粒少量	17 極 暗 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
6 暗 赤褐色	焼土ブロック・砂粒少量、ローム粒子微量	18 暗 褐色	ローム粒子中量
7 暗 赤褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	19 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
8 暗 赤褐色	粘土ブロック・砂粒少量、焼土ブロック微量	20 灰 褐色	砂粒多量、焼土粒子中量
9 暗 赤褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量	21 暗 赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量
10 灰 褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量	22 灰 赤色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック中量
11 極 暗 褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	23 に近い赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量
12 に近い黄褐色	砂粒多量、焼土ブロック中量、粘土ブロック少量		

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ55～60cmで、主柱穴である。P5は深さ20cmほどで、南壁寄りの中央に位置しており、出入口施設に伴うピットである。なお、前述したようにP1・P2・P4・P5からは、柱の圧痕が2か所ずつ検出されており、P1・P2・P4については、それぞれ内側のものが第23B号住居跡に作るものである。

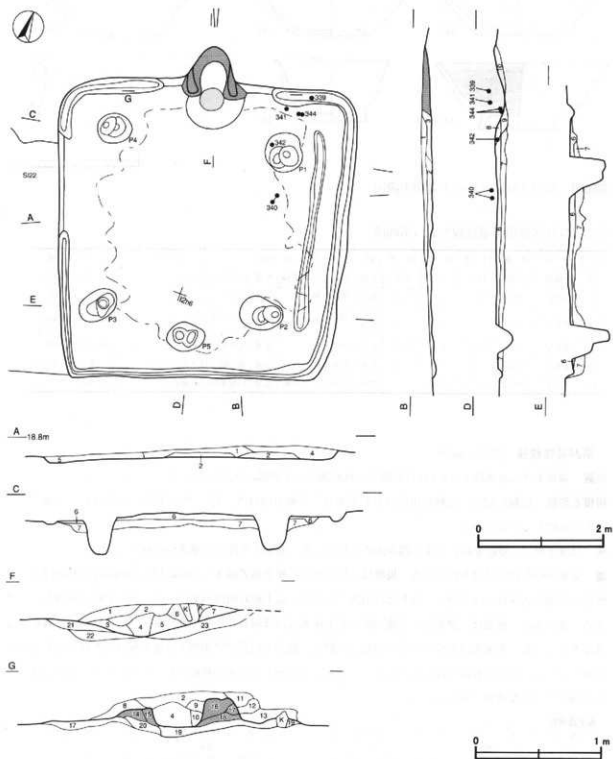
**覆土** 5層に分層される。堆積状況は、層厚が最大で20cmと薄いため判断が難しいが、ブロック状に堆積する層があることから、人為堆積の可能性が高い。なお、第23B号住居跡の覆土は存在しない。

### 土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック	2 暗 褐色	焼土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量
--------	--------------------------	--------	--------------------------------

- |   |        |                                   |    |               |                       |
|---|--------|-----------------------------------|----|---------------|-----------------------|
| 3 | にぶい黄褐色 | 粘土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6  | 暗褐色           | ロームブロック中量 (SI23 A 貼床) |
| 4 | 暗褐色    | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量        | 7  | 褐色            | ロームブロック中量 (SI23 B 貼床) |
| 5 | 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量          | 8  | 葦土層断面図第21層と同一 |                       |
|   |        |                                   | 9  | 葦土層断面図第22層と同一 |                       |
|   |        |                                   | 10 | 葦土層断面図第23層と同一 |                       |

遺物出土状況 第23A号住居跡からは、土師器片215点(坏類25, 壳類190), 須恵器片73点(坏類33, 壳類35, 版類1, 蓋4)が、北東部を中心に廃棄されたような状態で出土しており、図示した遺物もすべて北東部から

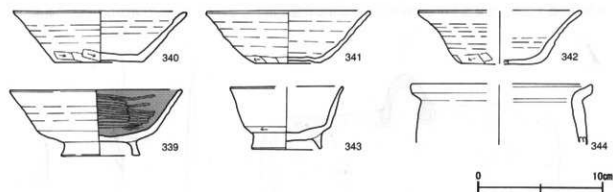


第85図 第23A・23B号住居跡実測図



出土している。第86図343は、P1の覆土中の破片が接合した資料であり、344は貼床中からの出土である。第23B号住居跡からは、土師器片35点（坏類3、甕類32）、須恵器片10点（坏類6、甕類4）が、貼床中及び竈の掘り方の埋土中から出土しているが、細片のため図示できるものはない。

所見 第23A号住居跡の時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。なお第23B号住居跡の時期は、第23A号住居跡に建て替えられていることからそれ以前と推定される。



第86図 第23A号住居跡出土遺物実測図

第23A号住居跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
339	土師器	高台付坏	13.6	5.3	6.1	雲母・長石	にぶい黄褐色	普通	高台貼り付け後、ナデ	北東部上層	70% PL53
340	須恵器	坏	14.0	5.2	6.3	粗い長石多量	褐色	不良	底部貼付ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	北東部上層	60% PL53
341	須恵器	坏	13.0	4.2	5.4	雲母・長石・石英	灰	普通	底部下縁縁なし手前ヘラ削り 底部面貼付ヘラ削り後、縦一方向のヘラ削り	北東部上層	40%
342	須恵器	坏	[12.8]	4.3	[6.2]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部貼付ヘラ削り後、一方向のヘラ削り	北東部下層	40%
343	須恵器	高台付坏	[ 8.8]	5.0	5.4	長石・石英	灰	普通	高台貼り付け後、ナデ	P1覆土中	70% PL53
344	土師器	小形甕	[14.5]	(4.8)	—	雲母・長石	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	北東部貼床中	15%

### 第24号住居跡（第87・88図）

位置 調査1区の北西部12h9区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.12m、短軸4.10mの方形であり、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は15~22cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。北壁下を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部先端まで100cmほど、袖部幅は140cmほどで、壁外への掘り込みは14cmと短い。天井部は崩落しており、竈土層断面図の第4・9・10・13層が崩落した天井部の一部である。袖部は、黒褐色土で竈の掘り方を床面とほぼ同じ高さまで埋め戻し、その上部に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの内側に位置し、袖部と同様に黒褐色土で竈の掘り方を埋め戻した面を使用している。赤変硬化部分は認められなかったが、火床面からは灰が検出されている。また、煙道は火床部から外傾して急な角度で立ち上がる。

#### 竈土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
2	灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック微量	4	暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量
			5	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量

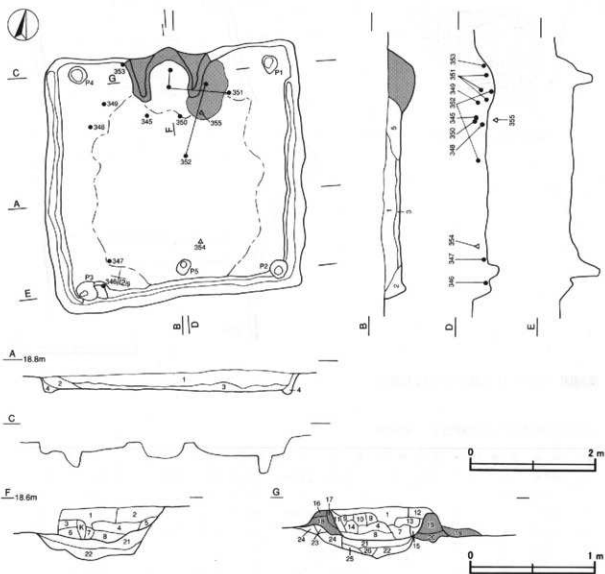
- |         |                            |         |                            |
|---------|----------------------------|---------|----------------------------|
| 6 暗赤褐色  | 焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量   | 15 褐色   | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 7 灰褐色   | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 16 灰褐色  | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量          |
| 8 暗褐色   | 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量 | 17 灰赤色  | 砂粒中量                       |
| 9 褐灰色   | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック微量         | 18 陶灰色  | 砂粒中量                       |
| 10 灰褐色  | 粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量         | 19 褐色   | 粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子少量           |
| 11 赤褐色  | 焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒中量         | 20 褐灰色  | 粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック少量        |
| 12 褐灰色  | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量         | 21 灰赤色  | 粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・灰少量       |
| 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒少量         | 22 暗赤灰色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒・灰少量         |
| 14 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量   | 23 褐色   | ローム粒子・砂粒少量                 |
|         |                            | 24 黒褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量             |
|         |                            | 25 暗褐色  | ローム粒子少量                    |
|         |                            | 26 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量          |

ピット 5か所。P1～P4は支柱穴で、各コーナー際に位置し、深さは30～45cmである。P5は深さ18cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

覆土 5層に分層される。堆積状況は、全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈した自然堆積である。

土層解説

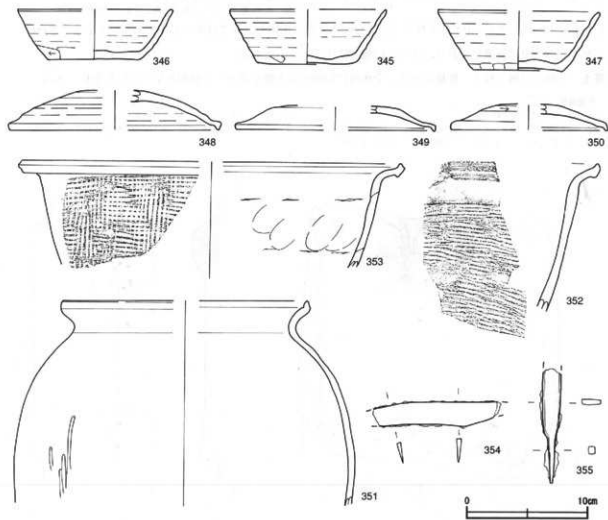
- |       |                     |       |                  |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量              | 4 褐色  | ロームブロック中量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量           | 5 暗褐色 | 砂粒少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |       |                  |



第87図 第24号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片244点(坏類10, 甕類234), 須恵器片96点(坏類73, 甕・鉢類17, 蓋6), 鉄器・鉄製品2点(刀子, 不明鉄製品)が出土しており, 土器の底部片などから推定される個体数は, 土師器甕5点, 須恵器坏4点, 須恵器甕2点, 須恵器鉢2点, 須恵器蓋6点である。細片は全域から散在した状態で出土しているが, 比較的大形の破片は, 覆土土層断面図の第1層の下層に含まれている。図示した遺物は, 残存率が低く, また出土位置から見ても, 本跡廃絶後の早い段階で投棄された可能性が高い。

所見 本跡は, 出土土器とその出土状況から9世紀前葉には廃絶されていたと考えられる。



第88図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
345	須恵器	坏	[12.7]	4.6	[8.2]	雲母・赤色粒子	明赤褐	不良	底部回転ヘラ削り後, 多方向のヘラ削り	甕前上層	60%
346	須恵器	坏	[12.6]	4.1	7.2	長石・石英	濁灰	普通	底部多方向のヘラ削り	南西部下層	40%
347	須恵器	坏	[13.2]	4.9	[7.2]	長石・石英	灰黄褐	普通	底部一方向のヘラ削り	南西部中層	30%
348	須恵器	蓋	[17.2]	(3.3)	—	雲母・長石	濁灰	普通	天井部回転ヘラ削り	北西部中層	40%
349	須恵器	蓋	[16.2]	(2.0)	—	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	北西部上層	35%
350	須恵器	蓋	[12.0]	(2.1)	—	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	甕前上層	25%
351	土師器	甕	[20.0]	(16.8)	—	雲母・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナテ	北東部下層	20%

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色	滑	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
352	須恵器	鉢	(12.2)	—	—	赤褐色石灰	褐色	普通	普通	口縁部内・外面コクロナデ 内面ナデ	竈前下層	5%
353	須恵器	鉢	[31.2]	(8.6)	—	赤褐色石灰	褐色	普通	普通	口縁部内・外面コクロナデ 内面微細押土後、ナデ	北壁際中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	産	出土位置	備考
354	兼	(10.5)	2.1	0.4	(24.0)	灰	切刃にかけて押曲	—	南壁寄り上層	PL67
355	不明	(9.4)	(1.6)	0.5	(19.8)	灰	腹面欠損	—	竈掘り方内	PL67

## 第25号住居跡（第89回）

位置 調査Ⅰ区の北西部12g0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.11m、短軸3.77mの長方形であり、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は10～20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平直で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は、北壁を除いて部分的に検出されている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部先端まで80cm、袖部幅は75cmで、壁外への掘り込みは認められない。袖部は、暗褐色土で竈の掘り方を床面とほぼ同じ高さまで埋め戻し、その上部に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの内側に位置し、袖部と同様に竈の掘り方を暗褐色土で埋め戻した面を使用しており、赤変部分がわずかに認められる。火床部の奥には土製支脚が据えられ、上部には土師器小形甕が逆位で被せられている。また、煙道は火床部から急な角度で立ち上がる。

### 竈土層解説

- |       |                            |        |                              |
|-------|----------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量   | 7 暗褐色  | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子・砂粒微量     |
| 3 褐色  | ローム粒子中量                    | 9 暗褐色  | 焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量     |
| 4 褐色  | ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量   | 10 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量           |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量   | 11 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量     |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 |        |                              |

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴で、深さは22～40cmである。P5は深さ40cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

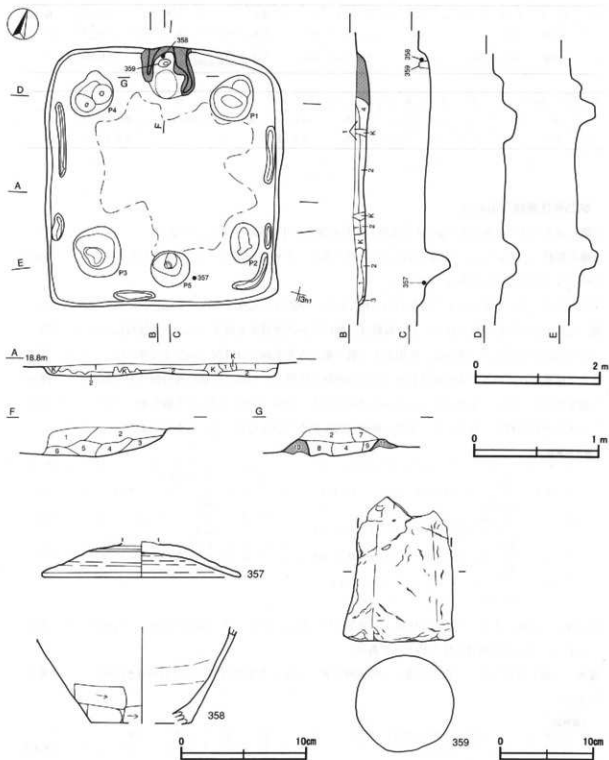
覆土 4層に分層される。覆土が薄いため判断が難しいが、上層断面図の第2層の様相から、人為堆積の可能性が高い。

### 土層解説

- |       |                   |       |                       |
|-------|-------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量             |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量         | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片143点（坏類8、変類135）、須恵器片68点（坏類37、甕類27、蓋4）、土製品1点（支脚）が出土している。遺物の大半は、住居跡の東側の覆土中と竈覆土中から出土している。とくに竈覆土中からは土師器甕類の破片が多く出土している。第89回357は南東コーナー付近の床面から出土している。358は前述した支脚転用の小形甕で、359の上に被せられていたものである。これは二次焼成を受けており、土製支脚と一体で使用されたと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第89図 第25号住居跡・出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (第89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
357	須恵器	蓋	15.5	(2.8)	—	雲母・長石	黄灰	普通	天井部回転へつ削り	南東部床面	65% PL53
358	土師器	小形甕	—	(7.7)	[7.9]	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面下端へつ削り、内面ナデ	竈内	30% 二次焼成

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
359	支脚	(15.5)	13.2	(10.1)	(1590)	土製	裾広がり、断面は円形	竈内	

### 第26号住居跡（第90図）

**位置** 調査I区の北西部I3e4区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

**重複関係** 中央部を第262号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.75m、短軸2.56mの方形であり、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は7cmで、立ち上がり具合は判然としなない。

**床** ほほ平坦で、全体的に軟質で硬化面は見られない。また、壁溝は検出されていない。

**竈** 北壁の東寄りに付設されている。袖部は遺存せず、煙道部の掘り込みが確認できるだけである。火床面の赤変部分は認められない。

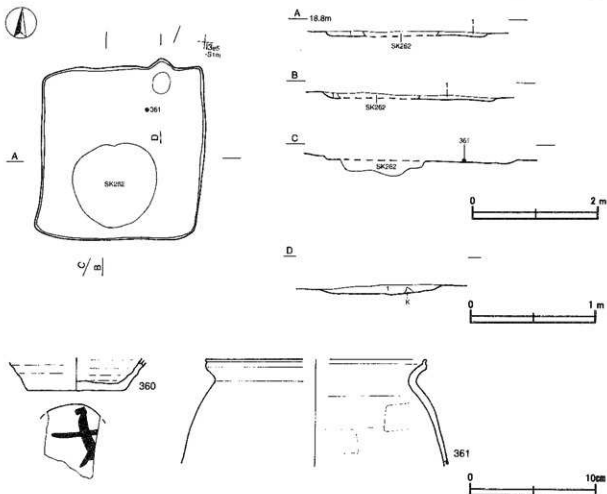
#### 竈土層解説

1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

**ピット** 床面を精査したが、検出されていない。

**覆土** ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土の単一層である。層厚が最大で10cmほどと薄いため、堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 土師器片68点（坏類6，甕類62），須恵器片9点（坏類3，甕類3，蓋3）が出土している。



第90図 第26号住居跡・出土遺物実測図

出土した遺物の大半は細片で、図示できたものは2点である。第90図361は竈前の床面直上から出土し、二次焼成を受けて体部外面に焼土が付着している。360は覆土中から出土したもので、底部外面に曇書が認められる。なお土師器坏の破片は、すべて古墳時代の所産と考えられるもので、本跡に伴うものは出土していない。所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表(第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
360	須恵器	坏		(2.7)	[7.8]	雲母・長石	灰黄	普通	磨耗のため体部下端の調整不明。底部回転へり切り後、一方向のへり開り	覆土中	20% PL53 底部外面曇書 □
361	土師器	婁	[17.4]	(8.7)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内外面縁ナシ、体部内面へりナシ	竈前床面直上	3% 二次焼成

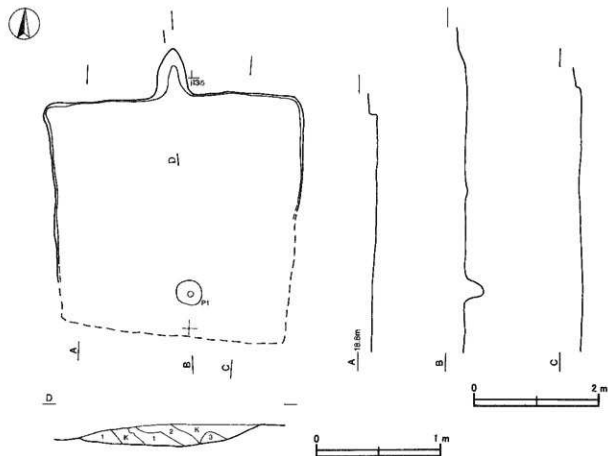
第27号住居跡(第91・92図)

位置 調査I区の北西部I3I4区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

確認状況 北壁際を除いて床面まで削平された状態で検出された。また、耕作によるトレンチャーの擾乱が著しい。

規模と形状 竈の位置及びピットと暗褐色をした床面の広がりから、長軸4.10m、短軸4.00mの方形で、主軸方向は $N-0^\circ$ と推定される。壁高は最大で10cmである。

床 遺存する床は平坦である。また、壁溝は検出されていない。



第91図 第27号住居跡実測図

竈 北壁の中央に付設されている。火床部及び煙道部が遺存し、火床面は地山面をそのまま使用したと考えられるが、赤変部分は認められない。煙道部の壁外への掘り込みは、壁の遺存状況が悪いにもかかわらず、75cmと長く、緩やかに立ち上がる。

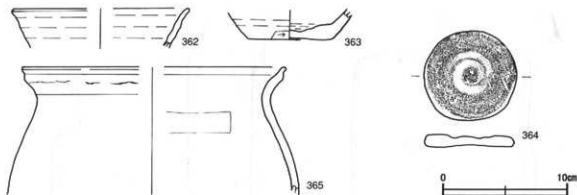
**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化  
 2 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量  
 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・砂粒微量

ピット 1か所。P1は深さ30cmで、推定される南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

遺物出土状況 土師器片55点（坏類28、甕類27）、須恵器片9点（坏類8、甕類1）が出土しており、大半が竈覆土中からの出土である。第92図362・364・365はいずれも竈覆土中、363は北壁際の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第92図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
362	須恵器	坏	[14.0]	(3.2)	—	長石・石英	灰褐色	普通	口縁部、体部内・外縁ロクロナテ	竈覆土中	5%
363	須恵器	坏	—	(2.5)	6.5	雲母	明黄褐色	普通	底部切欠ヘラ寄り孔、多方向のヘラ削り	北部覆土中	40%
365	土師器	甕	[21.0]	(10.2)	—	雲母・長石	明赤褐色	普通	口縁部内・外縁ヘラナテ、体部内面ヘラナテ	竈覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
364	円盤	7.3	1.0	51.9	土製	須恵器坏の底部を転用、側面研削	竈覆土中	

**第28号住居跡（第93図）**

位置 調査1区の北部1310区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.94m、短軸2.81mの方形であり、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

竈 北壁の中央に付設されている。遺存状況が悪く、確認できたのは煙道部の掘り込みだけである。煙道部の壁外への掘り込みは7cmほどで、煙道は急な角度で立ち上がる。火床部の赤変部分は認められない。

**竈土層解説**

- 1 暗赤褐色 砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化  
 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量  
 粘土粒子・砂粒微量



3 褐色 ロームブロック少量

4 褐色 焼上粒・炭化粒・砂粒混在

ピット 2か所。P1は深さ22cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P2は不明である。

覆土 4層に分離される。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解明

1 暗褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子散在

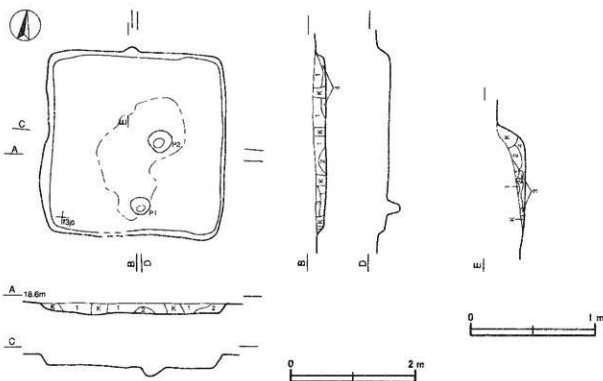
2 褐色 ロームブロック中量

4 暗赤褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片25点(環頸2, 甕頸23), 須恵器片6点(環頸1, 甕頸1, 蓋4)が出土している。

出土した遺物はすべて細片であり、図示できるものはない。

所見 時期を推定できる出土遺物がないために、本跡の時期を明確にはし得ないが、本跡の東1mに本跡と主軸方向をほぼ同一にする第29号住居跡が位置していることや、一辺が3m未満の小形の住居跡であることなどから本跡の時期は9世紀代と考えられる。



第93図 第28号住居跡実測図

第29号住居跡 (第94・95図)

位置 調査I区の北部I411区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 北部を第263号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.30m, 短軸4.00mの方形であり、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は18cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 中央部が若干くぼんでいるが、その他はほぼ平坦であり、P1から電前にかけて踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

竈 北壁の中央部に付設されているが、遺存状況は悪い。確認できた部分の袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの内側に位置し、亦変している。煙道部の壁外への掘り

込みは7cmほどで、急な角度で立ち上がる。

**覆土層解説**

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量      3 赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量  
 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量

ピット 1か所。P1は深さ15cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

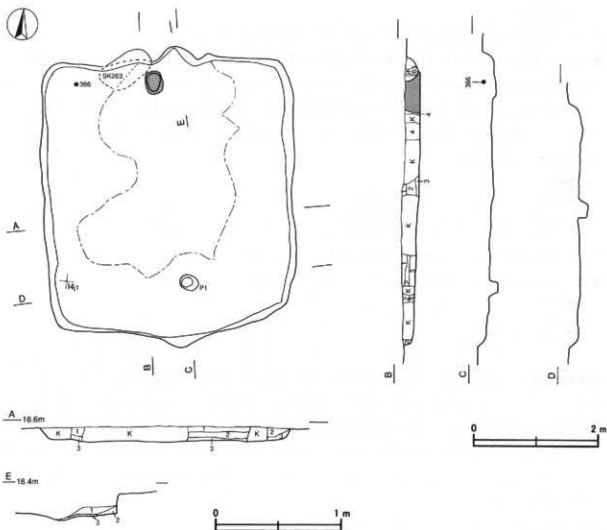
覆土 4層に分層される。攪乱を受けている部分が多く判断が困難であるが、全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量      4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量  
 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量  
 3 暗褐色 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片195点(坏類22, 甕類173), 須恵器片62点(坏類43, 甕類15, 蓋4)が出土している。遺物は大半が細片で、破断面が摩耗している。これらは全域から散在した状態で出土しており、本跡廃絶後の埋没の過程で流入したと考えられる。第95図366は北西コーナー部の覆土上層, 367は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土土器及びその出土状況から9世紀中葉には廃絶されていたと考えられる。



第94図 第29号住居跡実測図



第95図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表 (第95図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
366	須恵型	坏	[13.4]	4.2	6.2	赤褐色石灰	灰	普通	瓦器細土へり取り後、一方向のへり取り	北西部上層	50%
367	須恵器	盤	[13.0]	8.0		玄母・石灰	灰	普通	高台貼り付け後、ロクロナダ	覆土中	20%

### 第31号住居跡 (第96図)

位置 調査1区の北部13e0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第3・5・11号竪立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.70m、短軸3.40mの方形であり、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は9~15cmで外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

竈 北壁の西寄りにつ設されており、重複のため袖部の遺存状況は悪い。規模は、焚口部から煙道部先端まで80cm、袖部幅85cm、壁外への掘り込みは30cmほどである。天井部は崩落しており、竈上層断面図の第2・3層がその一部である。袖部は、地山をわずかに山形に掘り残した上部に砂質粘土で構築されている。火床部は、北壁ラインの内側に床面を掘りくぼめて作られており、火床面は火熱を受け変色している。また、煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |         |                    |        |                            |
|---------|--------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色  | ロームブロック・焼土ブロック微量   | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量         |
| 2 暗赤褐色  | 焼土粒子・粘土ブロック・砂粒微量   | 6 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土ブロック微量         |
| 3 不灰赤褐色 | 焼土粒子・粘土ブロック少量、砂粒微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色  | 焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |        |                            |

ピット P1は深さ16cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

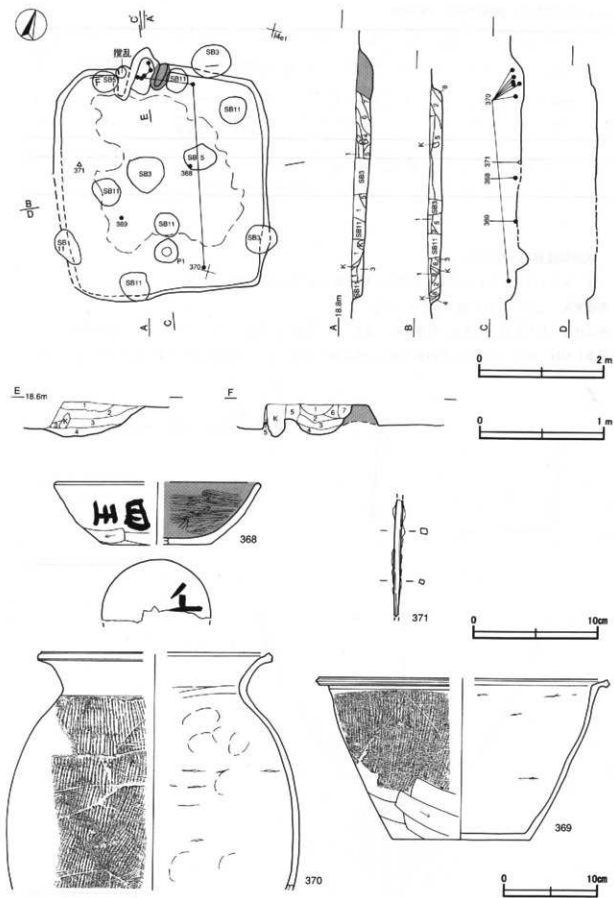
覆土 8層に分層される。堆積状況は、ブロック状の堆積状況を呈した人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                       |        |                       |
|-------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色  | ロームブロック中量、粘土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物微量                 | 6 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子微量          |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量               | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量        | 8 暗褐色  | ロームブロック微量             |

遺物出土状況 土師器片141点(坏類20, 壳類121), 須恵器片65点(坏類3, 壳類61, 盤1), 鉄器1点(鏝)が出土しており、土師の底部片などから推定される個体数は、土師器坏2点, 土師器甕2点, 須恵器坏3点, 須恵器甕3点, 須恵器鉢1点である。第96図368は中央部の床面直上から出土し、体部外面に横溝で「四王××□」, 底部外面に判読不明の墨書が認められる。369は南西部の覆土下層から、体部が外側に開く破れ方をした状態で出土している。370は竈天井部の崩落土中から出土しており、本跡地絶後の埋め戻しの段階で放棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、出土土器から9世紀後半には廃絶されていたと考えられる。



第96图 第31号住居跡・出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
368	土師器	坏	[16.0]	5.0	[ 8.6]	雲母・長石・石英	にぶい地	普通	底部回転ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	中央部床面直上	6% 赤黒外研・ 灰部赤黒 (灰土× ×) □ □ PL53
369	須恵器	鉢	[30.3]	17.0	14.5	雲母・長石・石英	灰	普通	口縁部内・外面ロクロナデ、内面ナデ	南西部下層	65% PL54
370	須恵器	壺	[23.8]	(25.0)	—	雲母・長石	橙	不良	口縁部内・外面ロクロナデ、内面ナデ、指頭痕	藏覆土中	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
371	鏝	(9.3)	0.5	0.5	(8.4)	鉄	某部木質付着、鎌身部欠損	西部下層	PL67

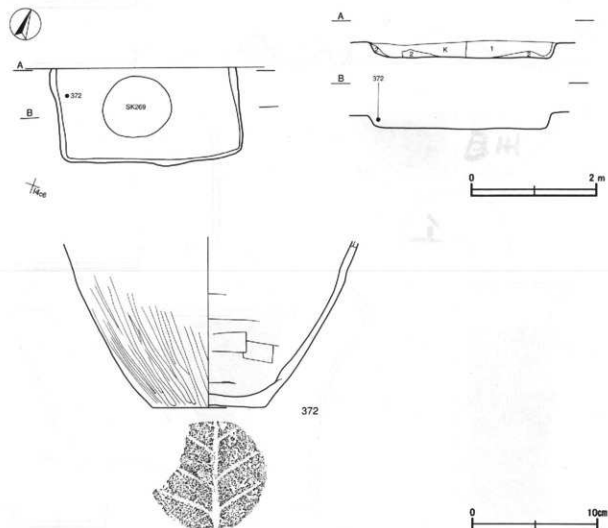
第32号住居跡 (第97図)

位置 調査I区北部のI4b6区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第269号土坑に掘り込まれている。

確認状況 北部が調査区域外に位置する。調査できた範囲は、耕作によるトレンチャーの攪乱が著しい。

規模と形状 確認されたのは東西軸2.90m、南北軸1.50mであり、平面形は方形または長方形と推定され、主



第97図 第32号住居跡・出土遺物実測図

軸方向はN-21°-Wである。壁高は22~27cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟質で硬化面は見られない。また、壁溝は検出されていない。

覆土 2層に分層される。暗褐色土を主体とする人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片56点(壺類)、須恵器片4点(坏類1、甕類3)が調査範囲内から散在した状態で出土している。第97図372は西壁際の覆土下層から出土している。なお、細片のため図示できなかった出土遺物の中には、横位の平行叩きが外面に施された須恵器壺の体部片が含まれている。

所見 本跡は北部が調査区域外に位置するため、竈の有無を確認することができなかった。また、調査した範囲内では硬化面及び柱穴が検出されておらず、住居以外の遺構の可能性も考えられる。本跡から出土している土器片は細片が多く、しかも本跡に確実に帰属するといえるものはない。そのため時期を判断することは難しいが、出土土器がおおよそ8世紀から9世紀代のものと考えられるため、その時期と推定される。

第32号住居跡出土遺物観察表(第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
372	土師器	壺	—	(13.2)	9.0	石灰・赤色胎土	にがい程	貫通	体部内面へツナデ、底部木炭灰	西壁際下層	40%

第33号住居跡(第98図)

位置 調査I区北部のI4a8区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

確認状況 北部が調査区域外に位置し、調査できた範囲は耕作によるトレンチャーの擾乱が著しい。

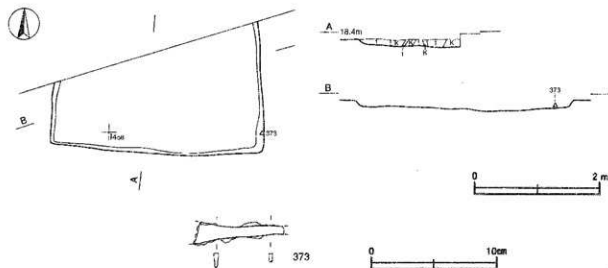
規模と形状 確認されたのは東西軸3.40m、南北軸2.10mであり、平面形は方形または長方形と推定される。

軸方向はN-0°である。壁高は10cmで、立ち上がり具合は判然としらない。

床 ほぼ平坦である。全体的に軟質で硬化面は見られない。壁溝は検出されていない。

ピット 床面を精査したが、検出されていない。

覆土 ロームブロックを微量含む極暗褐色土の単一層である。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。



第98図 第33号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土器片18点(坏類2, 甕類16), 鉄器1点(刀子)が出土している。第98図373は南東コーナー部の覆土下層から出土している。土器片は、いずれも細片のため図示できない。

所見 本跡は北部が調査区域外に位置するため、竈を確認することができなかった。また、調査した範囲内では硬化面及び柱穴が検出されておらず、他の遺構の可能性も考えられる。本跡から出土している土器片はいずれも細片で、しかも本跡に確実に帰属するといえるものはない。そのため時期を判断することは難しいが、出土土器がおおよそ8世紀から9世紀代のものと考えられるため、その時期と推定される。

第33号住居跡出土遺物観察表 (第98図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
373	刀子	(7.1)	(1.7)	0.4	(8.1)	鉄	片断, 刀身部・茎尻欠損	南東部下層	

第34号住居跡 (第99図)

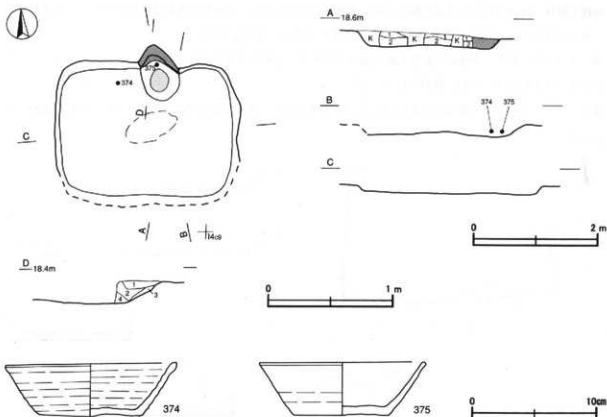
位置 調査I区北部のI4b8区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

確認状況 耕作によるトレンチャーの攪乱が著しく、遺構の遺存状況は極めて悪い。

規模と形状 長軸2.95m, 短軸2.30mの長方形であり、主軸方向はN-0°である。壁高は14~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部のわずかな部分が踏み固められている。壁溝は検出されていない。

竈 北壁のほぼ中央に付設され、火床部と煙道部が遺存する。規模は、焚口部から煙道部先端まで90cmほど、壁外への掘り込みは30cmほどである。火床面は地山面をそのまま使用したと考えられるが、赤変した部分は認められない。また、煙道は火床部から外傾して立ち上がる。



第99図 第34号住居跡・出土遺物実測図

#### 覆土層解説

- 1 灰褐色 rome 粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量  
 2 暗褐色 rome アブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック少量  
 3 暗褐色 rome 粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量  
 4 灰褐色 粘土粒子少量、砂粒中量、rome 粒子少量  
 ロック層部

ピット 床面を精査したが、検出されていない。

覆土 2層に分層される。攪乱のため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 rome 粒子中量  
 2 灰褐色 rome アブロック少量

遺物出土状況 土師器片8点(莞類)、須恵器片15点(坏類9、莞類6)が、出土している。第99図374は北壁際の覆土下層から出土している。375は火床部の奥から逆位の状態で出土している。火熱を受けており、この上には須恵器坏の破片が重ねられていたことから、支脚に転用されていた可能性がある。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。

#### 第34号住居跡出土遺物観察表(第99図)

番号	種別	器種	口径	径	高	底径	胎土	色	裏	破成	手法の特徴	出土位置	備考
374	須恵器	坏	13.5	4.3	7.9		赤褐色石片	陶灰		普通	底部回転ヘラ切り	北壁際下層	95% PL54
375	須恵器	坏	13.2	4.3	7.4		長石・石英	霞		普通	磨耗のため各器の造の遺跡不明、底部回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り	電火床部	100% PL54 二次焼成

#### 第35号住居跡(第100図)

位置 調査I区北部のI4c6区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

確認状況 耕作によるトレンチャーの攪乱が著しく、遺構の遺存状況は悪い。

規模と形状 長軸3.10m、短軸2.70mの長方形であり、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は15~25cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈前から南壁にかけて帯状に踏み固められている。また、堆積は検出されていない。

竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱が著しく、遺存状況は悪い。規模は、焚口部から煙道部先端まで95cmほど、袖部幅105cmほどで、壁外への掘り込みは20cmである。天井部は崩落しており、竈上層断面図の第2・3・9層が崩落土の一部である。袖部は基部が遺存し、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は地山面をそのまま使用したと考えられるが、赤変硬化した部分は認められない。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 覆土層解説

- 1 黒褐色 rome 粒子・砂粒少量  
 2 灰褐色 rome 粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量  
 3 赤褐色 焼土ブロック少量、砂粒少量、粘土粒少量  
 4 黒褐色 炭化物・粘土粒子・砂粒・灰少量、rome 粒子・焼土ブロック少量  
 5 灰褐色 焼土ブロック少量、砂粒少量  
 6 暗褐色 rome 粒子少量  
 7 暗褐色 rome アブロック少量  
 8 灰褐色 rome 粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量  
 9 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、砂粒少量

ピット 3か所。P1・P2は深さ10cmほどと掘り込みは浅いが、主柱穴に相当する。P3は深さ10cmで南壁寄り中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。東壁側に想定される主柱穴2か所は、攪乱のため検出されていない。

覆土 3層に分層される。攪乱を受けている部分が多いため判断が困難であるが、全体的に開開から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。第4層は掘り方理上である。

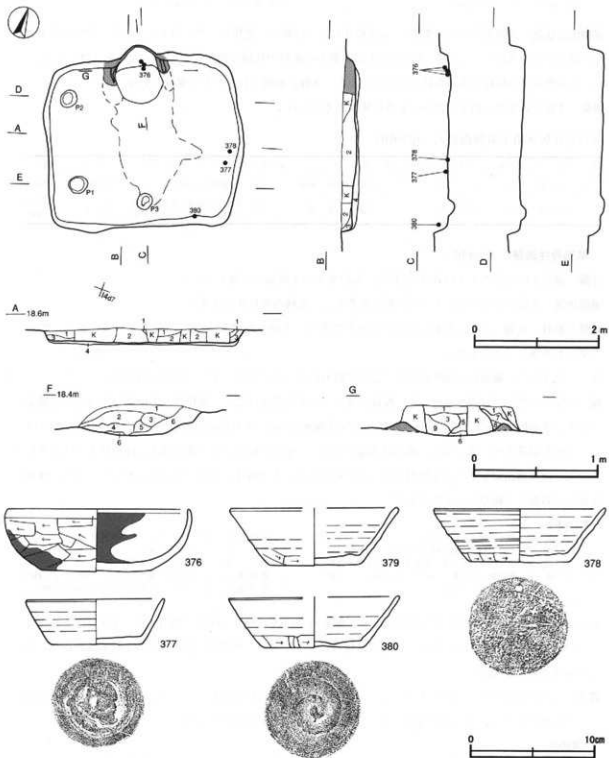
#### 土層解説

- 1 暗褐色 rome 粒子・炭化粒子微量  
 2 暗褐色 rome 粒子・炭化粒子少量  
 3 暗褐色 rome アブロック微量  
 4 暗褐色 rome 粒子中量



**遺物出土状況** 土師器片62点（坏類17、甕類45）、須恵器片45点（坏類33、甕類12）が出土している。その大半は細片で破断面が摩耗しており、本跡の埋没の過程で流入したものである。第100図377・378は東壁際の床面、380は南壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。379は覆土中から出土した破片が接合した資料であり、376は竈内から破片の状態で出土し、二次焼成を受けている。なお土師器坏の破片は、すべて古墳時代の所産と考えられるもので、本跡に伴うものは出土していない。

**所見** 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第100図 第35号住居跡・出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表（第100図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
376	土師器	坏	14.3	5.0	8.6	赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ナデ、底部多方向のヘラ削り	竈覆土中	60% PL54 二次焼成
377	須恵器	坏	10.8	3.6	7.1	雲母・石英	灰	普通	底部斜転ヘラ削り、一方向のヘラ削り	竈壁際床面	95% PL54
378	須恵器	坏	13.5	4.4	8.0	長石	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	竈壁際床面	90% PL54
379	須恵器	坏	[13.2]	4.6	[7.4]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部斜転ヘラ削り、一方向のヘラ削り	覆土中	40%
380	須恵器	坏	[13.6]	4.1	7.8	雲母・長石	にぶい黒	不良	底部斜転ヘラ削り、一方向のヘラ削り	南壁際中層	50% PL54

第37号住居跡（第101・102図）

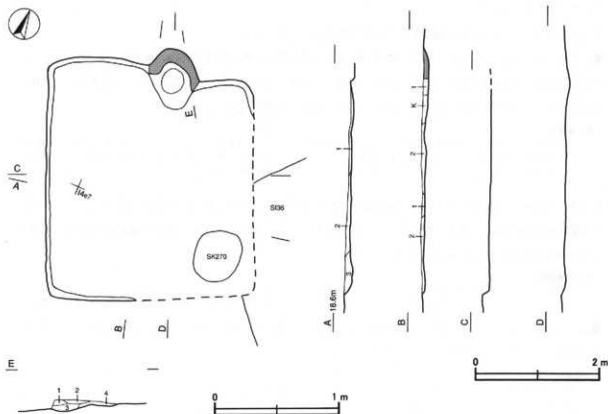
位置 調査Ⅰ区北部のⅠ4d7区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第36号住居跡を掘り込み、第270号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北壁の竈の西側は東側より40cmほど奥へ掘り込まれており、竈の東側には棚状の施設が付設されていたことが想定される。規模は、竈の東側の南北長が3.50m、西側では3.90m、東西長は3.30mである。主軸方向はN-23°-Wで、棚状の施設を含めた平面形は南北に長い長方形である。壁高は最大10cmほどで、各壁とも立ち上がり具合は判然としない。

床 ほほ平坦で、全体的に軟質の床であり、硬化面は見られない。また、壁溝は検出されていない。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、袖部は遺存しない。規模は、焚口部から煙道部先端まで95cm、壁外への掘り込みは25cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめて作られているが、火床面の赤変硬化した部分は認められない。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。



第101図 第37号住居跡実測図

#### 覆土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量  
 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒下・砂粒少量、焼土ブロック微量  
 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量  
 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量

覆土 3層に分層される。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量  
 2 暗褐色 ロームブロック中量  
 3 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片16点(甕類)、須恵器片2点(坏類)が出土している。第102図381は覆土中から出土した破片が接合した資料である。



所見 本跡から出土している土師器片はいずれも細片であるため、本跡の時期を明確にすることは難しい。出土土器は、およそ8世紀から9世紀代のものと考えられる。

第102図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表 (第102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
381	土師器	小形甕	11.6	6.11	-	赤褐色-6美	灰褐色	普通	口縁部平縁部中量、内面ヘラナテ	覆土中	10%

#### 第38号住居跡 (第103図)

位置 調査1区北部のI4g2区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第30号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.70m、短軸3.40mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈とP1にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。袖部が残存し、焚口部から煙道部まで75cm、袖部最大幅90cmほどである。煙道部は壁外へ15cmほど掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。袖部はロームで構築され、火床部は地山をわずかに掘りくぼめられて作られているが、あまり火熱を受けていない。

#### 覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量  
 2 に近い赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量  
 3 に近い赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量  
 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量  
 5 褐色 ロームブロック少量  
 6 褐色 ロームブロック少量  
 7 暗褐色 ロームブロック少量  
 8 暗褐色 ロームブロック微量

ピット 2か所。P1は深さ20cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P2は深さが10cmと浅く、覆土に焼土ブロックが含まれている。形状や位置から竈の灰溜めの可能性も考えられるが、灰が未検出のため、確定できない。

#### P2土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量  
 3 褐色 ロームブロック少量  
 4 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

覆土 11層からなる。覆土が薄いため堆積状況の判断は困難であるが、細かく分層できて各層にロームブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量  
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量  
 3 暗褐色 ロームブロック中量  
 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量  
 5 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量  
 6 褐色 ロームブロック少量  
 7 暗褐色 ロームブロック少量  
 8 暗褐色 ロームブロック微量

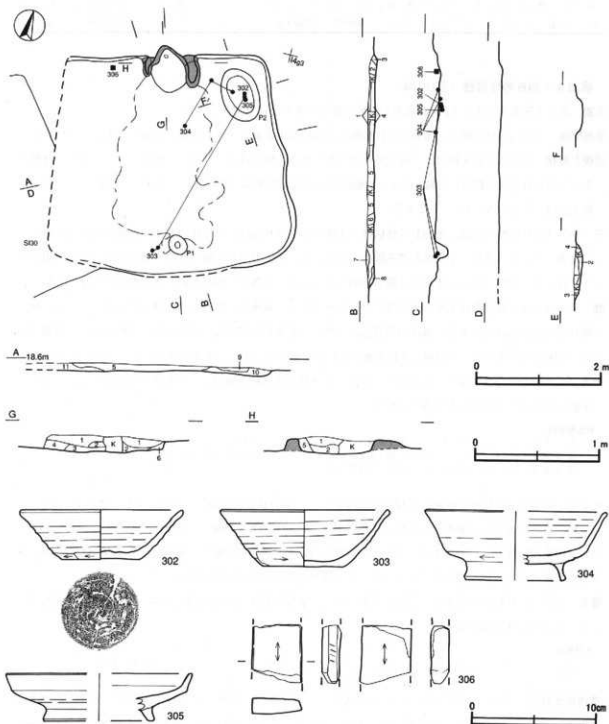
9 暗褐色 ローム粒子中量

11 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

10 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片122点(環類20, 甕類102), 須恵器片40点(環類30, 高台付環4, 盤3, 甕3), 石器1点(砥石)が出土しており, 土器片の中で底部片などから推定される個体数は, 土師器環1点, 土師器甕2点, 須恵器環5点, 須恵器高台付環1点, 須恵器盤1点である。これらの遺物は, 全体的に覆土上層から床面にかけて出土している。出土状況から, 304は本跡に伴う土器と考えられる。

**所見** 本跡の時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第103図 第38号住居跡・出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
302	須恵器	坏	12.8	4.0	6.2		石英・雲母	灰黄	普通	東5段北へ9振り北、古内へ9振り	P 2 内	60% PL54
303	須恵器	坏	13.3	1.6	6.5		長石・石英・雲母	黒灰	普通	東部・方向へのヘラ削り	P 2 内・南	70% 二次焼成 PL54
304	須恵器	高台付坏	14.4	5.5	8.2		長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体下部回転へのヘラ削り	中央部(南) P 2 内	45% PL54
305	須恵器	盤	11.7	3.9		[8.8]	石英・雲母	灰黄	普通	高台削り付け後、コロコナヤ	P 2 内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
305	砥石	(4.7)	4.1	1.3	(48.0)	凝灰岩	砥面4面	北西部下層	PL66

## 第39A・39B号住居跡 (第104図)

位置 調査1区北部のI 4 f 2 区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第39A号住居跡は、第39B号住居跡の上部に貼床を施し、壁を四方に拡張して構築されている。

規模と形状 第39A号住居跡は、一辺2.95mの方形である。壁高は5～9cmで、壁の立ち上がり具合は割然としない。第39B号住居跡は、長軸2.65m、短軸2.60mの方形である。壁高は15～20cmで、外傾して立ち上がる。主軸方向は、ともにN-14°-Wである。

床 第39A号住居跡の床は、第39B号住居跡の床面上に厚さ10cmほどの貼床(覆土土層断面図の第3層)を施して構築され、ほぼ平坦で中央部が踏み固められている。第39B号住居跡の床は、地山のロームを平坦に掘り込んで作られ、東西の壁沿いを除いて踏み固められている。壁溝は、両住居跡ともに検出されていない。

竈 第39A号住居跡の竈は北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部先端まで85cm、壁外への掘り込みは18cmほどである。袖部の遺存状況は悪く、左袖の基部付近のみが遺存し、砂質粘土で構築されている。火床部は北壁ラインの内側に床面を掘りくぼめて作られており、火床面はわずかに赤変している。また、煙道は火床部から急な角度で立ち上がる。なお、第39B号住居跡の竈は、その痕跡が検出されないことから、同位置で作り替えが行われたと考えられる。

## 覆土層解説

- |                              |                         |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量      | 4 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量   | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量   |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |                         |

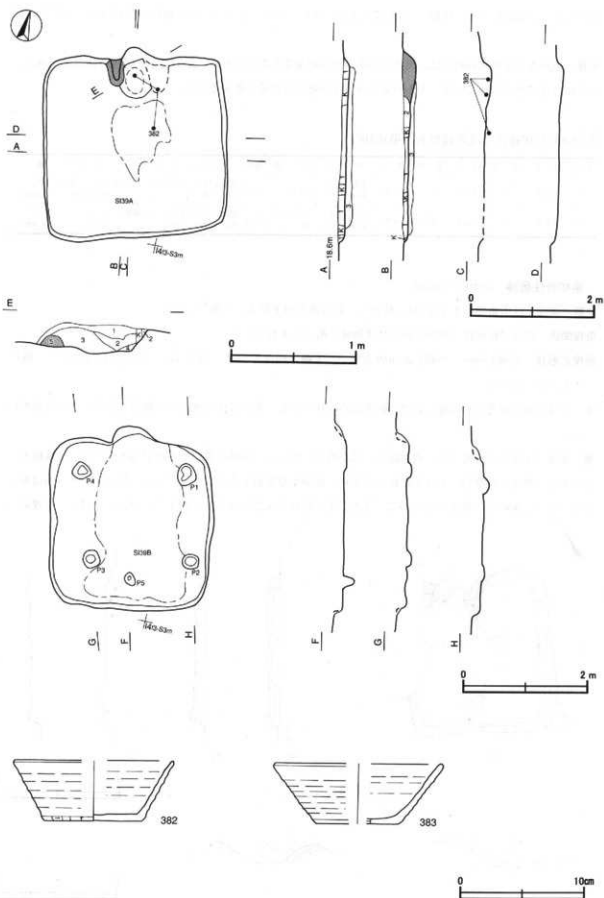
ピット 第39A号住居跡の床面では検出されなかった。第39B号住居跡は5か所。P1～P4は、深さ5～10cmと掘り込みは浅いが、配置から支柱穴に相当する。P5は、深さ20cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。なおP5の覆土は、P1～P4の覆土と比較してしまりが少ないため、第39A号住居跡の出入り口施設に伴うピットとしても使用されていた可能性がある。

覆土 第39A号住居跡の覆土は、2層に分層される。層厚が最大で10cmと薄いため、堆積状況は不明である。なお、第39B号住居跡の覆土は、存在しない。

## 土層解説

- |                            |                     |
|----------------------------|---------------------|
| 1 褐色 ロームブロック中量             | 2 暗褐色 ロームブロック中量(貼床) |
| 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |                     |

遺物出土状況 第39A号住居跡からは、土師器片37点(坏類2、甕類35)、須恵器片13点(坏類12、甕類1)が出土している。第104図382は竈覆土中、竈前の床面及び第39A号住居跡の貼床中から出土した破片が接合した資料であり、竈覆土中からのものは二次焼成を受けている。383は覆土中からの出土である。第39B号住居



第104图 第39A·39B号住居跡，第39A号住居跡出土遺物実測図

跡からは、土師器片2点(坏類)、須恵器片3点(坏類)が出土しているが、細片のため図示できるものはない。

所見 第39A号住居跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と推定される。第39B号住居跡の時期は、第39A号住居跡に建て替えられていることから第39A号住居跡より以前と推定される。

#### 第39A号住居跡出土土器観察表(第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
382	須恵器	坏	[12.6]	4.8	[7.8]	雲母・長石・石英	暗灰	普通	底部回転ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	竈内、裏面床面貼床中	25%二次焼成
383	須恵器	坏	[13.2]	4.8	[6.6]	雲母・長石・石英	にぶい赤褐色	普通	磨耗のため底部下端の調整不明、底部ヘラ削り	覆土中	15%二次焼成

#### 第40号住居跡(第105・106図)

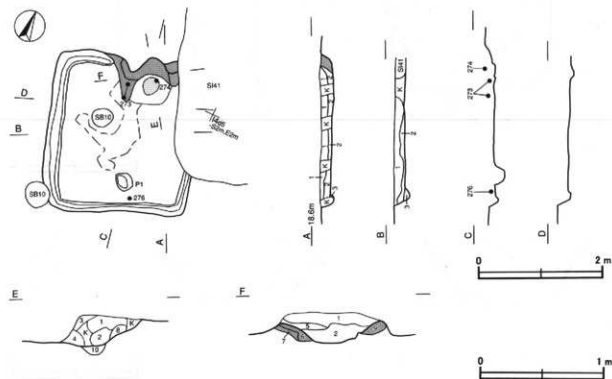
位置 調査I区南東部のI4d5区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第41号住居跡・第10号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.60m、短軸2.35mの方形で、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は15cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で中央部から竈にかけて踏み固められている。第41号住居跡との重複部分を除き、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設され、両袖部の一部が残存している。規模は焚口から煙道部まで75cm、袖部最大幅90cmである。煙道部は壁外へわずかに掘り込まれ、緩やかな傾斜で立ち上がっている。第6・7・9層は袖部であり、ロームを中心に構築されている。また、第10層は火床部の掘り方の埋土で、ロームブロックを埋め込



第105図 第40号住居跡実測図

で火床面を作り出している。火床面はあまり火熱を受けていない。

甕土層解説

1 黒暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	7 褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	8 褐色	ロームブロック多量
4 暗褐色	ロームブロック少量	9 褐色	ロームブロック多量
5 黒暗褐色	ローム粒子少量	10 黒褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・砂粒微量

ピット 1か所。深さ15cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

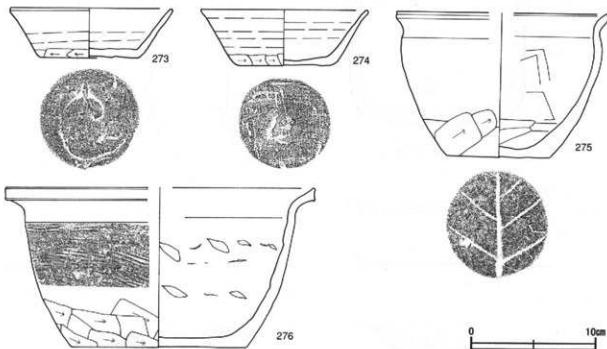
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積で、第3層は壁溝の堆積土である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	3 暗褐色	ロームブロック中量
2 黒暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量		

遺物出土状況 土師器片69点（坏類3，甕類65，鉢1），須恵器片11点（坏類9，鉢2）が出土している。これらの遺物は、竈内とその周辺を中心に出土し、274は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第106図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表（第106図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
273	須恵器	坏	12.8	4.0	7.5	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラ磨り	左軸部上	70% PL55
274	須恵器	坏	13.3	4.5	7.6	燧・長石・石英	暗灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラ磨り	甕覆土上層	90% PL55
275	土師器	鉢	[17.6]	11.6	8.2	石英・雲母・燧	赤	普通	口縁部内・外面横ナデ	甕土上層	80%
276	須恵器	鉢	[24.4]	12.8	14.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口縁部内・外面横ナデ、底部内面当て具	南壁際中層	60% PL55

第41号住居跡（第107図）

位置 調査I区南東部のI4d5区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

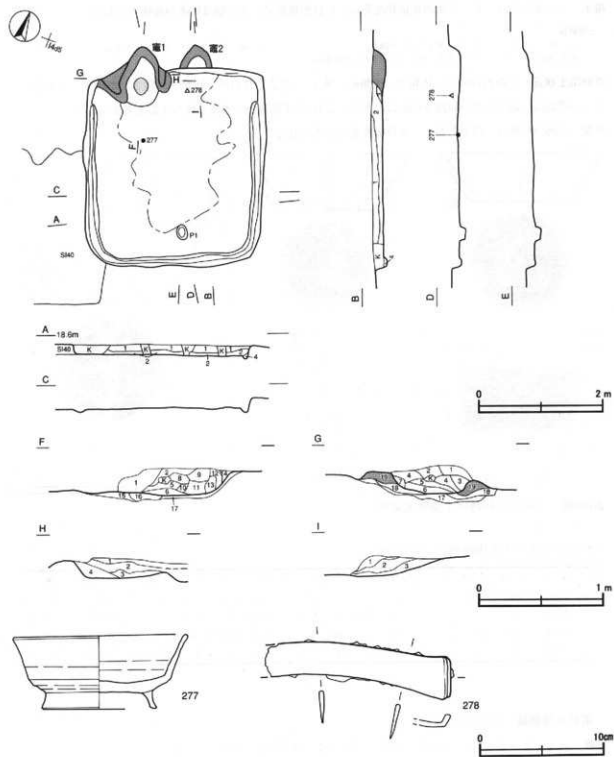
重複関係 第40号住居跡を掘り込んでいる。



規模と形状 長軸3.00m、短軸2.80mの方形で、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部から竈にかけて踏み固められている。東壁から西壁にかけて壁溝が巡っている。

竈 北壁の西部に竈1、中央部に竈2が付設されている。竈1は袖部が残存し、焚口から煙道部まで95cm、袖部最大幅115cmである。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、緩やかな傾斜で立ち上がり、火床面はほぼ平坦で、わずかに赤変している。第15～17層は掘り方の埋土、第18層は袖部の基部、第19層は袖部で、ロームで作



第107図 第41号住居跡・出土遺物実測図

られた基部の上に、ロームを混ぜた粘土と砂で袖部が構築されている。基部や袖部には敷層ではあるが焼土が含まれており、作り替えが行われている。また、竈2は壁外に45cmほど掘り込まれた煙道部が残存しているだけで、竈2から竈1への作り替えが考えられる。

#### 竈1土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	11	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
2	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	12	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	13	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒微量	14	暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
5	暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	15	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
6	暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	16	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
7	灰褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	17	褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック微量
8	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量	18	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	19	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
10	暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒微量			

#### 竈2土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2	にぶい赤褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量	4	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量

ピット 1か所。深さ10cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

覆土 4層からなり、第2層から流れ込むレンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第4層は壁溝の堆積土である。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量	3	灰褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量
2	暗褐色	ロームブロック少量	4	褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片83点(坏類6、甕類77)、須恵器片33点(坏類11、高台付坏2、甕類20)、鉄器1点(鏝)が出土しており、土師器片の中で底部片などから推定される個体数は土師器甕2点、須恵器坏3点、須恵器高台付坏1点、須恵器甕1点である。これらの遺物は、竈周辺の覆土下層から床面を中心に出土している。277は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

#### 第41号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
277	須恵器	高台付坏	13.7	5.9	8.8	長心G系雲母	灰白	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	中央部床面	70%	PL55
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考		
278	鏝	(15.0)	3.4	0.35	(43.6)	鉄	刃部先端欠損、歯刃磨(刃鏝)		北部中層	70%	PL67	

#### 第42号住居跡(第108図)

位置 調査I区南東部のI4e6区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.60m、短軸3.40mの方形で、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は5cmほどで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

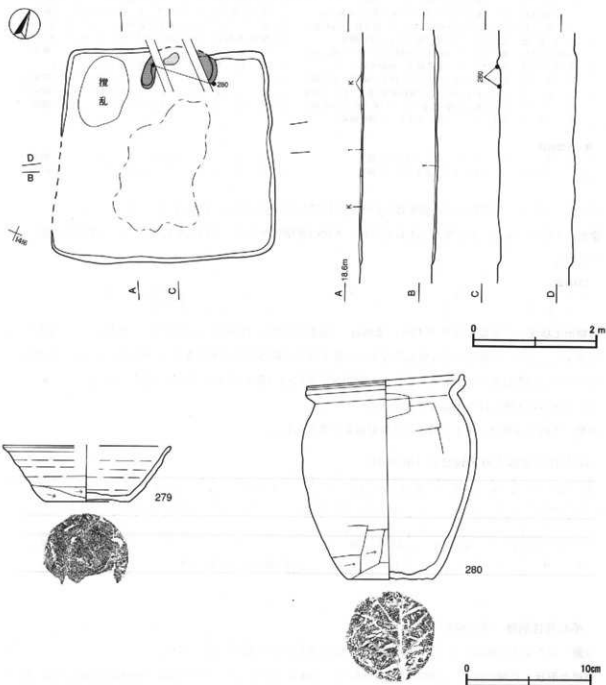
床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。天井部と煙道部は視認を受け、火床部と袖部の一部が残存しているだけである。袖部最大幅120cmで、煙道部の規模と形状は不明である。火床面はほほ平坦で、あまり火熱を受けていない。

覆土 ローム粒子が微量含まれる黒褐色土の1層からなり、覆土が薄く、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片97点(坏類3, 甕類94), 須恵器片9点(坏類5, 盤3, 甕類1)が出土している。これらの遺物は, 中央部から北部の床面を中心に出土している。出土状況から, 280は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第108図 第42号住居跡・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
279	須恵器	坏	[13.3]	4.0	6.7	長石・雲母	にぶい橙	不良	底面縁へラ割り長, 多方向のへラ割り	覆土上層	60%
280	土師器	小形甕	12.4	16.5	7.0	石灰質スリット	にぶい赤褐	不良	口縁部内・外面滑ナテ, 底部内面へラナテ	覆土・右端部	70%

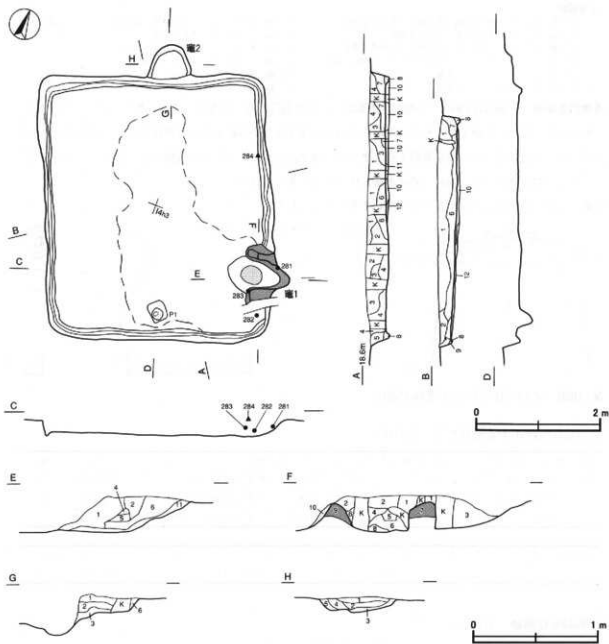
第43号住居跡 (第109・110図)

位置 調査I区南東部のI4h2区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.30m、短軸3.70mの長方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は18~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈1と竈2にかけて踏み固められている。壁溝が周囲に回っている。

竈 東壁の南寄りに竈1、北壁の中央に竈2が付設されている。竈1は袖部が残存しており、焚口から煙道部まで100cm、袖部最大幅100cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれ、緩やかな傾斜で立ち上がっている。第7・9層は袖部で、地山を掘り残した基部の上に、ローム・粘土・砂で袖部が構築されている。火床部はほぼ平坦に作られており、赤変硬化している。また、竈2は壁外に50cmほど掘り込まれた煙道部が残存しているだけで、竈2から竈1への作り替えが考えられる。



第109図 第43号住居跡実測図

### 窟1土層解説

- |          |                            |         |                            |
|----------|----------------------------|---------|----------------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子中量、焼土ブロック微量           | 7 暗赤褐色  | 焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量 |
| 2 黒褐色    | ローム粒子少量                    | 8 褐色    | ローム粒子中量、焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |
| 3 暗褐色    | ロームブロック少量                  | 9 褐色    | ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量   |
| 4 灰褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 | 10 黒褐色  | ローム粒子少量                    |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量         | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子少量           |
| 6 暗赤褐色   | ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |         |                            |

### 窟2土層解説

- |        |                       |       |                  |
|--------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量           | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量   |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色  | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 3 褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量          |

ピット 1か所。深さ24cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

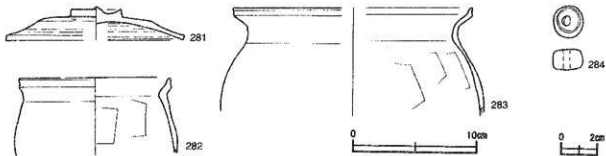
覆土 12層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第8・9層は壁溝の堆積土、第10～12層は掘り方の埋土で、第10・12層は締まりが強い。第5層は第6層と含有物が同じだが色調が暗い。

### 土層解説

- |       |                       |        |                     |
|-------|-----------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 7 灰褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量        | 8 褐色   | ローム粒子中量             |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 9 暗褐色  | ローム粒子少量             |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色  | ロームブロック多量           |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量             | 11 暗褐色 | ロームブロック中量           |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量             | 12 暗褐色 | ロームブロック中量           |

遺物出土状況 土師器片240点（坏類33、甕類207）、須恵器片43点（坏類13、蓋3、鉢1、鉢1、甕・瓶25）、土製品1点（土玉）が出土しており、土器片の中で底部片などから推定される個体数は、土師器甕3点、須恵器坏1点、須恵器蓋1点、須恵器鉢1点、甕1点、瓶1点である。これらの遺物は主に窟内やその周辺で出土している。出土状況から、281・283は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第110図 第43号住居跡出土遺物実測図

### 第43号住居跡出土遺物観察表（第110図）

番号	性別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
281	須恵器	甕	11.0	2.6		（東葉）ハシ	褐色	普通	天井部・四角のヘラ残り	壁溝底部	45%
282	土師器	小形甕	11.9	16.1		石灰・雲母	黒褐色	普通	11層部内・外面横ナテ	裏石無縁1層	20%
283	土師器	甕	19.2	18.3		（東葉）ハシ	褐色	普通	口縁部内・外面横ナテ	裏石無縁1層	5%

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
284	土玉	1.1	1.7	0.5	2.86	土製		外面ナテ	粘土に砂粒	東葉階上層	100% Pt.63

### 第44号住居跡（第111図）

位置 調査1区南東部のI 4 15区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.00m、短軸2.60mの長方形で、主軸方向はN-37°-Eである。壁高は10cmほどで、外壁

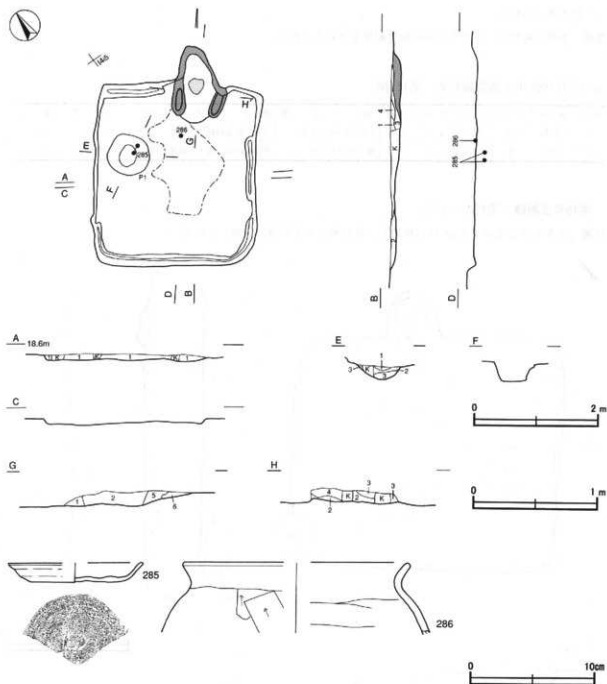
して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈にかけて踏み固められている。西壁下と北東壁下を除いて燻溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設され、袖部が残存している。規模は焚口から煙道部まで125cm、袖部最大幅85cmである。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、緩やかな傾斜で立ち上がっている。袖部はローム・粘土・砂で構築され、火床部はほぼ平坦に作られているが、あまり火熱を受けていない。

竈土層解説

- |       |                       |         |                          |
|-------|-----------------------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量        | 4 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量   |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 | 5 極暗褐色  | ローム粒子・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化物・粘土ブロック・砂粒少量 | 6 暗褐色   | ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 |



第111図 第44号住居跡・出土遺物実測図

ピット 1か所。性格は不明である。

P 1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量  
2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

覆土 4層からなるが、覆土が薄く、堆積状況の判断は困難である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 3 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック微量 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片76点(坏類16, 甕類58, 小皿2), 須恵器片15点(坏類8, 甕類7)が出土している。これらの遺物は、おもに中央部の覆土下層から床面にかけて出土している。285・286は出土状況から本跡に伴う土器と考えられる。

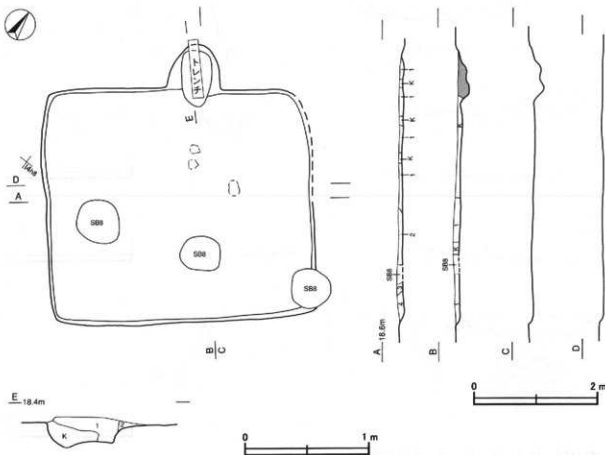
所見 本跡の時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。

第44号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
285	土師器	小皿	[10.6]	1.5	[7.2]	石灰雲母砂粒	赤褐	普通	底部回転ヘタ切り	P 1内	50%
286	土師器	甕	[17.6]	(5.5)	—	礫・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	5%

第45号住居跡 (第112・113図)

位置 調査I区北部のI 4 g 8区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。



第112図 第45号住居跡実測図

**重複関係** 第8号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.30m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は4~10cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほほぼ平坦で、中央部がやや踏み固められている。

**竈** 北西壁の中央部に付設され、天井部と袖部は残存していない。規模は焚口部から煙道部まで100cmほどで、煙道部は壁外へ70cmほど掘り込まれており、緩やかに傾斜して立ち上がっている。火床部は地山を掘りくぼめられて作られ、あまり火熱を受けていない。

**埋土層解説**

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量

**覆土** 4層からなるが覆土が薄く、堆積状況は不明である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片57点（坏類21、甕類36）、須恵器片8点（坏類7、蓋1）が出土している。



第113図 第45号住居跡出土遺物実測図

**所見** 本跡の時期は、覆土中の出土土器から9世紀前半と推定される。

**第45号住居跡出土遺物観察表（第113図）**

番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
287	須恵器	坏	13.6	4.6	8.2		赤土系雲母	灰	普通	底面壁へ傾り地、古20へ入り	覆土中	100% PLSS

**第46号住居跡（第114図）**

**位置** 調査1区南東部のI4h0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

**重複関係** 第272号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.20m、短軸3.10mの方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がる焼失家屋である。

**床** ほほぼ平坦で、中央部から竈にかけて踏み固められ、壁溝が周囲している。

**竈** 北壁の東寄りに付設され、袖部が残存している。規模は焚口から煙道部まで100cm、袖部最大幅104cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。第12層は掘り方の埋上、第13~14層は袖部の基部、15層は袖部で、ロームを埋め込んで平坦な火床部と袖部の基部が作り出され、粘土・砂・ロームで袖部が構築されている。火床部はあまり火熱を受けていない。

**埋土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量  
2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 10 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量  
3 灰褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 11 暗褐色 焼土ブロック中層、ロームブロック少量  
4 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、粘土粒子・砂粒微量 12 暗褐色 ロームブロック中層  
5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子・砂粒微量 13 暗褐色 ローム粒子中層  
6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 14 褐色 ロームブロック多量  
7 暗褐色 ローム粒子中層、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 15 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒中層  
8 暗褐色 ロームブロック中層、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量

**ピット** 1か所。深さ30cmで、南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

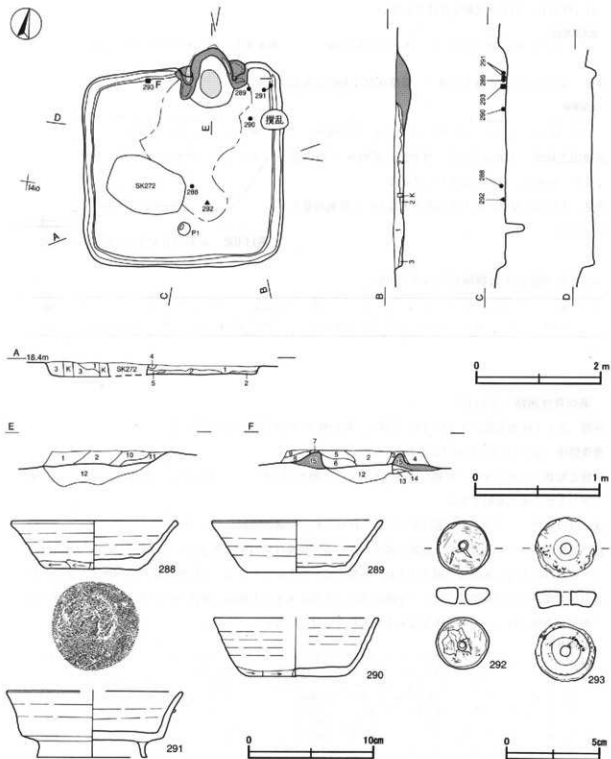


覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |       |                        |       |         |
|-------|------------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量     | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量              | 5 紫褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化材微量 |       |         |

遺物出土状況 土師器片49点(環類1, 甕類48), 須恵器片67点(環類58, 甕類9), 土製品2点(支脚, 紡錘車), 石製品1点(紡錘車)が出土している。また, おもに南部の床面から炭化材が確認され, 焼失家屋と想



第114図 第46号住居跡・出土遺物実測図

定される。

所見 本跡は焼失家屋と想定されるが、二次焼成を受けた遺物が出土していないために住居の機能時の焼失とは考えられない。また、床面に炭化材が確認されていることから、焼絶直後に焼失した可能性が高いが、炭化材や焼土の検出量が少ないため、火災後に焼失物の処理が行われたか、または焼絶前に家屋の一部が再利用のために取り除かれ、残されたものが焼失したと推定される。本跡の時期は、覆上下層の出土土器から8世紀後半と考えられる。

#### 第46号住居跡出土遺物観察表(第114区)

番号	種別	器種	口径	器高	取径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
288	須恵器	坏	13.0	4.0	7.1	赤褐色の土	灰	普通	底面中央へ張り出し、多方向への張り出し	中央部下層	100% PL.55
289	須恵器	坏	13.3	4.3	7.9	黒・石黄・赤褐色	黒褐色	不良	底面中央へ張り出し、多方向への張り出し	北東部下層	95% PL.55
290	須恵器	坏	13.0	4.7	7.6	長石・石黄・赤褐色	暗灰黄	普通	底面多方向への張り出し	北東部床面	50%
291	須恵器	高台付坏	13.9	5.6	8.7	黒・黒色粒子	暗灰	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	北東部下層	65% 電射品

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
292	紡錘車	4.2	4.2	1.3	35.4	土製	外面へ張り出し、半球形、胎土極めて堅緻	中央部床面	100% PL.63
293	紡錘車	4.7	4.9	1.4	42.8	滑石	添付器	北東部下層	100% PL.65

#### 第47A号住居跡(第115・116区)

位置 調査Ⅰ区中央部のJ4c0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第47B号住居跡の上に構築して拡張されており、第58号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.10m、短軸5.10mの長方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は5~18cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。また、第47B号住居跡とは主軸方向がほぼ一致し、南東壁が同じであるが、他の壁は第47B号住居跡のそれよりも外方に20cmほど拡張されている。

床 ほぼ平坦で、竈とP3からP4にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。袖部が残存し、焚口から煙道部まで110cm、袖部最大幅120cmである。

煙道部は壁外へ10cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。第5~9層は袖部で、ロームを埋め込んでから粘土・砂・ロームを積み上げて構築され、火床面はあまり火熱を受けていない。

##### 壁土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	6	にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量	7	にぶい褐色	ローム粒子中量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	8	暗褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、焼土粒子・ローム粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量			
5	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは35~47cmである。P5は深さ30cmほどで、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

覆土 18層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第12~18層は、第47B号住居跡の床面に貼られた貼土の層である。

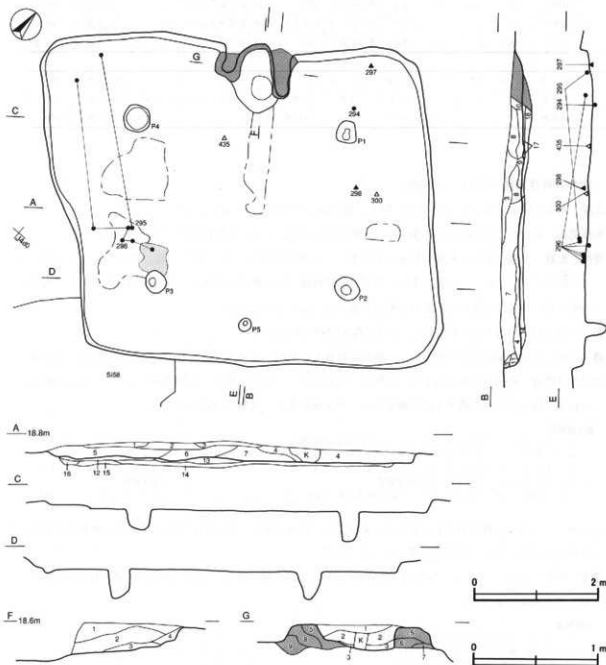
##### 土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	5	黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量
2	黒褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ロームブロック微量	6	黒褐色	焼土ブロック中量、炭化物微量
3	黒褐色	砂粒少量、焼土ブロック微量	7	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量
4	黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	8	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量

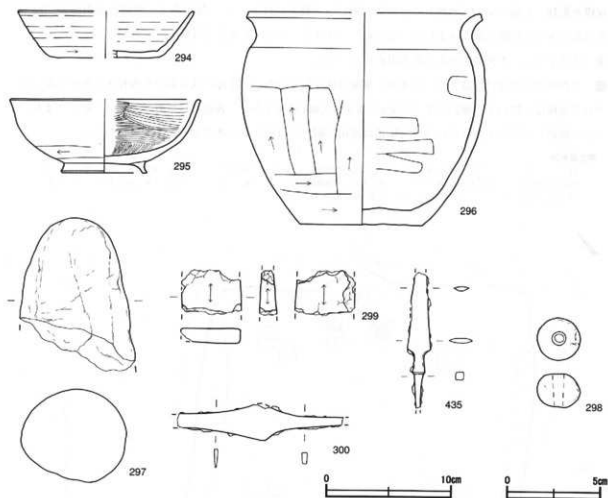
- |        |                       |         |                           |
|--------|-----------------------|---------|---------------------------|
| 9 暗褐色  | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量    | 14 黒褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土ブロック微量   |
| 10 黒褐色 | 焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック微量 | 15 黒褐色  | ロームブロック少量                 |
| 11 暗褐色 | ロームブロック微量             | 16 暗褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック少量           |
| 12 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量      | 17 黒褐色  | 粘土粒子中量、焼土ブロック・砂粒少量        |
| 13 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量      | 18 黒暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片313点（坏・高台付坏・高台付碗36, 甕類277), 須恵器片69点（坏・高台付坏42, 蓋1, 甕1, 甕類25), 土製品3点（支脚2, 球状土錘1), 鉄器2点（刀子）が出土しており, 土器片の中で底部片などから推定される個体数は, 土師器高台付坏・碗5点, 土師器甕4点, 須恵器坏2点, 須恵器高台付坏1点, 須恵器蓋1点, 須恵器甕1点である。これらの遺物は, 全体的に覆土中層から下層にかけて出土している。

**所見** 本跡は第47B号住居跡が拡張された住居と考えられ, 軸方向がほぼ一致し, 南東壁を同じくするが, 他の壁や主柱穴は第47B号住居跡の壁や主柱穴よりも外方にある。本跡の時期は, 覆土下層の出土土器から10世紀前半と推定される。



第115図 第47A号住居跡実測図



第116図 第47A号住居跡出土遺物実測図

第47A号住居跡出土遺物観察表 (第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
294	須壺器	坏	[14.0]	3.8	[8.6]	粉粒・黒色粒子	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	北部床面	30%
295	土脚器	高台付 坏	[14.9]	4.0	6.8	石英・砂粒	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り、高台 貼り付け後口ロナテ	西部中層	40%
296	土脚器	甕	[17.7]	16.9	9.7	礫・石英・雲母	黒褐	不良	体部上部ナテ、下部ヘラ削り	西部中層・床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
297	支脚	(12.2)	(9.2)	7.5	(537.0)	土製	外面ナテ、胎土に長石・石英・バミス含む	北部床面	
299	砥石	( 3.6)	(4.7)	1.4	( 28.6)	凝灰岩	砥面3面、両端部欠損	覆上下層	
300	刀子	(13.0)	(2.8)	0.4	( 23.5)	鉄製	刃部・基部先端欠損、両面あり	東部床面	60% PL67
435	簾	(10.8)	1.8	0.6	( 17.2)	鉄製	簾歯部と基部先端欠損、三角形または長三角形	中央部下層	70% PL67

番号	器種	厚さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
298	球状土練	1.8	2.3	0.6	8.0	土製	外面ナテ、胎土にバミス含む	東部下層	100% PL63

### 第47B号住居跡 (第117図)

位置 調査Ⅰ区中央部のJ4c0区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第58号住居跡を掘り込み、第47A号住居跡に上部が掘り込まれている。

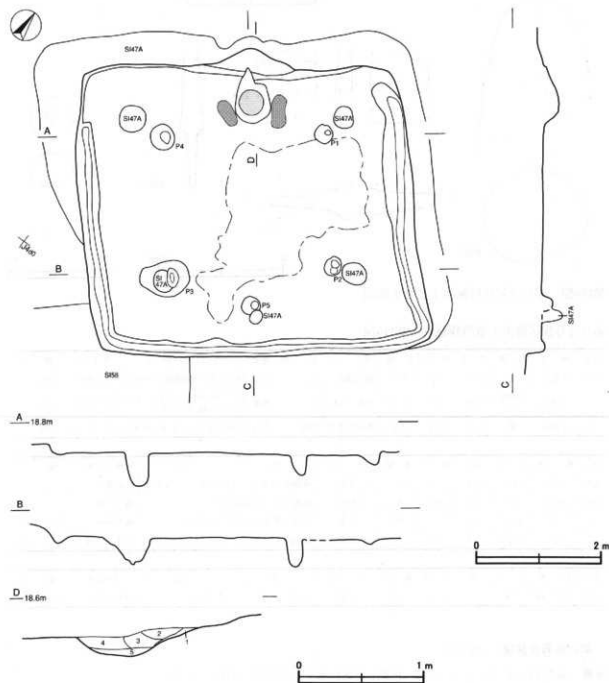
**規模と形状** 長軸5.30m、短軸4.65mの長方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は南西壁が25cmで、他は第47A号住居跡に掘り込まれているため、5cmほどである。各壁とも外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められている。

**竈** 北西壁の中央部に付設され、天井部や袖部は残存していない。床面に残る粘土や残存する煙道部から推定される規模は、焚口から煙道部まで150cm、袖部最大幅130cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれ、緩やかに傾斜して立ち上がっている。火床部は地山を掘りくぼめて作られており、赤変硬化している。

**竈土層解説**

- |   |       |                            |   |        |                          |
|---|-------|----------------------------|---|--------|--------------------------|
| 1 | 暗色    | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 | 4 | にぶい赤褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 |
| 2 | 極暗赤褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量   | 5 | 暗褐色    | ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒微量        |
| 3 | 極暗赤褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量 |   |        |                          |



第117図 第47B号住居跡実測図

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4で、深さは33～56cmである。P5は深さ20cmほどで、南東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

遺物出土状況 土師器片37点（坏類5，甕類32），須恵器片16点（坏類13，短頸壺1，甕類2）が出土している。いずれも細片で図示できるものはない。

所見 本跡は出土土器が細片であるが、本跡を拡張している第47A号住居跡が10世紀前半と推定されるため、時期は、それよりもあまり時期が隔たっていない9世紀末葉から10世紀初頭と推定される。

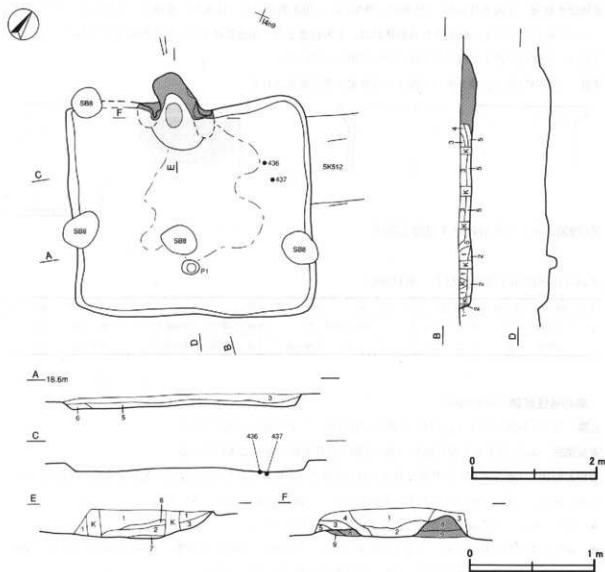
#### 第48号住居跡（第118・119図）

位置 調査I区北部のI4h9区に位置し、低台地上の平坦部に立地している。

重複関係 第512号土坑を掘り込み、第8号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.70m，短軸3.50mの方形で，主軸方向はN-30°-Wである。壁高は12～18cmで，各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 中央部がやや高まり，その部分から竈前にかけて踏み固められている。



第118図 第48号住居跡実測図